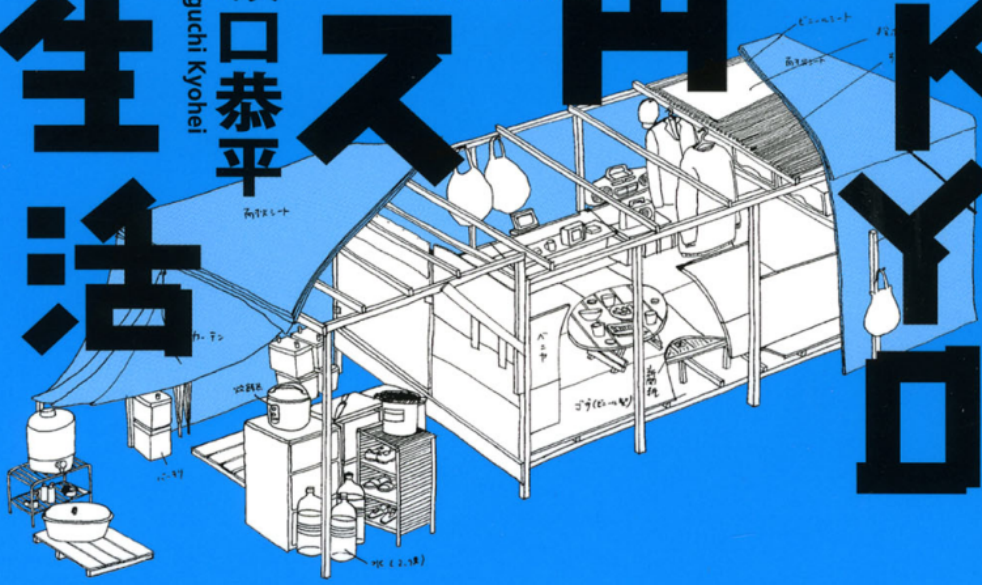
TOKYO
0円ハウス
0円生活
TOKYO
ZERO YEN HOUSE
ZERO YEN LIFE
坂口恭平
Sakaguchi Kyohei

河出文庫

ＴＯＫＹＯ ０円ハウス ０円生活

坂口恭平

はじめに

「東京では１円もかけずに暮らすことができる。こんな街は他ほかにないよ」

　驚くべきこの謎なぞの言葉を聞いたのは２００６年12月のことだった。場所は隅すみ田だ川がわの川沿い。隅田川といえば花火大会。それも有名だが、もう一つランドマーク的な存在のものがある。それはブルーシートハウス群だ。そこにはいわゆる、

「ホームレス」

　と呼ばれる人たちが住んでいる。路上の家のことだ。

　僕はこの日、ブルーシートハウス群の１軒の中で１人のオジさんからこの言葉を聞いた。今まで考えたこともなかったことなので驚いたし、信じられなかった。

　オジさんは、

「鈴すず木きです」

　とすぐ名前を教えてくれた。そのこともまた僕を驚かせた。

「本当に１円もかからないんですか」

　やっぱり信じられなかったので、もう１回聞いてみた。

「本当だよ。０円で家も建てられるし、テレビも見られる」

「テレビ？」

「そうだよ。ほら」

　そこには小型のテレビが２台もあった。

　一体どういうことなのか。僕は訳が分からなかった。でも鈴木さんはニコニコしている。おそらくそれは本当なのだろうと確信した。目の前のガラスのコップには、鈴木さんがくれた焼しよう酎ちゆうがストレートで入っていた。僕はそれをグビッと飲んでこう言った。

「鈴木さんの０円生活の極意、教えて下さい」

そもそも、なぜ僕が隅田川のブルーシートハウスの中にいたのだろうか。

僕は新聞記者ではない。テレビ局の者でもない。支援団体の人間でもない。大体、職業がはっきりしていない。

強いていえば、「建築に携わっている者」かもしれない。といっても建築物を設計しているわけでもない。だから建築家ではない。建築史を研究しているわけでも、構造計算をしているわけでも、不動産関係の仕事をしているわけでもない。

じゃあなんだ。僕もよく分からない。なんでこうなってしまったのかは徐々に説明していこうと思っている。しかし、まぁよくもこういうあいまいな状態でいるもんだと自分でもびっくりしてしまう。いつかきちんと分かりたいものだと願ってもいる。

簡潔に説明すると、僕は大学では建築の勉強をしていた。元々は設計・デザインを専攻していた。しかしそのまま設計事務所などで設計活動を始めて都市の中に建築物を作るのではなく、現在は路上生活者の家などを調査したりしている。その調査は、

『０円ハウス』（リトル・モア　２００４）

という本として出版されている。路上生活者の家の写真集なのであるが、僕はそれを総工費０円の家という捉とらえ方で集めてみた。「ホームレス」なんかではなくて、レッキとした「家」だったからだ。

写真集を出したからといって写真家であるかというと、そうでもない。別に写真は自分にとってそんなに重要ではないのである。といって、本を出版したから作家というわけでもないと思う。こんなことダラダラ書いても読んでいる人はどうでもいいのかもしれない。どんどん先へ進めていこう。

やっぱり建築には興味がある。それは確かだ。しかし、それは建築家が設計したようなものに対しての興味ではない。むしろその真逆だ。デザインされているわけではないもの。つまり専門家が作ったも

のではない建築。いや、建築だけでなく生活や環境も含めた空間全体。それが、僕が気になっているものだ。

　そういう観点で０円ハウスを見てみると、専門家の特別なデザインよりも、人間が元から持っている本能的な生活デザインの方が、これからライフスタイルが変化していくであろう中で、多くの示唆に富んでいることが分かる。そして、鈴木さんの家や生活にはその中でも特に考え抜かれたアイデアが詰め込まれていたのだ。この本は、それを克明に記録しようという発想からスタートした。

　鈴木さんと会話を続けるに従って、お金を払ってただ買うだけの存在になってしまった現在の家と、都市のゴミを材料に自分だけの空間を自力で作ろうとする０円ハウスの間に、ドカンと横たわる矛盾が見えてきた。そして、その矛盾は僕が建築家を目指しながら、違う方向へ行ってしまったことと妙にシンクロしていったのである。そのためこの本には、時折僕のこれまでの行動なども入ってきている。

　とにかく話を始めてみよう。

坂さか口ぐち恭きょう平へい

ＴＯＫＹＯ ０円ハウス ０円生活◎目次

第１章　総工費０円の家

隅すみ田だ川がわのブルーシートハウス

　快晴の東京。僕は隅田川の川沿いにいた。南みなみ千せん住じゆ駅から歩いて泪なみだ橋ばし交差点を渡り、山ヤマ（山さん谷やのこと）と呼ばれるドヤ街を抜けていくのがいつものコースだ。この日も白しら鬚ひげ橋ばし高架下から川沿いの遊歩道に入っていった。

　ここにはたくさんのブルーシートハウスが立ち並んでいる。非常にシンプルな形で、どれも似たようなブルーの箱の家が並んでいる。それでもよく見ると微妙に違う。久々に訪れた隅田川では以前あった家がなくなったり、変化していたりした。僕は知り合いのところに顔を出して話をしたりした。そうやって歩いていたら、ふと１軒の家が目に入った。今まで訪ねたことがないところだった。

　外から見たら、なんの変哲もないブルーシートで包んである０円ハウスである。普通に通り過ぎようとすると、なんだか音がジュージューと鳴っている。いい香りがするので近くに行って見てみると、玄関の前で料理をしている。玄関の前には屋根があり、棚を積み上げてキッチンになっていた。

　しかも、料理をしているのは女性だった。僕はそれまで女性の路上生活者にほとんど話を聞いたことがなかった。

「すいませーん」

　ジュージューいっている中、声をかけてみた。

「ちょっと待って」

　と言って、女性は玄関を開け、部屋の中に入ってしまった。

　驚いてしまったのかもしれない。これは悪いことをしたと思って立ち去ろうとすると、中から女性に代わって男性が出てきた。

「何か用ですか？」

なんとカップルで暮らしていたのだ。男性は気さくそうな人だった。お酒を飲んでいたのだろう。顔はほのかに赤くなっている。そしてすがすがしい顔をしていた。その顔と、カセットコンロで普通に料理をしているカップルという図に、なんというか、今まで話を聞いてきた人たちとはまた一味違う雰囲気を感じた。落ち着いているように見えたし、何よりも豊かな印象を受けた。

「なんだろう、この感覚は……」

僕は直観的に、この人たちと長く話すようになるかもしれないと思った。

フライパンの上の餃ギヨ子ーザはいい感じに焼けている。

「今から食事ですか」

「おう。そうだよ。食事というか、お酒だよ」

なんの警戒もなく、無茶苦茶気さくに答えてくれた。こんなことも珍しいことだ。

「よかったら部屋の中を見せてくれませんか」

と思いきって聞いてみた。すると、

「ちょっと今、片付けるから待ってて」

と言って部屋の中に入っていった。しばらくするとちゃんと綺き麗れいなシャツに着替えた鈴すず木きさんが出てきた。とても綺麗なシャツだ。まるでアイロンをかけているような仕上がりである。そして、鈴木さんは玄関の前のカーテンを開けて、

「どうぞ、入って入って」

と言って手招きをしている。お言葉に甘えて中を覗のぞくと、すごく広い部屋である。広い部屋といっても、外から見る限り、おそらく実際にはそんなに広くはないはずだ。でも興味深いことに僕にはとても広く感じられたのである。真ん中には卓ちや袱ぶ台だいが置いてあり、たくあんやほうれん草のおひたし、それに焼き上がったばかりの餃子がお皿に盛りつけられている。洗ったばかりのロックグラスが二つ並び、卓袱台の横にはでっかいプラスティックの焼しよう酎ちゆうボトルもある。宝焼酎の２・７リットルボトルだった。

酒宴の邪魔をしてはいけないと思い、またそちらの都合がいい時に訪ねてきたいのですが、と聞くと、
「いつでもいいよ」
と即答した。
「いつも何時ぐらいが暇ですか」
「何時でもいいよ」
と笑っていたが、僕は、ここまで明るい応対は初めてだったし、料理をしている感じとか、部屋の中の様子を見て、
「タダモノではない」
と即座に感じた。
そして、２日後には話を聞かせてもらいに行ったのであった。

ホームレスにはホームがある

家を訪ねると、またこの前と同様にカーテンを閉めて部屋の片付けと着替えをしていた。そしてそれが終わると、すぐに家の中へ案内してくれた。部屋の中は３畳ぐらいだろうか、奥に布団が畳んであり、男性はそこに寄りかかっている。だから居間としては２畳ぐらい。真ん中にはこの前と同様、卓袱台が置かれている。立つと天井に頭が触れるので、かがみながら中に入らせてもらう。座ってみると天井もちょうどいい高さだ。やっぱり広く感じる。ライトがついていて部屋は明るく照らされている。なんとテレビもついている。
「鈴木です」
と部屋に入って早々、名前を教えてくれた。尋ねもしないのに名前を言ってくれたのは初めてかもしれない。
「はじめまして。坂さか口ぐちといいます」
「はじめまして、坂口さん」
「あのですね。以前こういう本を出版したのですが……」
僕はバッグから『０円ハウス』を取り出した。
「ほう、本を出したんですか」
「はっ、はい」

鈴木さんは本を真剣に読みだした。
　すると同居している女性が身を乗り出してきた。
「ナニナニー？　これ、本じゃない。あなたが出したんですかー？」
　何やら元気な不思議な女性である。
「コラコラ。ミーコ。オレが読んでいるでしょ。ちょっと返して」
　鈴木さんは女性から本を取り返してまた読み続けた。僕は思わず噴き出してしまった。彼女はミーコと呼ばれているようだった。彼女はしぶしぶ外に出ていった。
「あいつは美み枝え子こ」
　僕はみっちゃんと呼ぶことにした。
「へー。ということは、あなたは日本のホームレスの人の家を調べているってことですか」
「まあ、そういうことです。元々、大学では建築学科で建築物の設計を専攻していたんです」
「そんな人がなんで路上の家を調べているんですかい」
「調べていくうちに、これはホームレスなんかじゃなくて、紛れもないホームだと思ったもんですから……」
「ははー、なるほど」
　なんとなく理解してもらったようです。
「それにしても、ネーミングがいいねえ。０円ハウスかぁ」
　タイトルが気に入ってもらえた様子。とにかく興味津々に１ページ１ページめくっている。
「そうだよ、オレらはホームレスじゃないのよ」
　気負いもなく自然に鈴木さんは僕にそう言った。
「そう思っている人は本当に少ないけどね」
　うん、そうです。
　僕は出会うべくしてこの人に会ったのかもしれない、と思った。
「とにかく話を聞かせて下さい」
　鈴木さんはニコニコ笑っていた。
　みっちゃんは外で何やらゴソゴソやっている。何かと思ったらグラ

スを三つ持ってきた。
　もしかして……。
「飲みますか？」
　いきなり宴会のお誘いである。それではと、手みやげに芋焼酎「島美人」を持ってきていたのでそれを開けようと思ったら、鈴木さんは鈴木さんで、この前見たデカい宝焼酎のボトルを出してきた。
　そして、
「アレを出してくれ」
　と鈴木さんはみっちゃんに声をかけた。出てきたのはなんと、
「おでん」
　だった。いきなり出てきた熱々のおでんに僕は驚きを隠せなかった。
「これ熱々じゃないですか！」
「そうだよ。当たり前」
「おでんはどうやって作るんですか」
　乾杯前に質問してしまう。鈴木さんはすぐさま答える。
「こういうもんがあるんだよ」
　と言って大きな鍋なべのようなものを持ってきてくれた。それは鍋の形をしたステンレス魔法ビンのようなものだった。その中に湯気に包まれたおでんが鍋いっぱいに入っている。
「これが本当に賢い。保温がすごい。朝温めたら、昼過ぎまでもつよ」
　と誇らしげな顔をする鈴木さん。えっ、もしかして……。
「これはどうやって手に入れたんですか」
「もちろん、不燃ゴミとして捨てられてたのを拾ってきたのよ」
　驚く僕。鈴木さんはなおも追い討ちをかける。
「ここにあるものは酒と食べ物以外、全部拾ったものですよ」
　しかしまだ、こちらは信じきれません。
「全部ですか？」
　鈴木さんは即答で、

「全部。この家も道具も全部。釘くぎ１本買ったことないです」
　なんというか、鈴木さん、リアクションが速い。何度も同じ質問を受けているかのごとく速い。これは今後もずーっと続く一つの大きな特徴だった。
「０円ですか」
「０円です」
「釘も？」
「もちろん」
　はい。分かりました。そして、恐れ入りました。

ブルーシートは花火大会で

　そういえば、まだ乾杯をしてませんでしたね。で、

「乾杯」

　もうその時点で、すでに僕の体には鈴木さんの生活のすべてを克明に記録したい欲求が生じていた。

「どうやって０円で作るんですか」

「って、坂口さんよ。あなたは０円ハウスっていう本を作ったんでしょ」

「そうなんですけど……。よくよく話を聞いてみると完全０円ハウスというわけではなかったのです、実は。限りなく０円に近いことは確かですが……」

　そうなんです。

「でも、鈴木さんの家は違うと」

「そうだよ。完全０円だよ」

「やっぱり、それは可能なんですか？」

「もちろん。東京にはなんでも落ちてるよ。拾ってくるだけ」

「すべてを？」

「そう」

　鈴木さんは淡々と答えている。

　まだ信じられない僕は部分的に聞いていくことにした。

「まず、鈴木さんの家を包んでいるブルーシートはどうしたのですか。あんな大きいものはなかなか落ちていないでしょう」

　鈴木さんはグビッと焼酎を飲んですぐさま答えた。

「隅田川では毎年１回、大きな花火大会があるでしょう。人々は花火をゆっくり見たいがためにブルーシートを敷く。その時には、普通では見られないような、大きなブルーシートを敷いているグループもいるもんです。でも花火大会が終わってしまうと、それは無用の長物になってしまう。で、置いていく人たちがたくさんいるんですよ」

うーん、なるほど。そういえば僕もよくその光景を見たことがあります。花火大会が終わってぞろぞろと電車の駅に向かう途中に、広がったままほったらかしにされていました。
「私が持っているのはデカいよ」
鈴木さんが持っているのは10メートル×10メートルの超特大ブルーシートらしい。このサイズはさすがになかなか見つからないと嬉うれしそうな顔で言っていた。
ここまで話したところで、もう僕は手に汗握る状態になっていたのだ。それは、本当に家をすべて０円で作っている人に初めて会ったからだ。『０円ハウス』という本を出したにもかかわらず実際に０円で作ったと断言している人にはほとんど会ったことがなかったのだ。
「釘はさすがに買うよ」
と言う人や、
「家は０円だけど、電気は落ちてないから発電機を買ったよ」
と言う人ならいたのだけど、
「釘も電気もすべてタダ」
という人はさすがにいないだろうと僕も思っていた。しかしそれがいたわけである。目の前に。
鈴木さんとの宴会に戻る。だんだんと話は細部に及んでいった。
「釘は？」
「拾えるよ。新品でも落ちているし、道具箱ごと捨てられているのもあるもんね」
そう言って、彼はあるものを外から持ってきた。道具箱だ。鉄製の青いしっかりとした道具箱。中を開けると、さびてはいるが、ちゃんといろんな長さの釘が揃そろっている。曲がっている釘も捨てないという。とんかちで叩たたいて真っすぐにすると使えるのだそうだ。
それにしても、鈴木さん、本当に台本通りのような動きをしている。質問されるのを分かっているような。無駄のない会話に僕も興奮していく。

じゃあ今度は電気だ。

今使っている電気はどこを電源にしているのか。発電機の音はしないし、ソーラーパネルももちろん見当たらない。それで、なんで部屋のライトは明るく光っていて、テレビもラジオも見たり聞いたりできるのだ。

「それはだね……」

「はい……」

僕の鼻はフンフンいっている。早く先が知りたい。

「ガソリンスタンドでもらってくるんですよ」

「何をもらってくるんですか」

「自動車用の12ボルトのバッテリーを」

「？」

「ガソリンスタンドで自動車用のバッテリーを交換しているのは知っていますか」

「はい」

「ということはバッテリーのゴミが出るでしょう」

「でもそれはゴミなんでしょう……」

「自動車にとっては、です」

「と、言いますと」

「しかし、そのバッテリーの中には、人が家で小さなテレビやラジオを使う分には十分すぎる電気量が残っているのです」

「なるほど。やられました」

これには参りました。鈴木さんの頭の中には０円テクニックがきちんと叩き込まれている。まるで職人さんのような喋しやべり方で、どんどん自分のやり方を教えてくれる。何一つ言えないこともないようだ。すべてにおいて明快な答えが次から次へと返ってくる。

焼酎は進み、家の中にはラジカセから演歌が流れていた。東京の真ん中で体験しているとは思えないこの空間の中に流れる演歌は、まるで異国の曲のように聞こえてきた。

「鈴木さん、この演歌、すごくいいですね」

「香こう西ざいかおりだよ」
「今日は本当に色々ありがとうございました」
　これはすごいことになるかもしれない。そう予感し、また来ることを約束して鈴木さんの家を出てきた時には、もうすでに午後11時を過ぎていた。
　僕は酔っぱらっていた。

最高級の調理道具

　鈴木さんとみっちゃん。しっかり者の鈴木さん、楽天家でノホホンとしているみっちゃん。そのおかげですごくバランスが取れている。そんな印象を受けた。鈴木さんは１９４８年生まれの59歳。みっちゃんは７歳年下の52歳だ。鈴木さんは隅田川での生活は９年目、みっちゃんは１年遅れて８年目。一緒に暮らし始めて７年、つまり、みっちゃんが路上で暮らすようになってすぐに一緒に住み始めたようだ。
　現在の家は３軒目だそうだ。この家の前はもっと大きな家に住んでいたと鈴木さんは言っていた。
「立って歩き回れたんだよ。前の家は」
　鈴木さんは手をビョーンと上に伸ばし天井の高さを表現している。
「なんでそれを今の家に替えちゃったんですか」
「なんでって、国土交通省からクレームが来たんだよ」
「すごいですね。国家からクレームですか。で、なんと言われたんですか」
「家の高さが高すぎるって。それでは困るって。だから、どこまでだったらいいんだよって聞いて、この高さに落ち着いたんだよ」
「じゃあ、これって一体、なんの高さなんですかね」
「まぁよく分かんないけど、要は目立つなってことなんだよ」
　本当によく分からない。感覚だけの規則のようだ。でも、そういうものが存在するというのは、それはそれで非常に興味深い。
　何回もいうように鈴木さんの頭はすごく整理されていて、質問をすると瞬時に的確な回答が返ってくる。なんというか、質問を待ってい

たような、何度も何度も同じ質問を受け続けてきたような、そんな感じなのである。でも、これまでほとんど取材を受けたことはないそうだ。これまでテレビなど色々なメディアが駆けつけてきたらしいが、断っているそうだ。

　しかし、僕の取材は受けてくれた。というか、宴会になってしまっているが。話していて鈴木さんと僕のウマは合うな、という直観はあった。鈴木さんもそれを感じてくれたのかもしれない。

「明日また来ます」

　と言ったら、普通に、

「来い来い」

　と言ってくれたので、次の日も行ってみることにする。

　今回はもう少し細かいことも聞いてみよう。聞けば聞くほど、いろんな話が次から次へと飛び出てきそうな予感がある。僕も今までたくさんの０円ハウスを訪ねてきたが、ここまで僕の話に耳を傾けてくれる人もいなかった。それはやはり鈴木さん自身の今の生活が充実しているのが大きいと思った。否定的な、悲観的な言葉が飛んでこない。自分の生活に可能性を感じている。それが、僕が興味を深めたきっかけである。彼は自分の生活を本当に楽しんでいた。

「そういえば……」
　と思い出して、パソコンを開いて昨日見せてもらった保温鍋のメーカーを調べてみる。
「シャトルシェフだったよな」
　入力して検索すると「シャトルシェフ」のお買い物ページがある。覗いてみると、

　ドイツベルリンにて生まれたThermos社のお鍋。１８８９年保温によって調理する真空保温調理器「シャトルシェフ」を発売してからその素晴らしい構造技術によって大切な栄養素を逃がさずに、また経済的で安全に美味しく調理できる商品として世界中で１００年以上愛されています。（食器広場―Yahoo! ショッピングより）

　なんでも、沸騰させたら火を止めて、その熱を保温することによって調理をするので栄養素が死なないし、火を使わないので火事にならない、火を使わないのでガス代が浮く、しかも６時間経過しても65度以上の高温をキープするという。これは完全に鈴木さん用である。さらに値段を見て驚いてしまった。

３□０Ｌ黒

定価１５、２２５円

　高い！　そういえば昨日、鈴木さんはこうも言っていた。
「それ、二つも拾ったよ。友人に１個あげちゃったけど……。ははは、なんでこんなイイもの捨てるんだろうね。日本人は」
　予感は確信に変わった。そう、鈴木さんは路上でなんでも拾える。僕は、とにかく隅田川に直行した。

月収５万円は食費に

「こんにちは」

「へえ。ホントにまた来たの。いらっしゃい」

　また快く家の中へ入れてくれた。本当に綺麗な家の中。ちょうど食事中だったようだ。ラーメンとほうれん草のおひたし、きんぴらごぼう。

「坂口さんも食べる？」

　グラスとおはしを用意してもらい、食事に加わる。おいしい。

「それで今日は鈴木さんの話をもっと詳しく聞きに来たんですけど……」

「なんでも話しますよ」

　居心地のいい室内。床にはゴザが敷かれている。もちろんテレビはつけっぱなしだ。テレビは自動車用の小さなもの。でも画像ははっきり見える。音声は、なんと隣のラジカセから出ている。コードをつなげているようだ。だからステレオではっきり音が出ている。部屋の中にはテレビのニュースの音声が鳴り響いている。

「たくあんも出して」

　鈴木さんがみっちゃんに頼むと、外で包丁の音がする。たくあんを切っているようだ。

「せんべいもあるよ。食べる？」

　なんだかどんどん出てきそうな勢いである。

「なんか食事すごいですね。どんどん出てきますね」

　と僕が驚いていると、鈴木さんはこう言った。

「稼いだお金はすべて食費に充ててるからねぇ」

「食事だけなんですか」

「ほとんどはね。他ほかにはカセットコンロのガス缶、煙草たばこ、酒も入っているけどね。あと競馬も少々」

　すごい生活である。生活にかかるお金は食費だけ。で、１ヵ月の食費はいくらぐらいなのだろう。

「いくらぐらい月に使っているんですか」
「分かんないんだよ。でも、ミーコが、お金あるだけぜーんぶ食材に換えちゃうからお金なんか１円も余んないよ。本当にぜーんぶ使っちゃうんだよ。困ったもんだよ」

えっ、みっちゃん。貯金しないんですか？
「うん。全部使っちゃうよ」
　恐るべきカップルである。このご時世で、この２人の状況。僕はさぞかし、不安を感じながら、節約しながら生きていることだろうと思っていた。しかし、鈴木さんとみっちゃんにその姿勢はみじんも感じられない。
「おいしいもの食べていないと、元気なくなっちゃうよ。お金なくなったら、また稼ごうと思うし」
　鈴木さんはこう言った。それもまたしかりである。この２人、常に前向きで、余計な心配をしていない。なんというか、本質的な話ができている。それは非常に特別な瞬間である。こんなこと他ではなかなか話せないと思う。なんとかなるだろう、そう自信を持っているように思える。しかしその自信はどこからやってくるのだろう。というか、彼らは一体どうやってお金を稼いでいるのだろうか。そこから入ってみよう。
「鈴木さん、一体どうやってお金を稼いでいるんですか」
「アルミ缶だよ。缶拾い」
「缶拾いだけなんですか」
「そうだよ」
「あれで、本当にお金が稼げるんですか」
「オレは週に１００キロぐらい拾うよ」
「１００キロ！　空き缶一つでどれくらいの重さなんですか」
「誰だれかが測ったらしいんだけど、３５０ミリリットルが18グラム、５００ミリリットルが25グラムって言ってたっけ」
　アルミ缶だから軽い。例えば、アルミ缶３５０ミリリットルと５００ミリリットルを半分ずつ１００キログラム分拾ったとしても２３２６個拾うことになる。これはすごい量だ。
「で、それはいくらになるんですか」
「１キロ＝１２６円だから……」
「１万２６００円！　鈴木さん、月収５万円超えてますよ！」

僕は興奮していた。

……ということは。

「食費と雑費だけに５万もかけてるんですか」

「ってことになるねえ」

僕なんかそんなにかかりませんよ。食いすぎ飲みすぎじゃないすか。

「食費５万ってすごいですね」

「うまいもん、食べてるもんな」

鈴木さんは普通に言っていた。

食費はかけているし、調理道具は最高級。刺身でも、餃子でもなんでも食べるのだそうだ。その代わり、すべて自炊。でも自炊で５万円ってかなりのものである。一緒に喋れば喋るほど、その驚くべき生活風景がチラリと顔を覗かせる。こんな話聞いたことありません。僕は話し続けることをやめられなかった。そうするうちに少しずつ彼らの生活の全ぜん貌ぼうが明らかになっていくのだった。

鈴木さんとみっちゃんの１日

色々と気になることが多い鈴木さんとみっちゃんの生活だが、まずは今現在、どういう暮らしを送っているのだろうか。１日の暮らし方を聞いてみた。

「鈴木さん、朝は毎日何時に起きているんですか」

「午前６時起床です」

「けっこう早いですね」

「そりゃそうだよ。アルミ缶を拾いに行かなくちゃいけないから」

そのため、ちょうど多くの人がゴミを捨てに行く時間帯に合わせて出発するのである。これが４時や５時では早すぎて駄目なのだ。午前６時に起きて、顔を洗って、そして午前６時半に朝食を摂る。食事は、

白米、味み噌そ汁しる、納豆、おしんこ

と、かなりオーソドックスなスタイルで、これは毎日そんなに変わらないそうだ。そして歯磨きを済ませて、自転車に乗ってアルミ缶拾いの仕事に出掛ける。７時から９時過ぎぐらいまで。２時間強の仕事だそうだ。朝のアルミ缶拾いは火曜日と日曜日が休みで、あとは毎日出ている。その後、午前９時半ぐらいからは、拾ってきたアルミ缶をつぶす。そして、午前11時からは、
「昼飯食べて、お酒を飲みます」
「お昼はどんなもの食べているんですか」
「オレがめん類を好きだから、大体ラーメンかうどんだね。白米は朝ぐらいだよ」
その後、何度も食事風景を見たが、ご飯は１度も見なかった。昼食は非常にゆっくり摂っているようだ。で、そのままお酒タイムに流れていく。かなり早い晩酌だが、これはどういうことなんだろう。
「もう飲むんですか」
「そうだよ。昼間に１回、眠んなくちゃいけないから」
「なぜですか」
「夜も空き缶拾いがあるんだよ」
なるほど。鈴木さんだけは１日に朝と夜の２回、アルミ缶拾いをやっているのである。みっちゃんは夜は寝ているのだそうだ。
「夜は、資源ゴミの箱を見に行くのよ。夜のうちに出している人も多いから」
「と、いうことは、夜は何時に出ていっているんですか」
「えーっと、８時半ぐらいからかな。深夜１時ぐらいまでやっている時もあるよ」
そのために午後３時か４時ぐらいから８時ぐらいまで仮眠を取るそうだ。やっぱりお酒が入らないとこの時間帯は眠れないそうだ。そのため鈴木さんが寝ている夕方、みっちゃんは酔い覚ましと散歩を兼ねて、外にアルミ缶拾いに出掛ける。最近はみっちゃんもアルミ缶を拾うようになってきて、今では朝も毎日出掛けているようだ。なぜな

ら、みっちゃんのお酒の量も鈴木さんに負けないぐらいに多くなってきているため、
「ちゃんと飲み代ぐらいは稼ぎなさい」
　と鈴木さんに言われたからだ。
　鈴木さんの方は夜の空き缶拾いは午前１時に終了し、その後１日の締めにうどんを食べて午前６時までゆっくり眠るという生活サイクル。ほとんど休みはなく、雨が降っている日でも毎日やっているわけだから、重労働といえば重労働だ。

「けっこうキツそうですけど」
　と聞くと、
「天気が悪い時は大変だけど、それ以外だったら平気だよ。誰にも左右されない、自分にすべて決定権がある生活は、自分から動かないと大変だけど、それなりにイイことも多い」
　と、鈴木さんは笑っている。
「色々工夫して生きるのは楽しいよ」
　とも言っていた。鈴木さんは空き缶拾い会社の社長のような気分なのではないだろうか。そういう独立した生活を続けてきた自信みたいなものが、鈴木さんの言葉からは感じ取ることができる。
　鈴木さんはまたこうも言っていた。
「ミーコは、私はホームレスじゃないって言っているんだよ。私たちは家を持っているって。あいつも困ったもんだよ」

自転車譲渡証明書
　鈴木さんの自転車は空き缶拾い用に特別に改造されたものである。そもそも、なぜ鈴木さんは自転車を持っているのだろうか。
「これは拾ったんですか」
「駄目だよ。自転車を拾っちゃ。窃盗と間違われてしまう」
「そうすると、どうやって手に入れることができるんですか」
「これは、人からもらったんだよ。２台とも」
「誰からですか？」
「毎日この川沿いを走っていた会社員からなんだけどね」
　と言って、彼は奥から白い紙切れを持ってきた。
「この紙切れと一緒に自転車をくれたんだよ」
　その紙切れには、
「譲渡証明書」
　と書いてあり、会社員から鈴木さんへ自転車が正式に譲渡されたものであるということが判子付きで書かれてあった。
「すごいですね」

「そう、ホントにこんな素晴らしい人もいるもんなんだよ。やっぱりワシらは自転車に乗っていたら窃盗したものじゃないかとすぐ疑われるのよ。でもこれがあれば」
「絶対に大丈夫ですね」
「そう、絶対に大丈夫」
　そうやって見せてもらった自転車はまだ新品同然だった。しかもタイヤまで買い替えている。
「毎日空き缶拾いに行く時に顔を合わせていたんで、よくあいさつをしていたのよ。その会社員がサウジアラビアに転勤することが決まって、家族みんなで行くらしい。それでその証明書と自転車を家族３人で持ってきて、絶対帰ってくるからその時まで頑張っていて下さいと言われたよ」
「なんだか泣けますね」
「もう絶対ここは離れずに彼らのためにも頑張ろーって思ったね」
　とにかく鈴木さんの周りにはエピソードが溢あふれている。
　そうやって譲ってもらった自転車を、拾ってきたもので改造している。ハンドルにはバックミラー。前のカゴには夜用のＬＥＤライトが付けられている。カゴには缶拾いに重要な「時間」を知るための大きな時計が針金でくくり付けられ、ゴムひも、洗濯バサミ、タオルなど細かい道具が備えられている。荷台には長いベニヤ板が取り付けられ、缶を入れたビニール袋を載せやすくしている。雨の日用に自転車のシートには防水カバーも備えられている。常に準備万端である。この抜け目のない用意周到な技術が鈴木さんの０円生活を支えている。
　自転車を自分の使いやすいように改造するという行為は、０円ハウスでは珍しくない。壊れたところを拾ってきた部品で直したり、荷台を手作りで作ったりしている。日本ではあまり見られない光景だが、２００７年１月に行ったケニアの首都ナイロビでは、逆に頻繁に見ることができた。

あるインド人芸術グループに誘われて、僕はナイロビで開催された世界社会フォーラムに参加したのだ。以前日本に来た時に『０円ハウス』の本を読んだらしい。それで興味を持ってくれ、展覧会をしないかと言われたのだ。アフリカ旅行は生まれて初めてで、ぜひいつか行きたいと思っていたので即答で承諾した。

そのナイロビで様々な自転車に出会った。２人乗り用のハンドルまで付けられたもの。蛍光色のテープなどで派手に装飾されていたり、音響装置が付けられているものもあった。もちろん、すべて手作りである。

ナイロビにはプロフェッショナルではない素しろ人うとのデザインが溢れていた。それは、ぎゅっと締め付けられそうなくらい窮屈さを感じさせるナイロビという大都市に、隙すき間ま風を吹かせていた。力が抜けるのだ。

そうしたデザインは、自転車だけでなく、車にも施されていた。路線バスにもだ。そして、街では手作りのヘンテコなものが色々と動いていた。

次ページの写真は移動包丁研ぎ屋である。ゴムを使って車輪を回し、包丁を研いでいく。しかも、この研ぎ器自体を移動させることができる。

「ただのオンボロじゃないか」
　と思われるかもしれない。だが、表面は問題ではないと思う。それよりも自分で考えていることを形に起こしていくということ。それを彼らはごくごく自然に行っている。その根元のところは０円ハウスと同じなのではないかと僕は思う。工業製品に向かって蛍光色テープを貼はる行為。この対決が都市をもっと情熱的にさせていくんじゃなかろうか。０円ハウスが発していることも、これに近いような気がする。
　展覧会では、それらのナイロビの自転車や、郊外にあるアフリカ最大のスラム街「キベラ」にインスピレーションを受けて作品を制作した。スクラップ工場の鉄てつ屑くずから部品を集めて、鉄工所のオヤジと２人で自転車を丸ごと手作りした。さらに、最近できたらしい巨大なスーパーマーケットにあった段ボールで小さな家を作って、その自転車の荷台に積み上げた。

東京の遊牧民
　また鈴木さんの家に向かった。２００６年の12月下旬である。外は寒い。声をかけると、
「はーい」
　という返事が家の中から聞こえ、
「ちょっと待ってね」
　といつもの言葉。この間に鈴木さんとみっちゃんは毎回きちんと着替えて、さらに部屋もささっと掃除をし、みっちゃんが畳んであった卓袱台を広げる。そして、家に入れてくれる。
　鈴木さんの家の玄関は二重構造になっている。家の入口にはまず灰色の厚手のカーテンのようなものが掛かっている。それは、風でひらひらとなびかないように金属製のクリップで柱に留められている。そこを開けてもらうと、土間のようなスペースがあり、その向こうに部屋に入るための玄関がある。だから、中に入ってみると、ここが路上の家だということを忘れてしまうほど暖かい。さらに部屋の中にはス

トーブもある。
　部屋は小さいが、中はきちんと整理整せい頓とんされていて、非常に清潔な印象を受ける。明かりもあり、テレビもついている。驚くべきことに、これらすべてを鈴木さんは０円で手に入れているのだ。
「家の材料はどうやって手に入れるんですか？」
「けっこう難しいですよ。つまり欲しいものが簡単に手に入るとは限らないからね。材料を集める時間はかなりかかったよ」
「前の家に住んでいながら少しずつ集め、揃ったら新しい家を作るわけよ」
「そうやって新しい家ができたとしても、それで完成ではない」
「というと？」
「つまり拾っているものの有り合わせで作っているから、完かん璧ぺきなんてことはありえないわけ。だから、家ができても常に改良するために新しい材料を調達する」
「いつも未完成状態なんですね」
　そうやって鈴木さんは自分の家を少しずつ自分の理想に近づけるべく路上に落ちている材料を拾い続ける。彼の家は常に変化しているのである。
　ブルーシートも、今使っているような巨大な10メートル×10メートルのものはなかなか見つからず、それまでは小さいものを組み合わせて覆っていた。みっちゃんと同居してからは、ずっとこの家に住んでいるので、８年間この家と付き合っていることになるが、その間に少しずつ拾ってきては大きくしたり、修理したりしてきている。
　前述したように、１度はこの家よりもっと大きい時代もあったりしたわけだ。その時は家の中を歩き回れてよかったなあと鈴木さんも時折回想していた。その時は国交省から高さを縮めるように命令が下されたわけだが、鈴木さんは高くしていた柱を切り、現在の控えめな高さに下げた。つまり、
「簡単に家の大きさも変えることができる」
　わけである。

これは今までの家の常識では考えられないことではないか。改築工事などをするということはあっても、住んでいる人がここまで自由に部屋の大きさや部材を交換していくことはできない。結局お金をかけない限り、変化させることはできないのだ。

しかし、鈴木さんの家は家全体の状態を住人が把握しているために、変化させることも可能になっているわけだ。

「毎日、家の部品のことを考えながら自転車に乗っているんですよ」

と鈴木さんは言っていた。何気ないこの一言に僕は驚いた。

「家の部品を考えながら自転車に乗っている人」

とは、まるで、

「獲物のことを考えながら馬に乗って狩りをする人」

みたいではないか。狩猟民族のような生活を送っているのかもしれない。

そういえば、その後のある日、鈴木さんと一緒に自転車に乗って台東区を探索していたら、

「ここの柿かきの葉っぱは天ぷらにするとおいしいよ」

とか、

「ここでは、なんとタラの芽が採れていたんだけど、最近誰かが木を抜いちゃったんだよ」

とか、そういう発言がポンポン飛んできた。鈴木さんには東京がどんなふうに見えているのか、彼の脳味噌の中身が見たくなった。

家のことや食事のことなどを考えながら移動しているのである。

彼らは、

「東京の遊牧民」

とも言えるのかもしれない。あの隅田川の家は移動することもできるらしいのだ。

総工費は０円！

さて、家の材料の話に戻ろう。

「ブルーシートは花火大会でゲットするんでしたよねぇ。では、この

木材はどうするんですか？」
「木材はアルミ缶拾いをしている途中に通りかかる工事現場のゴミ置き場とかだね。ちゃんと工事現場の係の人に断ってもらってくるんだよ。もちろん、工事が始まる前に寄っといて、チェックだけはしておくわけよ」
「なるほど」
「そして、もらったら綺麗に元通りにしておくこと。これがポイント。汚くしたら次はもらえないし、他の人がもらう時にも影響するでしょ」
　なんだかすごい。システマティックだ。
「よくいるんだよ。散らかして帰る人たちが。そのおかげでオレたちの印象も悪くなる」
「ちゃんと許可を得てからもらうこと。そして、後始末を怠らないこと」
　これが、鈴木さんが都市の中のゴミから何かを拾う時の極意である。そうすることで、逆に材料を手に入れやすくすることに成功している。
　一般家庭から出てくる不燃ゴミ、資源ゴミも見逃すわけにはいかない。まだまだ使えると思われるようなものもどんどん捨てられるからだ。家電リサイクル法ができてから電化製品は減ってきたが、それ以外のものはまだ新品でもゴミとして捨てられているのが現状のようだ。そうやって鈴木さんは家の材料をすべてゴミから調達しているのである。
　まるで山に住んでいる人たちにとっての草木のように、都市のゴミを自然物のように捉とらえて家を作っている。それはある意味、東京にとっての自然素材の家ということになるのかもしれない。
　一番手に入りやすい材料で家を作る。これは、非常に効率的なやり方に見える。しかし、僕たちの現在の状況では、家をゴミから作るということはかなり特異なことのように感じてしまう。しかも、不思議なことにゴミは何も古いものだけではないのだ。

「新品が平然と捨てられているんだよ」
　鈴木さんは困った顔をしていた。
「いや、オレにとってはいいよ。そのおかげで、０円で生活できるわけだから。でもねぇ」
　となんだか複雑な気持ちのようだ。そんな新品同然のゴミが平気で捨てられている現実。それらは単に「ゴミ」と呼べるようなものではない。では一体それはなんなのだろうか。
「本当に物を大事にしない人が多すぎるよ」
　鈴木さんは嘆いていた。
「うちなんか生ゴミ以外、なんにもゴミは出ないよ。ビニール袋だって洗って再利用しているよ。本当に東京の人は何をやっているんだい」
　僕も耳が痛い。そうやって、鈴木さんは路上から材料を集めながらゴミ都市東京に警告をしているようにも見える。
　しかし、皮肉にもそのおかげで彼は家の材料を常に手に入れることができる。
　もちろん、全部拾ったものであるから、サイズなんか自分で決められるわけがない。
　ということは、つぎはぎだらけの家であることは間違いない。
「それでもとにかく家はできてしまうんだよ」
　と鈴木さんは言った。
「工夫すればどんなことでもできますよ」
　経験が彼に自信を与えているように見えた。僕たちが不用と思っているものすべてが鈴木さんにとって家の材料、生活道具となっている。やればやるほど、
「この街では買う必要がないんだ」
　という実感が強まっていったと鈴木さんは言う。
「次は、屋根に発泡スチロールの板を付けたいね」
　さらに改良するための思考も止まっていない。常にいい家にしていきたいという気持ちでいるようだ。家を作るため、改良するためのア

イデアは毎日練っているのである。
「なんか、毎日成長していってますねぇ」
　思わずため息をついた。僕には彼の生活は勉強であり、思考であり、運動であるように見えた。僕が目指していた生活の姿はこんな感じかもしれない。
　鈴木さんは家だけではなく、その家を作るために必要な道具もまたすべて拾い物から転用している。とんかち、ノコギリ、メジャー、釘に至る、何から何まで路上から調達してきている。しかも、それぞれスペアまでも用意されている。それ以上手に入ったら友人にあげているそうだ。釘や道具も新品で捨てられていることもあるようで、鈴木さんの道具箱（もちろん、これも拾い物）にはいろんな道具が所狭しと並べられていた。
　まだ使えるものでも新しいものが手に入ると、その途端にいらなくなってしまう。都市における「ゴミ」というものの矛盾。それと、鈴木さん自体が持っている生活のアイデア。その二つがミックスされてこの、
「総工費０円の家」
　は出来上がっているのである。

バッテリーはガソリンスタンドから

　様々なものを拾いながら生計を立ててきた鈴木さんには、次第にどこで何が拾えるかという独自の入手ルートのようなものが出来上がっていったようだ。つまり、

「定期的に欲しいものを手に入れることが容易になっていった」

　ということだ。

　これはすごいことである。湧わき水のありかを見つけたようなものだろうか。

　その中の一つが電源だ。鈴木さんとみっちゃんの家には、電化製品がたくさんある。

●自動車用小型カラーテレビ×２

●ラジオ

●いい音の出るパナソニックのＣＤラジカセ

●照明にはバイク用ライト×２

　これらは、僕が彼らの家に行った時には常時使用されていた。ということはもちろん、この家には電源があるわけだ。電池だけではこれらの電化製品を使用することができない。もっと大きな電源が必要になってくる。

この家で使われている電源は、前述したように自動車用の12ボルトの蓄電式バッテリーである。ガソリンスタンドで出る交換後のバッテリーをもらってくることまでは教えてもらったが、一体それはどうやってもらえるようになったのか。
「これもね、ちゃんと１回ガソリンスタンドの人と会ってね、話をするんだよ」
　あっ、やっぱり「契約」するんですね。そうするといつの間にかきちんと所定の場所に置いてくれるようになるらしい。現在、鈴木さんは浅草付近のガソリンスタンド５軒と契約を結んでいる。
　５軒とも廃棄されたバッテリーを歩道沿いに置いてくれる。そこを鈴木さんはアルミ缶拾いのついでに週２～３回覗いていくのだそうだ。
「大体ね、週に５～６個ぐらいもらえたね」
「それは、すごいっすね」
「テレビなんか、ずーっとつけっぱなしでも大丈夫だよ」
　すごい……。こんなに電気をうまく利用している人は今まで会ったことがなかった。
「でも、最近どうもバッテリーのゴミが出ないのよ」
「どうしてですか？」
「なんだか、バッテリーの性能が格段に上がってきているみたいなのね。何年も使えるようになってきているんだよ」
　なんだか鈴木さんは技術の進歩とも直接向かい合っているんですね。何事もリアルに体験しているので、打撃も受けるが知識も増える。そこが非常に興味深い。
「でも、だから最近のバッテリーを拾うとモチがいいよ」
　トラブルもしっかり味方につけるのが鈴木流である。
　拾ってきたバッテリー一つで、12ボルトの小型テレビを１日５～６時間見たとして、10日間も見られるそうだ。しかも、彼は常に一つの電化製品に対してバッテリーを二つ並列にして使用するので、20日間以上見ることも可能なのだ。

バッテリーも、もとはといえばガソリンスタンドがゴミとして捨てたもの。鈴木さんが使い終わるとそれはまたゴミになるのでないかという、ちょっと意地悪な質問をしてみた。すると鈴木さんは、
「いやいや、これがまた、この使い終わったバッテリーを買い取る業者がいるんだよ。一つ50円で」
僕たちはすべてお金を払って処理をしているが、鈴木さんの周りにはそれとは別の流通がある。再利用されたゴミをまた欲しがる人たちがいるのだ。
「台東区の鳥とり越ごえには、バッテリーがいつもいっぱい捨ててあるガソリンスタンドがあるんだよ」
など、鈴木さんは、
「あそこの店は何がよく出る」
とか、
「あの店は他の店より30円安い」
とか、街を毎日自転車で走りながらかき集めた情報を、大量に持っている。
鈴木さんはバッテリー以外に、電池も０円で入手する。台東区竜りゅう泉せんにある電器屋が１週間に３回ぐらい電池を捨てるのだ。
「中でも水曜日の収穫が一番多いね。１日で単一の乾電池を10個ぐらい拾えるよ」
やはり、彼と話していると、まるで森の中で山の達人が自分だけが知っている穴場へ山菜を採りに行くといった風情すら感じる。しかも、さっきも書いたように、本当にタラの芽の採れる場所を知っていたのだから、もうこれは本物である。
単三電池は、封を切っていないのも含めてすべて一般家庭の不燃ゴミから調達する。
「子供のおもちゃが捨ててあると、必ず中身をチェックする」
「？」
「なぜなら、その中には必ずと言ってもいいほど電池が残っているからね」

もうここまでいくと職人芸である。都市の達人。

隅田川のエジソン

しかし、最初から電源があったわけでない。

「この生活をし始めたころは、電気なんかなくてロウソクだったよ。でも、ロウソクはけっこう危ないわけ。いつ火事になってもおかしくない」

そして鈴木さんの実験は始まった。

「ある日、ガソリンスタンドから自動車用の12ボルトのバッテリーを拾ってきた」

「すぐに使えたんですか」

「バカな。バッテリーをどうやって使うかすら知らなかった。１００ボルトと12ボルトの違いも知らないんだよ」

なんと、はじめは僕たちと同じく全くの素人だったのである。

「でも、バッテリーは当時たくさん拾えたから、とにかく色々と試してみたわけよ。何個もぶっ壊しながら」

とにかく経験のみで成長している鈴木さんである。

「すると、だんだんと分かってきた。12ボルトのバッテリーで使うことができる電化製品はけっこう多いってこと。どうやって接続すれば危険じゃないかってことなどをね。そして、その当時たくさん捨てられていた原付バイクのライトをバッテリーに接続してみた」

「ついちゃうんですか」

「ついちゃうのよ。大成功」

そしてまた一つ文明が生まれた。

「そうして試していると、テレビでもラジオでもステレオでも全部このバッテリーで使えるじゃないの。びっくりしたよ」

それはびっくりです。たぶん、ほとんどの人が知らないでしょう。そして「隅田川のエジソン」はそれの特許を取ることなんか考えず（まあ、特許は取れないでしょうが）、電気文明を無償で広めるのである。

「そのころ、本当にたくさんのバッテリーやらバイクやらが落ちてたからね。何軒分でも作れたね」
「タダですか？」
「もちろんだよ。本当に喜ばれたよ。ここではなんでもお互い様。何かをあげると、何かを持ってやってくるからね。うまくできてるんですよ」
　本当の物々交換の社会が鈴木さんの周りには存在しているようである。
「バッテリーにライトをつなげるだけではすぐに電源がなくなってしまうから、スイッチも付けてあげたよ」
「スイッチ？　ですか？」
「そうだよ。これまた当時、コタツがよく捨てられてたのね。コタツに付いてるでしょ。スイッチ」
「付いてますね。入・切って書いてあるヤツが」
「そうそう。それよ。それをライトとバッテリーの間に接続しただけ。隣の家とか片っ端から、バッテリーとバイク用ライトとスイッチのセットで設置してあげてたよ。あのころは楽しかったなー」
　まさに、
「ゴミから生まれた電気系統３種の神器」
　である。参りました。鈴木さんはこの地域のエジソン的存在でもあるようです。
　最終的には鈴木さん、宴会場まで作ってしまった。鈴木さんと隣人の家との隙間に作ったそうだ。そこでは夜な夜な皆で集まって宴会が開かれるようになった。
「中には、隅田川の住人だけでなくて、普通のサラリーマンや中国からの留学生なんかも混じっていたよ。いやー、あの日々は楽しかった。一番よかったね」
　今から２～３年前の話らしい。鈴木さんにとっての黄金時代だったようだ。
「そしてある日、すごいものを拾ったのよ」

「なんですか、それは」
「カラオケよ。カ・ラ・オ・ケ」
「本当ですか」
「昔、よく見たろ。カラオケセット。大きなカセットテープみたいなヤツを入れて歌うヤツ。ちゃんとエコーもしっかり効いてるのよ。バッテリーにつないでみたら、これがまたうまく付いた」
　隅田川にカラオケセット完備の宴会場があるのである。これは大変なことである。
「オレは歌うことが一番好きだからね」
　鈴木さんは、自分の趣味、友人たちとの宴会場までも０円で手に入れたのである。
　カラオケセットこそもうないが、僕が鈴木さんの家に遊びに行って、焼酎が入って気持ちよくなってくると、いつもカラオケ大会が始まる。鈴木さんの家にはたくさんのカセットテープ、ＣＤ、ステレオ、カセットデッキがいくつもあるのだ。鈴木さんとみっちゃんにとって音楽は重要な存在である。みっちゃんは暇さえあると自分用のカセットデッキをカラオケバージョンにして、いつも演歌を自分１人で歌っている。
　みっちゃんの一番のお気に入りは香西かおりで、鈴木さんは千せん昌まさ夫おである。千昌夫は「星影のワルツ」でヒットした当時から、すべてのレコードを集めていたそうだ。そして路上で初めて拾ったカセットテープも「千昌夫全曲集」だった。
「とにかく飾らない歌い方が好きなんだ」
　鈴木さんはそう言っていた。
　さらに千昌夫が言っていたことを教えてくれた。千昌夫は家財道具のほとんどを路上から集めたそうだ。それぐらい東京にはまだ使えるものがゴミとして捨てられているんだと言っていた。そういうスタイルに鈴木さんもシンクロしているところがあるのだろう。それを鈴木さんは熱っぽく僕に語った。
　若いころから鈴木さんは音楽に夢中だった。20歳ぐらいの時に（１

９６８年ごろ）、パイオニアのレコードステレオセットを購入。当時の金額で13万円ぐらいだったらしい。それぐらい音楽が好きで、レコードも買い集めていた。はじめは演歌ばかりを聴いていたが、あまりに音がいいので、彼はその後ＪＡＺＺに目覚めていく。渡わた辺なべ貞さだ夫おやサム・テイラーのムード音楽、ジョージ川口のドラムなどを聴くようになっていったという。当時は音量を相当上げて兄弟からクレームを受けながらも、気にせずに聴いていた。

　鈴木さんは歌を自分で歌うことにもかなり力を入れていたようで、福島時代には毎日のようにカラオケ屋に行っていた。浅草に来たばかりの時に、たまたま入ったキャバレーで、飛び入り参加オッケーのカラオケ大会が開催されていた。もちろん鈴木さんは参加し、千昌夫の「星影のワルツ」を歌った。結果は準優勝で、副賞をもらって帰った。

　そんなこともあり、現在でも鈴木さんの家の音楽環境は素晴らしい。現在はパナソニックの「ＲＸ－ＤＴ35」というラジカセを使っている。テレビの音もそこから出している。

　以前は、今よりももっと大きい、すべて自動で動く最新式のソニー製ステレオセットを使っていた。しかし、それはバッテリーをかなり消費するので、売ってしまったという。

　よく聴く音楽は、鈴木さんが、千昌夫以外では三み橋はし美み智ち也や。みっちゃんが、香西かおり以外では、高たか橋はし真ま梨り子こである。元はじめちとせなどもあった。もちろん、これらのカセットテープ、ＣＤは路上で拾ってきたものである。拾ってきた空のテープに自分でラジオから録音した自作のものもいくつかあった。

●鈴木さんの家にあるカセットテープ・ＣＤ

　千昌夫「千昌夫全曲集」（初めて拾ったカセットテープ）、三橋美智也「三橋美智也全曲集」、前まえ川かわ清きよし「抱きしめて」、市いち川かわ由ゆ紀き乃の「市川由紀乃全曲集」、八や代しろ亜あ紀

き「全曲集　とおりゃんせ」、神しん野の美み伽か「ベスト・ヒット　人生夜汽車」、辛から島しま美み登ど里り「Good　Afternoon」、三み沢さわあけみ「三沢あけみ全曲集」、フィンガー5「REMAKE 1992 FINGER 5」、上うえ杉すぎ香か緒お里り「上杉香緒里全曲集」（彼女は鈴木さんと同じ栃木出身らしい）、松まつ田だ聖せい子こ「Bible　II」、岩いわ本もと公く水み「岩本公水全曲集」、元ちとせ「ハイヌミカゼ」、高橋真梨子「Collection」、原はら由ゆう子こ「SPECIAL BRAND NEW SAMPLER」、伍ご代だい夏なつ子こ「夢舞台」……など。

第２章　０円生活の方法

０円生活という冒険

　そもそも、こんなアイデア抜群の鈴すず木きさんがなぜ０円生活を送るようになっていったのか。そこが常に引っかかっていた。そこでズバリ聞いてみた。

「ちょっと言いにくいかもしれないんですが、どうしてここで暮らすようになったんですか」

「それはねぇ……」

　全く躊ちゆう躇ちよがない。このへんが爽そう快かいである。

「栃木で生まれて、色々仕事してたんだけど、最終的には福島の方で土木作業員をやってたわけよ。私は、なんというか……自分で言うのもなんだけど、けっこう勘がよかったから仕事もよくできたのね」

「はい、それで……」

「それで、バリバリやってたんだけど、会社自体がつぶれちゃったのよ」

「はい、そうなると次を探しますよね」

「で、上京して浅草に着いたのよ。40万円ぐらい手に持って。それで、旅館に泊まりながら仕事を探していたけど、なかなか見つからない。それで１週間ぐらいたったある日、居酒屋かなんかで飲んで酔っぱらっちゃった」

　鈴木さん、早く宿に戻りましょう。

「でも、そこでついつい公園に行っちゃって……」

　ん、なんだか怪しい空気が。

「揺りカゴみたいなブランコあるでしょ」

　ありますね。あれは眠い時、気持ちよさそうですね。

「それで、ついつい寝ちゃったのよ」

鈴木さん、危うし！
「気付いた時はもう遅かった。起きたら荷物、財布どちらも盗まれて一文無しになってしまったのよ」
　これが始まりだったようだ。それで、どうなっていったのだろうか。
「それで、言こと問とい橋ばしの下で寝るようになった。９月だったかな、あれは」
　いきなり路上生活が始まっている。まぁ、それはそれでどうにかなるさ、と思っていたらしい。鈴木さん、どういう状況でもあまり動揺しないようだ。当時、言問橋の下のトンネルは何人かが寝床としていたらしく、夜になるとみんな集まってきていた。そのうち天気の話などから話すようになり、橋の下で５人の共同生活が始まることになる。ここには１ヵ月くらいいることになる。食事はどうしたのだろうか。
「はじめは、教会でおにぎりをもらっていたよ」
　僕も、鈴木さんと話している時に見かけることがあったが、どこかの教会の人たちがおにぎりやインスタントの味み噌そ汁しるなどを持ってきてくれるのだ。その当時も教会に行けば、食べ物をくれたらしい。一緒に暮らし始めた人に教えてもらい、鈴木さんもそこで食べ物をもらうようになる。
「そういえば……」
　と言って鈴木さん、何か思い出したようだ。
「福島の西にし会あい津づで、ある廃校を改築するという仕事をしたんだけど、そこに人が住みたいっていうことでお風ふ呂ろを新しく取り付けてあげたりした。女性だったなぁ。何か書き物をしている人みたいだったような」
　鈴木さん、いろんな仕事をしています。で、その人が？
「国際通りの路地を入ったところに、蛇じや骨こつ湯ゆという江戸時代から続く銭湯があるんだけど、そこにあるコインランドリーでこっちは洗濯してたのよ、そしたらお風呂上がりのその人とばったり会っ

たんだから、びっくりだよ」
　偶然を呼ぶ男でもある。福島に住んでいるはずの２人が、浅草でばったり会っているのだ。それで、その女性に「どうしたの？」と尋ねられ、
「それで、かくかくしかじかで、路上で寝ているんだよと言ったよ」
　と、正直に話した。女性も福島でうまくいかなかったのか、今は「小こ柳やなぎ」という有名なウナギ屋で働いているという。その日から10日間ほど彼女は、うな丼どんを弁当箱に詰めて、毎日橋の下まで持ってきてくれたという。こういう人にばったり会い、さらに弁当まで、しかもウナギを手に入れてしまう。鈴木さんは、とにかく人付き合いがうまいのである。
　そうこうするうちに、鈴木さんは橋の下の生活になじんでいく。そして、その橋の下の共同生活している場所には、いろんな人間が出入りするようになっていった。で、鈴木さんはみんなの生活を見ながら気になることがあったらしい。それは一体なんなのだろう。
「みんな、冷たい水ばっかり飲んでるんだ。当たり前だけど。それで、路上で寝るでしょ。それじゃあ、体も冷えるし、心も冷たくなっちゃうよ。温かいものを飲んだり、食べたりして、体を温めなくちゃいかん」
　そう思った鈴木さんは、それから何日かたって念願のカセットコンロを路上で見つけてくる。ガス缶を手に入れて、火をつける。カセットコンロ文明の始まりである。そしてお湯を沸かしてコーヒーを淹いれ、周りの皆に与えたそうだ。
「そしたら、すごいことが起きたわけよ」
「何が起こったんですか？」
「うちにお湯を求めて仲間たちがたくさん集まった」
「文明を求めてですね」
「そういうこと。そして、うちらが住んでいるところには、コーヒーや紅茶、日本茶、いろんなものを持った人たちが列を作って並んだんだよ。しかも、うわさを聞きつけた知らない人たちも集まってき

て……」
「大変なことになってきましたね」
「すごいんだよ、情報が回るのが。ここはそういうことがあると回覧板みたいに誰だれにでも知れ渡っちゃう。テレビの影響力なんか目じゃないよ」
　お湯の力はすさまじい。お湯は皆に驚きと喜びと勇気を与えた。そして、いつしか鈴木さんを中心としたコミュニティーが形成されていたのである。そして、楽天家の鈴木さんは、この現象に対して、
「感動して、これはやめられないと思ったね。そうやって人が集まるってことは素晴らしいよ。他ほかではなかなかないだろ」
　と、僕にも熱っぽく語った。そりゃそうでしょ、と僕も思った。その時を境に鈴木さんは隅すみ田だ川がわ沿いの０円生活になんらかの希望を感じるようになったようだ。
「なんでもやってみると面白いもんだよ」
　鈴木さんが言うとその言葉はさらに重い。
「工夫するのが好きなのよ。そしてこの生活は工夫すればするほど面白くなっていくわけよ」
　鈴木さんは快感と充実感を得ているように見えた。自分の生活を工夫して続けていくことの興奮、そしてそれによって得た技術を広めることによって生じる人の輪。この二つが絡み合って鈴木さんの本能をくすぐっていったようだ。
　そこには悲観の言葉が一切なかった。
「なんだか面白そうですね」
　僕は不謹慎にそう言ってみた。
「本当に面白いのよ」
　鈴木さんは笑っている。ここには新しくて懐かしい生活の姿があるように思えた。
　鈴木さんからは、貧しさに困っているようなお涙ちょうだいの話題が全く出ない。自分が感銘を受けてきたことばかりが出てくる。この話はその後も、何かあるとよく出てきた。鈴木さんにとって大きな

キッカケになっているようだ。
　この文明開化によって鈴木さんの発明魂は炸さく裂れつし、０円生活という冒険がスタートした。鈴木さんは隅田川での９年間の０円生活において様々なアイデアを発明し、たくさんの新しい文明を開化させ続けていくのである。

路上の師匠

「なるほど。そうやって０円生活に入っていったんですね」
「そうよ」
「で、すぐアルミ缶を拾い始めたんですか」
「いやいや、アルミ缶はずーっと後」
　はじめの方はアルミ缶拾いをやっていたわけじゃなかったのだ。アルミ缶の当時のレートは１キログラム＝50円。これでは安すぎて、集める気になれなかったという。
「それまではどうやって稼いでいたんですか」
「一昔前までは、路上にはなんでもあったよ。いろんな仕事があった」
「へー。そういうのはどうやって見つけるんですか」
「師匠がいたんだよ」
「師匠!?」
　師匠がいたのである。
　はじめはもちろん、鈴木さんもこれからどうしていこうかと思っていた。そんな鈴木さんのところへ、１人の男性が来るようになる。彼は鈴木さんに向かって、
「この生活は飽きないよ。飯が食えなくなることは絶対ないから心配することはないよ。道端にはなんでも落ちてるんだから。とりあえず色々歩いてみな」
　と言ってくれたそうだ。彼の名前はウジイエさんという。彼がお金の稼ぎ方を教えてくれた。それは、
「とりあえず歩け」

ということだった。
　ウジイエさんは鈴木さんの家から少し離れた、花はな川かわ戸ど公園に小さい小屋を作ってその中に住んでいた。そして、たまに鈴木さんのところへ来ては集まってきた材料を使い、料理をよく作ってくれた。鈴木さんはそれを見ながら料理も覚えていく。
「それで、どういうお金稼ぎを教えてもらったんですか」
「古本売りとテレホンカード売りだよ」
「どういうところが買ってくれるんですか」
「古本はもちろん古本屋。テレホンカードは金券ショップで買ってくれてた」
　まだゴミの分別を厳しくやっていない時で、可燃ゴミの時に古本がよく出ていたらしい。
「漫画本、単行本、それとグラビア写真集だね」
　持っていくのは国際通りの角にある古本屋。買ってくれるところは２軒あった。そこの２軒は、持っていくと証明書無しでも買ってくれたそうだ。
「じゃあ、テレホンカードはどこで拾うんですか」
「電話ボックスだよ。みんな忘れていくでしょ」
「そうですね。忘れますよね」
「しかも、当時は使いきったテレホンカードも買ってくれたんだよ」
「ホントですか！」
「うん。１枚12円で。今はもうやってないけどね」
　１９９８年ごろはどんなテレホンカードもいくつかの金券ショップでは売ることができたそうだ。それをウジイエさんは知っていたのだ。
「０ゼロカードが１枚12円だろ。そして残ざんカードは７掛けで、サラカード（新品のこと）も７掛けで買ってくれたんだよなー。あのころ」
「しかも、私はよく分かんないんだけど、たまに人気があるプレミアカードなんかも拾ったりするんだよ。４０００円になった時もあった

よ」
　その二つの仕事をしながら月に３万ぐらいを得ていた。鈴木さんはウジイエさんのおかげで自活できるようになっていく。で、それで稼いだお金で食材などを購入し、ウジイエさんにも気持ちを返していた。
「ウジイエさんは、その二つの仕事のプロなんですか」
「いいや、それがあの人は一切働かないんだよ」
　はい？　どういうことですか。
「意味が分からないんですけど」
「ウジイエさんは、人柄がいいんで、なんでも集まってきちゃうんだよ」
　ウジイエさん恐るべしである。その天性の人柄で、みんなが集まってくるようになり、ついでにいろんなものを持ってきてくれるらしい。そんなふうにみんなが集まる場所だったからこそいろんな情報が集まってきていた。さらにその情報を求め、周りからは人が集まる。人柄による、０円相乗効果が起こっていた。さらにその輪は路上生活者だけではなく、普通に働いている人たちにも広がっていったそうだ。
「あの人にはパトロンがいたんだよ」
「パトロン⁉」
「魚うお河が岸しの人だったっけなあ。えらく体格のいいアンちゃんだったけど、稼いではウジイエさんにお金を渡していたよ。だからウジイエさんはさらに働く必要がないんだ」
　こういう人もいる。だけど、鈴木さんも全然不思議そうに見ていない。当然のような顔をしている。これは、ぜひウジイエさんの家も訪ねてみたいものである。

ドロボウ市に店を出す⁉

　そんなウジイエさんに教えてもらった古本とテレホンカードだが、少しずつ暗雲が垂れ込めてくるようになる。

「みんなが古本を拾っては売りに行くもんだから、古本屋で売れる数より売りに来る数の方が多くなり、店に在庫の山ができるようになってしまって……」

どこの世界でもそうだが、それが稼げると分かると、みんながやりだすのである。そして、最終的には「身分証明書の提示」を店側が要求するようになってしまう。それでは鈴木さんたちは本を売ることができない。古本の仕事はかなり厳しい状況になってしまった。さらに追い討ちをかけるようにテレホンカードの方も変化していた。世は携帯電話大ブーム。次第にテレホンカードの需要はなくなっていく。

「それで、最終的には０カードと、残カードを店が買わなくなってしまったんだ」

これでは前のようにその二つの仕事で稼ぐのは難しい。鈴木さんは次なる仕事を見つけなくてはならなくなった。

「でもそれが、すぐに次の仕事が見つかったのよ」

痛快である。本来、人間というのは困らないようにできているのかもしれない。

その当時仲良くなった友人の１人に、隣に住んでいたカトーさんという人がいた。隣に住んでいたので、料理の技術が上がっていた鈴木さんは、カトーさんによく食事を作ってあげていた。カトーさんは電化製品を販売する仕事をしていた。仕事といっても店を持っていたわけではない。じゃあ、どこで売っていたのだろうか。

「玉たま姫ひめ公園で１日おきぐらいに朝５時からやってるドロボウ市で店を出してたよ」

なんですか？　ドロボウ市って……。

「なんか怪しそうですね」

「っていっても、別にドロボウしてきたもの売るわけじゃないよ。拾ったものを売る朝市だよ」

「誰でも出していいんですか」

「縄張りはあるって聞くけどねぇ」

そういうところが面白い。どんな場所にもルールがあるわけであ

る。
「で、そこに店を出しているカトーさんに鈴木さんは何を売っていたんですか」
「そのころはまだ家電リサイクル法なんかなくて、道端には粗大ゴミがゴロゴロ落ちていたのよ。で、それを拾ってきてた。どんなものでもカトーさんは買ってくれたんだよね」
「そのころ、こんなの落ちていたよっていうのあります？」
「電化製品は本当になんでも落ちていた、最新式のパナソニックのコンポなんかも新品で落ちてるんだよね。それは使ってたけど、バッテリーにつなげても電気を無茶苦茶使うんで売っちゃったけどね。カトーさんに４０００円ぐらいで」
「あとはねぇ、目の前で段ボール箱を捨てた人がいて、行ってみると……煙草たばこだった。数えたら１５０箱ぐらいあった」
「なんで捨てたんですかね」
「分かんないよ。でも、確かに目の前でポイッと捨てたんだよ。公園で」
　東京は変な都市ですね。
「それを？」
「もちろん、カトーさんのところへ持っていったよ。まずはみんなに配ってあげたけどね。そしたら１２０箱を１万円以上で買ってくれたよ」
「本当になんでも落ちているんですね」
「その当時はすごかったよ。でも、家電リサイクル法のおかげでそれも減っていったんだよ」
　それまで家電製品は廃棄されると、そのまま埋め立てに回されていた。その中にはまだ再利用できる資源がたくさん存在していたのにである。そのため、それを有効にリサイクルしていくために１９９８年に、
「特定家庭用機器再商品化法（通称＝家電リサイクル法）」
　が制定される。これはその後、２００１年に完全施行された。この

ため次第に電化製品は路上から姿を消していく。それに伴い、鈴木さんもまた新しい仕事を探さなくてはいけなくなった。
「で、いよいよアルミ缶を拾い始めるんですか」
「アルミ缶拾いの仕事自体は、前にも言ったように元からあったんだよ」
「だけど、１キロ＝50円だったんですよね」
「そうそう」
「それが、50円から少しずつ値上がりしていき……」
「75円になったところで私は集めだした」
「どこに売っていたんですか？」
「マルヤマ商会という会社が隅田川沿いまで車で来てくれて、拾ってきたものをなんでも買ってくれたんだよ。新聞紙、雑誌、電化製品、使い終わったバッテリーもそこが買ってくれた。１個50円で。だから、うちはゴミなんか一つも出なかったよ。そして、そこでアルミ缶も買ってくれていた。自分の家まで取りに来てくれるから便利だったんでやるようになった」
　古本、テレホンカード、電化製品と変遷した末、鈴木さんはアルミ缶拾いに移っていった。そして、そこに時代の追い風も吹く。アルミの値段は上昇を続け、鈴木さんがアルミ缶拾いを始めたころ、つまり家電リサイクル法が完全施行された２００１年から２００７年までを見ても１・95倍にまで跳ね上がっている。鈴木さんは次第にアルミ缶拾いに本腰を入れていく。そして現在のような生活スタイルが出来上がっていったのである。

ゴミの錬金術

　１日に２度にわたって行われるアルミ缶拾い。その仕事のみで彼らは１ヵ月になんと５万円以上の収入を得ている。つまり、すべて都市のゴミによって得ているわけだ。これは大変なことである。
「でも、最近は本当に大変だよ」
　珍しく弱気です。どうしたんでしょう。

「同業者が増えてきたからね。こうも多いと、やっぱりアルミの拾える量は減っちゃうよ」
　誰でもお金が落ちていると分かったら拾い始めるでしょう。最近では、今まで１回も見たことがない人が拾っていることも多いという。これはかなり大きな問題のようだ。
「鈴木さんは自動販売機とかからアルミ缶を拾うんですか？」
「バカ言ってんじゃないよぉ」
「えっ？　違うんですか」
「あんなところは誰でも考えついちゃうでしょ」
　はい、そうです。僕も思いついたぐらいですから。
「ってことは、毎日何回もいろんな人がチェックしているってことですよ」
　ってことは……。
「アルミ缶が入っているわけないでしょ。はなからオレは自動販売機は見ない」
　それでも鈴木さんは常に安定した月収を得ることができていると言っている。それはなぜなのだろう。そこには綿密に練られた計画と、鈴木さんの人間関係のうまさが隠されているようだ。ここでは、鈴木さんがどこでアルミ缶を拾い、どうやって換金しているかを詳細に調査し、秘密を探ってみたいと思う。
「まずは１週間のスケジュールを知りたいんですが」
「はいよ」
「月曜日が入いり谷や・浅草地区で、火曜日が浅草２、３、４丁目、水曜日が竜りゅ泉うせん……」
　いつものように即答である。
　鈴木さんの話をまとめると次ページの表のようになる。

って、鈴木さーん。
「なんだい」
「休みがないじゃないですか」
「そうだよ。ゴミは毎日出るんだよ。行かなかったら悪いじゃないか」
休みといえば、火曜日の朝の部だけだ。というか、朝と夜、１日に２回もやるんですね。
「夜のうちに出す人もいるでしょ。それに夜は他に拾っている人がそんなにいないし、暗くて人にも見られないから、ゆっくりじっくり取ることができるんだよ」
なるほど。本当にこの人はいつも明快な理由があるなー。
「みっちゃんは、けっこう休みがあるんですね」
「うん。でも最近はこの日以外にもよく働いているよ。酒さか代だい稼がないと」
酒量で仕事量が変わる。ホントにダイレクトです。
鈴木さんは資源ゴミが出るときを中心に回り、みっちゃんは不燃ゴミが出るときを中心に回る。２人でいいコンビネーションを形成している。
この綿密な計画。これにより、人があてずっぽうに探している間に、鈴木さんはアルミ缶を狙い撃ちすることが可能になるのである。
「一番収穫できるのはいつなんですか」
「うーん。それは土曜日かな」
土曜日は、
「ホテル白ばら」
となっている。西浅草にあるラブホテルのようだ。
「ホテル白ばらは１店舗だけじゃないんだよ」
「パート１からパート３まであって、さらに別名の店舗がダンシーとウィルの二つで、全部で５店舗もある」
「だから土曜日はそこだけで７～８キロ。たまには10キロいく時もあるよ」

おっ、鈴木さんますます饒じよう舌ぜつになってきました。リズムに乗ってポンポン話が飛び出してくる。
「随分、大口のお得意さんですね」
「すごいでしょ。でもこういうところを見つけるのは至難の業なのよ」
　なんでこうも面白い話が、聞けば聞くほど、どんどん出てくるのでしょうか。僕も次第に引き込まれ、時がたつのを忘れて入り込んでいく……。
「で、どうやったんですか」
「はじめは先輩がそこでもらっていたのね」
「でもある日、なぜか彼はそのホテルからアルミ缶をもらうのをやめたわけ」
　これはチャンスですよ。
「で、それをたまたま小耳に挟んで」
　どうするんですか。
「ホテルに行ったわけよ」
　さあ、ここから鈴木さんの交渉術が始まります。
「しかも、掃除のオバちゃんがアルミ缶を出しそうな時間を見計らってね」
「なんでですか？　誰もいない方がもらいやすそうじゃないんですか」
「違うのよ、違うの。今までもずっと教えてきたじゃないか」
「とすると、やっぱり会って話すんですか？」
「当たり前よ」
　人の想像したことの逆をやる。いつも鈴木さんはそうだ。
「掃除のオバちゃんにちゃんとあいさつしたよ」
「その後なんて言うんですか」
「全部正直に言うわけよ。私はこれで生計を立てていますので、もしもよろしかったら、ここのアルミ缶を毎回下さい、って」
　それで、オバちゃんはどう返してくるのか？

「毎週出すから来なさい、だよ」
　参りました。どんなに空き缶を拾う人が増えようと、鈴木さんの拾える量は減らないわけだ。なんだか、まるでビジネス書を読んでいるような気分だ。
「目の前に落ちている空き缶は拾うな。都市に隠れている空き缶を確実に拾え！」
　第１章のタイトルが頭に浮かんだ。
「ある日、社長にも会ったよ」
「怒られたりしないんですか」
「むしろ、色々話をしてあげたよ。面白い社長さんだった。それでこのホテルの空き缶はすべてもらえることになった」
　なんだか映画みたいになってきた。
「でも、その時に条件が出た」
「すんごく気になりますね。その条件」
「もしもこのホテルがつぶれたらオレの面倒を見てくれ、と言われたのよ」
「それ、よっぽど認められてますね」
「いやー、本当に感心してたよ。オレの生活を。そうなりたいと言ってたもんね」
　とにかく要所要所で話がうまいのだ。
　鈴木さんのお得意様を見つける戦法はこうである、まず何時ごろアルミ缶を出すか時間を割り出す。そして、次回出す時間にちょうど出向き話しかける。向こうは片付けなくて済むから、きちんと会話ができる人だと分かったらすぐ承諾してくれる、というわけだ。

「契約」は何軒くらいと？
「交渉するのは何もホテルやマンションだけじゃないよ」
　鈴木さんは驚き続ける僕にさらに内角高めを投げてくる。
「と言いますと……」
「個人のお宅でも定期的にアルミ缶をくれるところがあるのです」

なんと鈴木さんはこのやり方を個人の住宅にも応用しているらしい。
「それはかなりすごいですね」
「アルミ缶を捨てている奥様にあいさつをして……」
　私はこれで生活をしているので、もしよろしかったら毎回私に下さい、とまた正直に言うのだそうだ。
　びっくりされないのだから、よっぽどうまい言い方をしているのだろう。
「そうすると何人かの話の分かる奥様方は、なんと他の人には見えないようなところに隠して、自分用にアルミ缶を用意してくれるんだよ」
　ということらしいのである。これはもう見事としか言いようがない。
「ゴミ置き場じゃなくて、家の中の納戸とかに置いといてくれるわけよ」
　鈴木さんは独自のアルミ缶置き場まで持っているのだ。
　コンビニの表にある空き缶入れなどからだけでは大収穫は望めない。競争率が現在、非常に高いからだ。誰も分からない場所からアルミ缶を拾わなくてはならない。さらに「契約」を交わすことができると、自分だけが常にアルミ缶を得ることができることを意味するのだ。
「何軒ぐらい契約しているんですか」
「個人住宅だけでも５～６軒あるよ」
　僕が考えていた缶拾いと、現実は大分違っていた。鈴木さんは、勘で拾っているわけではなかった。頭脳だけを使っていた。
「ゴミ置き場もねぇ……」
　鈴木さんはなおも続ける。
「いろんな人がいるわけよ。朝早く起きる人、仕事前に出す人、いつも起きるのが遅い人……」
「はい。僕もいつも８時ギリギリですもん」

自分のこととも照らし合わせてみた。
「ということは、同じゴミ置き場でも時間帯によって違うわけですよ」
「よく考えるとそうですねぇ。僕たちは自分がゴミを出す瞬間しかゴミ置き場は見ないけど」
鈴木さんは、缶を入れるプラスティックの箱が出る時間帯がゴミ置き場によって違うことを知っていて、それぞれ何時ごろ出るのかということまで知っているのだ。これでは他の人は手も足も出ない。
「だから、毎日朝７時に１周して、７時15分にあそこに戻って、７時20分にここで１袋出る、そして40分に契約マンションから大量に……とか、この頭の中にインプットされているわけですよ」
「恐れ入りました」
聞けば聞くほど広がる０円生活術。鈴木さんの脳味噌はどうなっているのだろうか。
「でも今、本当にアルミ缶の値段は上がってきているよ」
まるで経済アナリストのような発言。
「やっぱ中国かなー」
世界情勢とも非常に密接な０円生活。肌で体感しているため反応がリアルだ。
「どれぐらい上がっているんですか」
「アルミ缶拾いを始めた時が１キロ＝75円だったって言ったでしょ」
「はい」
「あれが、たしか２００１年かそこらだよ」
この話を聞いたのは、２００６年のことである。
「そこから５年たって、今１キロ＝１１６円だからね」
「上がってきてますねー」
「あっ、間違った。それは先々月までだった。先月からまた10円上がったんだよ」
「ということは、１キロ＝１２６円！」
「２人で１週間に１００キロ、アルミ缶を拾うから」

１２６円×１００キログラム＝１万２６００円
　つまり、
　１万２６００円×４週＝５万４００円

「５万４００円も稼いでるんですか！」
「だからこの間言ったじゃないですか。食費＋雑費で５万円だって」
「話聞いていたら、だんだんと納得してきました」
「ねっ、頭使っているでしょ」
「はい」
「で、マルヤマ商会に売るんですか」
「いや、あそことはケンカしちまったんだよ」
　なんだか色々とあったようである。
「で、今はマルタにお願いしてるんだ」
　マルタ商会という大おお井い町まちの回収業者が鈴木さんの周辺の人たちのためだけにわざわざ毎週火曜日と土曜日に回収に来てくれるそうだ。
「ここまでよく回収に来てくれますね」
「でも他の人たちはそれほど集められないから、本当は割に合わないので、やめたいんだと思うよ。でもうちだけは１００キロ超えるでしょ」
「それをもらいに来てると」
「そうだよ。だからそのおかげで他の人たちも少ないのに換金できるんよ。だから、オレが集めなきゃ。雨の日でもやるよ。休みもないよ」
　鈴木さんは自信を持ってそう言った。
　そうやって１キログラム＝１２６円で回収したアルミ缶は、今度は仕切り屋（アルミ問屋）が１キログラム２５０～３００円で買うのだ。日本中に転がっている、ゴミと化したアルミ缶はしっかりお金に換わっていくのであった。

最近また鈴木さんのところに顔を出したら、ちょっと困った顔をしていた。
「どうしたんですか」
「いやー、困ったよ。盗まれちゃったよ」
「何を？」
「アルミ缶だよ。せっかく集めてきて大きなビニール袋にまとめたものを、そのまんま夜持っていかれちゃった」
「初めてなんですか」
「いや、これで３回目だよ」
　アルミ缶拾い戦争が白熱する中、拾い集めた人から盗とった方が一番手っ取り早いということで、窃盗が頻繁に発生しているという。しかも、毎回金曜日に盗られているらしい。
「土曜日の換金の前なんだよな。事情に詳しい者の仕業かもしれない」
「どうするんですか」
「今度、張り込んで絶対見つけてやる。前に警察に相談したんだよ」
　本当ですか。で、どういう反応が？
「そしたら、それはちゃんと犯罪になると言っていたよ」
　鈴木さんはどんな問題にも筋を通して向き合っている。
　アルミ缶問題は今後激しくなりそうな予感もする。

アルミ缶拾いツアー
　鈴木さんの頭の中には東京ゴミマップなるものが存在している。その頭の中の地図を実際に作成したら、とても興味深いものになるだろう。僕はそんな鈴木さんの地図を持って街を歩いてみたい衝動に駆られてしまう。鈴木さんには、僕とは全く違うように街が見えているのではないか。彼と話していると、いつもそう思う。そしてその目で僕も歩いてみたいと思う。
　で、僕は２００７年３月26日（月）に鈴木さんのアルミ缶拾いに一緒に参加させてもらった。午前７時に鈴木さんの家集合。鈴木さんの

家に到着すると、鈴木さんはもうすでに自転車に乗って準備万端であった。そしてなんと、隣には僕専用の自転車が用意されていたのだ。
「はい、じゃあ坂さか口ぐちさんは今日この自転車に乗ってね」
「いいんですか？　じゃあ、お言葉に甘えて」
「そして、これをポケットに入れておいて下さい」
「これ、なんですか」
　僕はもらった紙切れを広げてみた。そこには、
「譲渡証明書」
　と書いてあった。例の紙だ。
「もしも警察の人から自転車を確認したいと言われたら、すぐこれを出すように」
「なんか、いいっすね。抜け目ないですね」
「じゃあ出発します」
「はい」
　そして、僕はポケットに証明書を突っ込んで、新品のような自転車にまたがり鈴木さんの後について出発した。
「今日はどこらへんを回るんですか」
「今日は台東区今いま戸ど・橋はし場ば・東浅草そして浅草。不燃ゴミの日だよ。今日はごきげんだよ」
「どうかしたんですか？」
「昨日の競馬、11レースで枠連３−８が当たったんだよ。１００円が、１７００円になったよ」
　と言いながら自転車をこぐ。競馬は鈴木さんとみっちゃんの趣味であり、実益も兼ねている。毎週土曜日と日曜日には５００円ずつ馬券を購入する。鈴木さんの予想はかなりのもののようだ。僕が訪ねた時は、大体当たっていた。賭けるのは必ず１口１００円と決めているのだが、それでも毎回１０００円以上にはなっている。たまにかなりの大穴も当てるらしい。
　鈴木さんが18～19歳の時に、その時勤めていた会社の忘年会で鬼き

怒ぬ川がわ温泉に行き、そこで競輪をやったのが始まりらしい。そこで５００円ずつ２枚購入し、それが１万５０００円になった。つまりビギナーズラックである。それでハマッた鈴木さんは、次の日は仕事を休んで競輪場へ行ってしまう。
　その後、「人間」の予想はなかなかできないと思った鈴木さんは、「馬」の予想に転向する。そして、27～28歳のころに宇う都つの宮みやで競馬をやっていた時、それまでずっと勝っていたので、思いきって、２ー7に３万円を賭けてみたそうだ。それは見事的中し、39倍だったので、払戻金は１００万円を超えてしまう。
　隅田川で暮らし、みっちゃんと出会ってから初めて行った競馬でも、３００円が２万５７００円になった。それで、みっちゃんも競馬を始めるようになる。
　鈴木さんはデータ収集もせず、パドックも見ないそうだ。ひらめきだけに頼っている。ポイントは、そこそこ走るはずなのに、予想屋がチェックしていない馬を狙うことだという。
　そんなこんなでアルミ缶拾いが始まったのだが、自転車のスピードが異常に速い。追いかけるのに精いっぱい。
「鈴木さんっ！　ちょっと速すぎないですか」
「みんなが一斉に拾ってるんだから、急がないとなくなっちゃうよ」
　周りを見ると、リヤカーを押しながら缶を集めている姿をちらほら見かける。
「やっぱり集める人が多くなってきて、鈴木さんも取れる量が減ってきましたか」
「そうだよ。最近は本当に多くなってきた。どうなっちゃってるんだよ」
　鈴木さんは、独自に開発した収集場所があるからそれでもまだ大丈夫だと言う。今日はその奥義をほんの少し見せてもらおう。少し興奮気味になる。それにしても、こぐのが速い。僕も追いつこうと必死だ。しかも、そのスピードで走りながら、鈴木さんの目はちらっちらっと捨てられたゴミ袋を見ている。

「このスピードでビニール袋の中身なんか見えるんですか」
「何年もやってるからね。見えるよ。ほらあった」
　鈴木さんは、キキーッと自転車を素早く止め、ビニール袋の中に入っていたアルミ缶を５個取って、自分が持ってきたビニール袋の中に入れた。そして開けたビニール袋をきちんと元の通りに結び直していた。
「なるほど、立つ鳥跡を濁さず、ですね」
「そう。これが肝心。これをしない人たちも最近いるわけよ。おかげでオレたちまで汚くする人間みたいに思われてしまうからね。困ったもんだよ」
　絶対に汚くしない。むしろ綺き麗れいに並べ直す。それが鈴木スタイル。
「そろそろ、出るかな」
　と言って角を曲がった。この先にいつも出してくれるところがあるそうだ。
「おっ、あった、あった。今日は２袋か」
　と鈴木さん。
「いつもは３袋ぐらい出るんだけどね。やっぱり冬は数が減るね」
「じゃあ、やっぱり夏はすごいですか？」
「夏はいいよ」
　と２袋をさっと前のカゴに入れて、また次の場所へと急いだ。
　大体どこでどれぐらいの缶が出るか、鈴木さんは頭の中に完全に入れているようなのだ。これはまさに職人仕事である。
「空き缶の出方は２種類あります」
「と言いますと……」
「まずはきちんとアルミ缶だけをまとめて捨てる。もう一つはいろんなゴミとごちゃ混ぜにしてアルミ缶も入れている場合ね」
　この地区ではアルミ缶は不燃ゴミの時に出していいようである。
「で、オレは、大体はアルミ缶だけが入っている袋を狙うの。まぁ、混ざっている場合でも、たくさんあるようであれば、袋を開けて取る

けどね。そして、残されたビニール袋の中の少ないアルミ缶は、ミーコが歩いてゆっくり丁寧に拾うって仕組みになってる」

なるほど。いいコンビネーションになっている。鈴木さんが自転車で急いで大口の獲物を狙っている間、みっちゃんは歩いて鈴木さんが逃した獲物を丁寧に拾う。

　空き缶がたまってきたら、持ってきた90リットルの大きなビニール袋にまとめていく。そして、荷台に載せる。荷台には、空き缶を載せやすいように、幅広い木の板をくっつけている。そこに空き缶の入ったビニール袋をゴムで留めて載せるのだ。

　ビニール袋の両端は、はさみでカットされている（次ページの写真）。ここから空き缶の中にたまっている飲み残しが流れるようにしてある。こういう細かい工夫は、鈴木さんの得意分野である。

そして、一通り回った後、次は他のゴミと混ざっている空き缶を分別して集めていく作業に取り掛かる。鈴木さんはまたちらっちらっと見ながら脈がありそうなゴミ置き場があると、今度は自転車を止めて降り、堂々と分別を始める。縛ってあるゴミ袋をいくつか解き、ゴミを空き缶とその他の不燃ゴミとに仕分けしていく。そして、空き缶だけになった袋を自転車に積み、他のゴミだけになった袋はまた綺麗に縛り、ゴミ置き場にきちんと戻す。

　鈴木さんは、この作業はきちんと丁寧にしないといけないと言った。結局この作業を雑に、つまりゴミ袋を解いてそのまま散らかしていくと、現在は空き缶拾いを比較的認めてくれているこの台東区でも、空き缶拾いが困難になってしまう。そのため常にゴミ置き場は清潔にしようとしている。他の地域では空き缶拾いを禁止しているところが多いのだ。

「台東区と文京区は空き缶拾いを駄目とは一切言わない。墨田区や荒川区は完全に駄目なのに」

　鈴木さんはよくこう言っていた。これはとても不思議なことである。それぞれの区によって警察の対応も全く違うようなのだ。墨田区、荒川区では空き缶を拾っていたらすぐに職務質問され、やめなさいと言われるらしい。しかし、台東区では全く文句を言われないそうだ。鈴木さん自身は行かないが、文京区も同じく寛容らしい。

「ここも駄目になったら、また違うところを探すしかない」

　禁止されていることはやらない。これは鈴木さんの鉄則だ。

　よし、僕も拾おうと探していると、鈴木さんが見逃したのか、たくさん空き缶が入っている袋を見つけ、すぐさま拾い鈴木さんのところに持っていった。

「鈴木さん、ほら拾ってきましたよ」

　意気揚々と伝えると意外な答えが返ってきた。

「それは違うんだよ。戻してこないと」

　あれれ。

「なんですか？　これも缶ですよ」

僕が持ってきたのはコーヒーの缶だった。
「これはね、アルミじゃないんだよ。鉄なんですよ」
「鉄なんですか、これは。でも鉄は回収してないんですか」
「そうなんだよ。割が合わないらしい」
アルミの方が業者にとってリサイクルした際に利益になるからだそうだ。そのため、間違ってコーヒー缶が混ざらないように注意しているという。煙草の吸いが入っているアルミ缶も同様にリサイクルできない。
「そもそも、なんでコーヒーは鉄の缶なんですか。面倒くさいから統一すればいいのにと思うけど」
とここからまた鈴木さんの知恵袋が炸裂する。
「缶コーヒーにはたくさんの糖分が入っているため、アルミニウムだと金属が溶けてしまうらしいんだよ」
「えっ、そうなんですか。なるほど」
本当になんでも知っている。
「だって、これが自分の仕事ですよ。知らないとまずいだろ」
「はい」
「だから、最近出ているブラックコーヒーはアルミの缶だよ。今度チェックしてごらん」
企業の様々な動きとも皮膚感覚で付き合っている。

仕事はシステマティックに

鈴木さんはどこの場所で、何時に、どれくらいの量の空き缶が出てくるか、その詳細をすべて把握している。人それぞれにゴミを出す時間帯は決まっているのだ。自分のことを考えてみてもそうだ。鈴木さんはこれまで綿密に調べてきたデータをもとに自転車で走るルートを決め、また何時になるとここに戻ってこようというふうに、時間ごとに同じ場所に戻ってきたりする。
「浅草５丁目のこの家は午前７時半になると２袋出る」
と言うので行ってみると本当に置いてある。鈴木さんは１週間に約

１００キログラム集める。行く前はそんなこと不可能だろうと思っていたが、体験した後では十分納得することができた。僕が参加した日だけを見ても、鈴木さんは契約しているところを４軒持っていた。そこだけでも十分なアルミ缶を獲得することができるのだ。

　午前７時半　　浅草５丁目の住宅
　午前７時45分　今戸２丁目の１軒目のマンション
　午前８時　　　今戸２丁目の２軒目のマンション
　午前８時半　　浅草５丁目のマンション

　午前７時45分。今戸のマンションに行くと、掃除のオバちゃんにあいさつをする鈴木さん。するとオバちゃんがアルミ缶を３袋分持ってきた。
「今日はけっこう出たわねー」
　と言ったりしながら、鈴木さんと談笑している。なぜか掃除のオバちゃんも嬉うれしそうだ。
「いいわね。今日はバイトまでいるのかい？」
　とからかわれた。
　そのマンションの後、自転車で他の場所を見つけながら、今戸のもう一つの契約マンションに午前８時前に着く。
「午前８時きっかりになったら、ぶっきらぼうな男性がこのマンションの掃除をしにやってくる。そして、たくさんの空き缶の入った箱を持ってきてくれるんだ。あいさつしても絶対彼は返事しないから、坂口さんもしなくていいよ」
「あっそうなんですか」
　待っていると、本当に８時きっかりに自転車に乗った掃除屋の男性到着。そして鈴木さんの言う通り、空き缶のいっぱい入った箱を鈴木さんの目の前にポイッと出した。今度はお互い何も喋しやべらない。
「でも毎週きちんと置いといてくれるんだよ。変だろ」
　と、不思議な関係。ここは、以前隅田川にいて他の場所に移った人

から譲ってもらったらしい。
「ここでもらうと、ちょうど持ってきた袋にいっぱいになるわけよ」
　やり始めて１時間。かなり集まった。いつもここで１回、家に空き缶を置きに帰る。
　なんだか本当にシステマティックな仕事である。すべて計算通り。
　家に帰って、満杯になった90リットル袋をアルミ缶置き場に投げて、また出発。
「今度は８時過ぎに出す人たちの分を取りに行くよ」
　さっきと同じ場所に行っても、また違うゴミが増えている。その中から今度はきちんと仕分けをしていく。それと同時に、使えそうな不燃ゴミも探す。途中で、歩きながら拾い続けているみっちゃんと会った。
「偶然ですか」
「いや、もちろんこれも計算のうちよ」
　これも計算のうちらしい。時計を見て、大体みっちゃんがどこにいるのか分かるらしい。ちょうどみっちゃんの袋もいっぱいになっていた。その袋を僕の荷台に載せて、また別れた。
　結局、２周目が終わって家にたどり着いたのが午前９時半。約２時間半の労働だった。
　短時間で密度の濃い仕事であった。
　集められた空き缶を両手でつぶしながら、今度は１２０リットルの白のビニール袋に入れていく。白のビニール袋は、他の人はほとんど持っていない。大抵、透明の袋だ。これは盗難防止にも役立っている。それでも３度、満杯になった１２０リットルの袋が盗まれたこともあった。そういうことにも神経を働かせなくてはいけないのだ。
　本日、アルミ缶は１２０リットルの袋に２袋分集まった。
「これでどれくらいになるんですか？」
「12キロぐらいかな」
「ということは……」

１２６円×12キロ＝１５１２円

になる。

「今日はけっこうよかったな。ありがとね。手伝ってくれて」

「いやいや、こちらこそ。これでまた夜もやるんですよね」

「そうだよ。飯を食べて、ちょっとお酒飲んで寝て備えるわけよ」

しかし、２時間半も自転車をかなり速くこぎ続けるのは、それなりに重労働である。

「いい運動にもなってるよ。病気にかからないもんな」

みっちゃんも戻ってきた。また収穫があったようだ。

仕事終わりに鈴木さん、みっちゃん、僕と３人で、焼しよう酎ちゆうで乾杯をする。この後はゆっくりくつろぐ。そして午後８時半ぐらいからの、この日２回目のアルミ缶拾いに備えて、夕方ごろから仮眠を取るわけだ。

それにしても、鈴木さんはアルミ缶を拾い集めている時にいろんなものを見ている。特にお店はよくチェックしている。どんな店が繁盛しているか、どこがつぶれてしまったか。この日も、鈴木さんがいつもお世話になっていたホテルがまた一つつぶれたと言っていた。ガソリンスタンドも最近はかなりつぶれているらしい。バッテリーもなかなか手に入らなくなってきたそうだ。

鈴木さんは毎日、早朝と深夜に自転車で走り続けているので、必然的にお店や会社の動向が見えてくる。どこのお店がはやっているか？　その理由は？　色々考察しながら彼は世の中を観察しているようだ。

西浅草の「まんぷく」、かっぱ橋通りの「スナック虎とら」。この２軒の飲み屋が最近気になっている店だという。いつ行っても（もちろん、実際には鈴木さんは店の中には入らず、通り過ぎるだけである）、どちらも狭い店内ではあるが、満席だという。周りを見回しても、他のお店には客が入ってないのにである。

鈴木さんは不思議に思い、ちょくちょく眺めていたそうだ。店の中からはいつも笑い声が絶えない。中をよく見てみると、「まんぷく」はママが、「スナック虎」はマスターとママがいて、どちらも人柄がいい印象を受けたのだそうだ。

「決して、ママは美人とは言えないんだよ。でも感じがいいんだよ」

と鈴木さんは言っていた。なんと鈴木さんの読みは的中し、「スナック虎」はかっぱ橋通りから上野に移転し、店の規模も大きくリニューアルされた。

「うまくいっているところは、うまくいっている。やっぱり一番重要なのは人柄なんだよね」

と鈴木さんは浅草付近のお店について、そう言っていた。

鈴木さんと、アルミ缶拾いの契約をしている人との関係や、自転車をくれた会社員との関係を見ると、この「まんぷく」や「スナック虎」に対する視点は、そのまま自分の生活に対しても向けられているのではないか。後述するが、毎年服を持ってきてくれる洋服屋の社長

までいるのだ。

　こういう鈴木さんの視点には、彼が０円生活をする理由のようなものが見え隠れしているように思える。

　鈴木さんは、「工夫して暮らす」ことがとても面白いからこの生活をしていると言っていた。そして、コンクリートの家には住みたくないとも言っていた。人がこういうふうに集まるのはここしかないとも言っていた。

　これらの言葉は、金銭的な価値を基準にした生活ではなく、人間的な生活を送るために０円生活をやっているというようにも取ることができる。都市というところは、その中間が存在しないところなのかもしれない。人はどちらかを選択しなければいけないのだろうか。

第３章　ブルーの民家

作り方は民家と同じ

　さて、ここからは０円ハウスの構造や工法について書いてみよう。２００７年の１月に鈴すず木きさんの家を訪れた時に詳しく聞いたのだ。

「鈴木さんはどうしてこの場所に家を建てたのですか」

「それは、ここが一番高い場所にあるから」

「高い場所？　全部同じなんじゃないですか」

「それが違うんだよ」

「それで、ここが一番盛り上がっていると……」

「ちょっと来てごらん」

　鈴木さんは外に出ていった。ついていってみる。

　鈴木さんの家はちょうど大きくカーブしているところに建っている。そこは鈴木さんの言うように他ほかのところより盛り上がっていて、地面が少し斜めになっている。

「全然他のところより高いですね」

「だろ」

「でも、それが何か意味があるんですか」

　こっちはさっぱり分からない。

「この微妙な高さが重要なんだよ。雨の日に」

　なるほど。水かさが増しても浸つからないんですね。

「そう。ここが最後に浸かる。この高さまでは、なかなか達しないよ」

　彼は家を建てる立地も熟考の末に決定している。何から何まで本当に隙すきがない。

「じゃあ、水に浸かったことはないんですか」

鈴木さんはキリッと顔つきが変わった。
「それがあるんだよ」
「よっぽど雨が降ったんですか」
「いや、それが原因じゃないんだよ。あれは人災だよ」
「人災？」
　さすがに人災じゃ川の水を氾はん濫らんさせらんないでしょ。
「国のヤツら、大雨が降った時に水門を開けやがったんだよ」
「それってどうなるんですか？」
「海から水が大量に流れ込んできた」
　おいおい。それはやばいでしょ。
「それで？」
「で、水門を開けた後に避難して下さーいって言ってきたんだよ。床下まですぐ浸かっちゃったよ。だから、すぐ水門を閉めろって言ったんだよ。オレらを殺す気かってさ」
　それは人災と言います。たぶん。
「水門閉めた途端に川は元の水位に戻っていったよ。水は恐ろしいよ」
　彼らが危険なところに住んでいることには変わりない。

　外に出たついでに鈴木さんの家の周りの説明もしよう（※前ページの図）。
　鈴木さんの家の前にはいろんなものが几き帳ちよう面めんに並べて置かれてある。
　まずはサウジアラビアへ出張していった会社員の人からもらった自転車。ピカピカのブルーである。大きな１２０リットルの白のビニール袋に、手でつぶされたアルミ缶が目いっぱい入っている。この日はそれが４袋積んであった。もうこれで50キログラム分相当あるそうだ。
　家の入口前には、水道水の入った宝たから焼しよう酎ちゆうのペットボトルが綺き麗れいに並べられている。この水を料理、飲み水、風

ふ呂ろ、洗濯にと１日で使いきる。飲み水用には、水道水を１回沸騰させている。水道水の調達先は近くにある隅すみ田だ公園。４リットルのペットボトル10本分の水を、毎日くみに行っているのだ。この隅田公園はトイレとしても利用されている。

　そして、小さな棚には手洗い用に、少年野球の試合なんかで使っているような大きめの水筒が置いてあり、石けんなども完備されている。その後ろの大きな棚にはたくさんのやかんと鍋なべが所狭しと並べられている。

　家の壁にも鍋やほうき、魚焼き用のグリルフライパンなどが、まるで抽象絵画のように陳列されている。外の物干しには、たくさんのビニール袋がぶら下がっている。

「なんですか、これは？」

　どれもかなり年季の入ったビニール袋である。といっても特別なものではない。普通のどこにでもあるビニール袋である。でも使い込んでいる様子。ビニール袋は使い捨てのイメージが強いから、ここまで使い込んでいると、まるで違うものに見える。

「それは、ミーコが使っているんだよ」

「みっちゃんが？」

「その小さな袋にあいつはアルミ缶を入れているんだよ。で、毎回毎回洗って使い続けているわけよ」

　本当に捨てるものは生ゴミ以外になさそうだ。

土間の七変化

　家の中に入ってみよう。

　まず入口に掛けられている厚手の灰色のカーテンをめくると、作業ができるようなスペースがある。ここはまだ室内じゃない。

「これ、土間ですね」

「そうだよ。ここは玄関の靴置き場であり、道具置き場であり、キッチンでもある」

「キッチン？」

　そうか。僕は初めて鈴木さんの家に来た時を思い出した。ここで餃ギヨ子ーザを焼いていたではないか。

「なんだか、いろんな使い道があるんですね」

「まだあるよ」

「ん？　まだあるんですか。なんだろ」

「お風呂だよ」

「はい？」

「お・風・呂」

　恐るべし、隅田川の０円ハウス。なんと風呂付き物件だった。

「駅から徒歩５分、風呂付き、川沿いですかー」

　一体どこがお風呂なのか？

「簡単だよ。ただこのコンロでお湯を沸かすだけだよ」

　そっか。それでお風呂になっちゃうのか。

「まずは入口のカーテンを閉めて」

　おっ、なんとなくサウナ風。

「すのこに載って」

　ちゃんと、すのこまで常備してある。

「で、沸かしたお湯で体を洗う。これぞ、お風呂」

　またまた参りました。それは、まさしくお風呂です。

　なんだか楽しそうだな。不謹慎かもしれないが、僕は純粋にそう思った。

「週に１回ぐらいは銭湯に行くけどね。銭湯は天国だよ」

「ここはお風呂で、銭湯は天国なのか」
　僕は変なところで納得した。いいフレーズだなー。
「しかも、キッチンとしても使えるんですよね」
　収納の棚を三つ並べてその上にまな板を置いている。カセットコンロは普段は盗まれないように部屋の中に入れている。調理する時にはそのキッチンテーブルに置いて調理できるようにしている。

パチッ！
「あっ」
「暗いだろ」
　この土間にもバイク用ライトが取り付けられている。夜でも料理を作れるし、お風呂にも入れる。僕が帰る時は、いつもこの土間の電気をつけて送ってくれた。
　壁にたくさんビニール袋がぶら下がっている。
「これは何が入っているんですか」
「野菜だよ」
「ナス、キャベツ、タマネギ、ジャガイモ、ほうれん草、オレンジ……」
「毎日自炊ですか？」
「そうだよ」
「鈴木さんが？」
「前はね。最近はミーコが頑張っているよ。ちょっと味付け変だけどね」
「ここに食器、ここにはコップ……栓抜き系はこっち」
「で、米はここ。昔一番上の棚に置いといたら、盗とられたことがあったからね。今はここだよ」

そうやって真ん中の発泡スチロールの蓋ふたを開けて見せてくれた。

　壁には皮むき器、おろし金や魚焼き器など、調理道具の品しな揃ぞろえも豊富だ。

「包丁はここ、ね」

　と言って鈴木さんは部屋の入口であるはずのドアを開いた。

　ドアの裏側はまさに包丁入れになっていた。

「ちょうどいい高さですね」

　キッチンスペースから左手にちょうどこのドアがあり、開くと本当にちょうどの高さに包丁入れが出てくる。

　これが鈴木さんの家の真骨頂である。一つの部品が二つの全く違う用途に使える。

「ドアはまた、包丁入れにもなる」

　こんな家、どこにあるでしょう。たぶん、どこにもありません。ナンバーワンじゃなくて、オンリーワンな家。これからはそんな時代が来ます！　絶対！　僕は勝手に太鼓判を押した。

「いいでしょ。この収納」

　鈴木さんは素っ気なく言った。

さらにアイデア満載のドアの表側には、なんと取っ手が付いていない。
「鈴木さーん。これ取っ手が付いてないですよ」
「取っ手がなかったらどうなる？」
逆に鈴木さんが質問してきた。これはおかしい。
「えっ、取っ手がないと中に入れないじゃないですか」
鈴木さんが笑っている。
「それがポイントなんですよ」
と言って鈴木さんはまたドアを開いた。
「うちのドアには取っ手がない。でも鍵かぎなら付いている」
それは裏側に付いていた。
まだ、イマイチ僕は分かっていない。
「だからね、こうやって開けるわけよ」
鈴木さんは、ドアの上に少し開いている隙間に手を突っ込んで裏側から解錠し、ドアを開けた。
「毎回こうやって、ドアを開けているんですよ」
「取っ手がないから開けられないんじゃないかと思いましたよ。あっ！　ということは」
「そう」
「誰だれか知らない人が入ろうとしても、なかなか中には入れない」
「正解！」
すごい。ただこのドアの表側に取っ手を付けないだけで防犯になっている。
「ドアの上は隙間が空いているのに……。ドアに取っ手がないだけで、人は心理的に中に入れないと思うわけですね」
「そういうこと」
鈴木さん、あなたは一体何者ですか。
このように至る所に鈴木さんの技術が詰め込まれている。技術というか心理作戦である。僕は自分が今、大変な名建築と向き合っていることを自覚した。

服はどうやって手に入れる？
　居間の中に入ると、思ったよりも広い室内。３畳ほどの大きさである。０円ハウスの中では大きい方の部類に入る。部屋の真ん中には卓ちゃ袱ぶ台だいが置かれている。毎日ここで２人は食事をする。寝る時には折り畳んで収納する。卓袱台はかなり小さい。
「卓袱台は小さいですよね。人がたくさん来た時なんかはどうするんですか」
　鈴木さん、すかさず、
「これがあるんだよ」
　と言って、壁に掛かっている小さい折り畳みテーブルを取り出した。
「補助テーブルまであるんですか！」
「そうだよ。昔はたくさん人が遊びに来たもんだよ」
　狭いとか、もうなんにも関係ないんです。ここには、すべてがある。なぜなら鈴木さんが自ら作った自分のための家だからである。そんな単純なことを一つ一つ確認している自分がいる。この家に出会ってよかったなと思った。
　前述したように、部屋の中の照明はバイク用のライトである。ちゃんと、コタツ用のスイッチでバッテリーにつないでいる。
　部屋の中で話していたら急に電気が切れた。
「バッテリーがなくなりましたか？」
「いや、テレビはついてるでしょ。電球が駄目になったな。こりゃ」
「おい、ミーコ。ピカチュウ」
　はい？　ピカチュウ？　ポケモン？
「ピカチュウがいるんですか、ここ？」
「いるよ。ほれ、早く貸してくれ」
　みっちゃんはピカチュウらしき物体を出した。
「ぴっか——」
　ピカチュウとは、白色ＬＥＤの懐中電灯のことだった。
「何しているんですか？　ピカチュウで」

「スペア。スペア」
「電球のスペアもあるんですか」
　でも、もう僕はほとんど驚かない。ここまで来たら、たぶんあるだろう。
「もちろんよ。どれどれ、おっ、あったあった」
　鈴木さんは素早く電球をセットした。本当になんでも揃っている家である。
　ライト系は他にも充実していて、新聞を読む時などはライト付きの大きなルーペを使っている。ＬＥＤもいくつか持っていた。
　電化製品は自動車用のミニテレビが２台。パナソニックのラジカセが１台。これらもバッテリーで稼働している。他には電池で動くラジオが２台にウォークマンが１台ある。ウォークマンはみっちゃん用で、カラオケの練習に使っている。家の中には、とにかくいろんなものがビニール袋に入れられてぶら下がっている。鈴木さんいわく、
「ほとんど、ミーコのだよ」
　と少し困り気味である。そこはやっぱり女性なのだ。僕が行った時に見た限りでは、毎回違う服に着替えていた。おそらく、かなりの服を持ってる。
「２人とも服とかどうしているんですか」
　鈴木さんのシャツもいつもピシッとしている。漂白したみたいに真っ白だ。
「ある人が持ってきてくれるんだよ。新品を」
「はい？」
　また謎なぞの発言である。誰なんだ、そのある人って……。
「３年前にうちの家の前で散歩していた男性が転んじゃったのよ。水たまりに足を滑らせて。大丈夫かなと思って外に出てみると、びちょぬれなわけよ」
「またそこの反応も速いですね。鈴木さん」
「だから家からタオル持ってきて、綺麗にふいてあげたのさ」
　常に人のことを気遣っている。

「そしたらさ、ある日その人がまた訪ねてきたんだよ」
　またミラクルが起きだしました。
「この間は本当にありがとうございましたって、丁寧にあいさつに来てくれて。あの時のことは絶対に忘れません、感動しましたって言われてさ……。その人、洋服屋の社長さんだったんだよ。それで新品の長そで、半そでのシャツやらパンツやら、ミーコの服や下着なんかも持ってきてくれたんだよ」
「鈴木さん、もうホントにすごいですね」
「しかも、１回だけじゃなくて……」
　なんと！
「それから毎年２回持ってきてくれるようになったんだよ。夏物と冬物ね」
　鈴木さんのコミュニケーション能力には計り知れないものがある。１回きりではないのだ。常に関係性が持続していくのである。しかも、損得を気にしてやっているのでは一切ない。それよりも人間同士の結びつきの方に力を入れている。
「そうやった方が、なんでもうまくいくんだよ」
　鈴木さんはそう言った。自分でも分かってやっているのだ。ギブ＆テイクではなくて、ギブ＆ギブ＆ギブ。与え続けること。
「世の中には素晴らしい人たちがたくさんいるのよ」
　鈴木さんの言葉には真実味がある。
「人は見かけではないことを、分かってくれる人がいるから、幸せだよ」
　その実感が彼の生活を満ち足りたものにしている。
　僕はそういう鈴木さんの態度や姿勢は、家を自力で作っていることや、自分で考えて工夫して生活していることなどと切り離しては考えられないと思う。すべてが一体で自分の考えで行っているからこその余裕であり、豊かさだと思う。それは金銭的な豊かさとは全く別のものである。そんな生活を僕たちは忘れてはいけない。家のことだけを考えていても駄目だ。生活を向上させることだけを求めるというのも

違う。
　毎回毎回、いろんな話を聞くたびに僕は立ち止まって考えてしまう。

一石二鳥三食
　テレビの棚に白いタオルが綺麗に折り畳んで何枚も積まれている。
「これは何に使うんですか？」
「ご飯を炊く時に使うんだよ」
　と教えてくれた。
　カセットコンロでご飯を炊く時に蓋の上にこのタオルをかぶせておくのだそうだ。そうすると、噴きこぼれを防ぐことができる。炊飯器がない人ならではのアイデア。やっぱり直じか火びで炊いたご飯の方がおいしいんだよと鈴木さんは言う。
　こういう時にボソッと出てくる鈴木さんの一言は重い。僕はそれ以来、炊飯器をやめて土鍋でご飯を炊くようになった。鈴木さんの言葉通り、うまい。
　調味料がこの家にはたくさん並んでいる。七味唐がらし、味塩、瀬戸の本塩、生しよう姜が焼やきのたれ、ラー油、ターメリック、寄せ鍋のつゆ、わさび、小麦粉、片栗粉、砂糖と塩は揃いの容器に入れられている。飲み物も、煎せん茶ちや、コーヒー、紅茶、ココアなど勢揃いである。
「食事が一番重要だからね。うちにはなんでもあるよ」
　何度も鈴木さんの家にお邪魔したが、きんぴらごぼう、天ぷら、餃子など、毎回本当にいろんな料理を食べていた。２人暮らしというのもいい影響を与えているのだろう。毎日決まった時間に自炊している。三食しっかり食べている。そこにもいろんな工夫を見ることができる。
　鈴木さんとみっちゃんの収入のほとんどが食費で消えていく。食材と調味料とお酒と煙草たばこ。これが彼らが買うものである。
「食事だけは、常にしっかり摂る」というみっちゃんのスローガンの

下、毎日バランスの取れた食生活を続けている。もちろんすべて自炊だ。決して豪華ではないが、毎日好きなだけ食べ、好きなだけ飲んでいる。「食」は彼らにとって、生活の基盤でもあり、娯楽でもあり、２人きりで話すためのコミュニケーションツールでもあるのだ。

　ご飯は炊飯器を使って炊く。といっても、市販の炊飯器は家庭用の電源でしか動かない。それでどうするかというと、炊飯器の中の釜かまをそのままカセットコンロで直火にかけて炊くのだ。そして炊きあがった釜はそのまま炊飯器に入れる。これで電源を付けなくても十分保温されるそうだ。

　お米はきちんと半日は水に寝かせる。そうすると米が炊きあがった時にピンと立つそうだ。健康のため、精米より安い玄米で試した時もあったが、なかなかうまく炊けなかった。それで代わりに麦を入れたら、味わいも出て、さらに便通もよくなったと研究結果を教えてくれた。

　鈴木さんはこういう時によく昔の記憶を思い出す。それを踏まえながら色々と試すのだ。こういうことは、30歳も年が離れた僕は知らないことが多い。鈴木さんはこれまでの経験をすべて結晶させて生活を送っているのである。

　鈴木さんは、スイカやウリなど種があるものを自分の家の近くの植え込みに試しに植えておいたという。そしたらなんと、スイカとウリがそれぞれ一つだけではあるが、見事に実ったらしいのだ！

「スイカはあんまりおいしくなかったけど、ウリは甘かったなぁ」

　と笑いながら回想していた。東京での自給自足の可能性まで彼は体現しているのかもしれない。

　僕はたとえのつもりで鈴木さんの生活を、

「まるで森で山菜を採っているようだ」

　と書いたが、東京のド真ん中で農耕を試したんですからね。恐れ入ります。鈴木さんの目には東京がまさに大自然と映っているのでしょう。

　食材の買い出しは週に２回、２０００円程度になる。

しょうゆは月に２本程度。

味み噌そは５００グラムが月に６パック。

焼酎は２・７リットルが月に８本。

煙草は週に４箱。

これが月にかかる食費である。

カセットコンロ用のガス缶は、３本入りが２７８円で売っていて、１週間に９本。

これで月に約３万７０００円かかる。たまに安い弁当屋「ぱくぱく」で２５０円の弁当を買うが、１年のほとんどが自炊である。

「盆と正月だけは野家の牛ぎゆう丼どん大盛りを２人で食べに行くよ」

そんな時に食べる牛はおそらく無茶苦茶うまいだろう。

食材を買うお店は厳選されている。西浅草にある99円ショップで、ほとんどの食材は買われている。焼酎は「ライフ」という、これまた西浅草のディスカウントショップで。以前はそこで、カセットコンロのガス缶も買っていたのだが、そこが少し高くなったので山さん谷やにあるお店で買うようになったりと、かなり細かく振り分けられている。野菜は、「花やしき」という遊園地の前に出店される移動八百屋が安いらしい。すべて台東区内で調達している。

「99円ショップのキムチはライフのものより安いのに、断然おいしいんだよなー」

そういう比較リサーチも怠らない。そうやって入念に調査をして選択しているのである。安ければいいという考えではないのである。食に気を付けている鈴木さんとみっちゃんには、安いよりもまず、うまくなければ駄目なのだ。

「この99円ショップの社長のドキュメンタリーをテレビでやっていたんだけど、仕入れの仕方などにも共感する部分が多かった。イイものを安く仕入れるためにちゃんと考えてるよ。どうりでキムチもうまい」

テレビからの情報収集も幅広く行っている。

とにかく鈴木さんは、どこがおいしいだとか、安いだとか、売れているだとかの情報を収集し、選択する能力に長たけている。これが彼らの０円生活をさらに充実したものへと進化させている。
　水は公園の水を使っている。僕が、飲んでも大丈夫なのかと聞くと、
「東京の水は一流です」
　と言った。鈴木さんは水に関してもかなり研究しているようで、
「台東区は栃木・群馬からパイプラインでつながれている」
　のだそうだ。今は処理の仕方も改善され、完かん璧ぺきに近いと鈴木さんは言っていた。さらに、鈴木さんは以前、東京に水を供給しているもう一つの水源、丹たん沢ざわでダムを造る仕事もしていた。そのような経験もあり、きちんと水道局に確認しているから大丈夫と鈴木さんは言っていた。常に一つ一つ自分で確認して生活しているわけだ。

少年が一番怖い

　居間には時計もあれば、温湿度計まである。時計は10個以上持っているのではないか。アルミ缶拾いのために腕時計はそれぞれ腕にはめている。
　みっちゃん専用の、何が入っているか全く謎のバッグが三つもある。一つはトイレに行く時にいつも持っていっていたので、
「それはトイレ用なんですか」
　と聞くと、
「そうよ。これにはティッシュが入っているの」
　と答えてくれたが、他のはいまだに謎のままである。
　薬も揃いに揃っている。
「救急箱ごと」
　拾うのだそうだ。
「病院とかには行くんですか」
　と聞くと、

「１度もない」
　と即答だった。２人ともかなりの健康体のようだ。それでも病気になってしまったらどうなるのか。
「福祉にお世話になるから、入院してもむしろお金をもらえるらしいよ」
　それで一応は安心なようだ。それでも鈴木さんとみっちゃんはそんなこと気にせずに毎日自転車こいでますけどね。
　みっちゃんご愛用のミッキーマウスのぬいぐるみもある。
　天井を見ると、すだれが全面を覆っている。
「なんか、風流ですね」
「いいでしょ、これ」
　このすだれが効果的なのである。天井をすべて覆っているため、自分がブルーシートハウスにいるのではなく、古い日本家屋に座っているような錯覚を起こすのである。
「で、この上に段ボールを敷いている」
「それはなんのためですか？」
「断熱だよ。しかも、冬は逆に暖かいしね」
「段ボールって便利なんですね」
「さらに段ボールの上にはベニヤも載せているんだよ」
「それはかなり頑丈ですね。屋根を頑丈にする理由ってなんなんですか」
「それはまた人災なんだよ」
「人災？」
「そう、少年だよ」
「少年？　彼らが何をするんですか」
「ロケット花火で上から攻撃してくるんだよ。自転車を上から落っことすバカヤローもいるよ」
「はい？　本当ですか？」
「本当だよ。少年たちがオレは一番怖いよ。ちょっと来てみな」
　また鈴木さんと外に出た。

「ほれ」
　屋根のところを見せてくれた。ブルーシートの上に白い厚手のビニールシートがかぶせられている。
「これは一体なんですか」
「耐火シートだよ」
「おっかないですね」
「夏になるとひどいんだよ。近所では本当に燃やされたからね」
「それはもうイタズラじゃないですね。犯罪じゃないですか」
「だから、草むらに張り込んで捕まえるんだよ」
「捕まえたことあるんですか？」
「何回もあるよ。それで胸ぐらつかんで何やってんだよって言うと、大抵泣いて謝る。そして、警察を呼んで、親を呼ぶんだよ」
「警察はちゃんと話を聞いてくれるんですか？」
「もちろん。警察とはオレは非常に仲がいいからね」
「親は？」
「泣きながら本当にすみませんって言ってくるよ」
　一番恐れているのが、寒さでもなく、貧困でもなく、少年だとは……。これはかなりショックを受けた。何やってるんだよ、少年たち。
「でも最近は撃退してきたんで、大分減ったけどね。よっぽど少年たちには鬱うつ憤ぷんがたまっているんだろうね」
　逆に少年たちを心配している鈴木さんである。

日本建築の工法「遊び」

　床にはゴザが敷いてある。

「あれっ」

「これ、本物のゴザじゃないですね」

「そうだよ。ニセモノだよ。ビニール製。前は本物使ってたんだけどね」

「そうなんですか」

「梅つ雨ゆの時期になると湿気で腐っちゃうんだよ」

「なるほど。なんか少しずつ改良してるんですね」

　ビニールでもゴザがいいという選択。その微妙な調整がニクい。

　高床式にしているのだが、地面がコンクリートなので水分を吸収できない。なかなか湿気対策は難しいようだ。

「やっぱり昔の家の方がいいよ。床下は土でなくちゃいけないよ」

　民家が一番。それが鈴木さんのいつもの口癖である。

「この家は民家を元にして作られているんですよ」

　隅田川の０円ハウスが民家？

「どういうことですか」

「見た目は掘っ立て小屋かもしれないけどね、民家と同じ作り方をしてるんですよ」

「と言いますと……」

「夏は涼しく、冬は暖かい。そして家が分解可能」

「そうなんですか」

「すごいでしょ」

「どうやったら夏涼しく、冬暖かい家が出来上がるんですか」

「それは、隙間だらけの家を作ってあげればいいわけですよ。ほらっ、ここ」

　と言って鈴木さんは床に敷いているゴザをめくった。

　彼の言う通り、壁の下には隙間が空けられている。

「床下も空いているからね。夏は下から上に風が抜けるよ」

「でも、これじゃ冬は寒いでしょ」

「ところがどっこい、この隙間に綺麗に新聞紙をかぶせていくと……」
「あっ、全く風を通しませんね」
「新聞紙は本当に風を通さないよ」
　段ボールや新聞紙。僕たちが普段使い捨てのものとして利用しているものが、鈴木さんの家では重要な住宅の建材になっている。お金はかからないし、効果も抜群のようだ。これらの使用法を真剣に考えたら、現代の住宅にも使えるのかもしれない。
　この話を聞いたのは、２００７年の１月のことであった。無茶苦茶寒いはずだ。しかし鈴木さんの家ではまだストーブも出していない。暖かい。人が集まると、なおさら暖かい。というか、暑い。
「そして、この家は釘くぎが甘く入っているだけなので分解が可能」
「日本民家も取り外し可能な木の釘を使ってますもんね」
　まさにこの家は、
「ブルーの民家」
　と呼べるかもしれない。
　鈴木さんの家は、家の部品だけだと少しゆらゆらしていて安定していない。完全に固定していないからだ。しかし、それにより無理な力がかからず、壊れにくくなっている。
　これは古来の工法の考え方と同じように捉とらえることができる。日本建築の工法では木材と木材の間に「遊び」があった。それにより、わずかだが建築物は揺れる。しかし、その揺れが、建築物に無理な力がかからないようにする工夫なのだ。
　鈴木さんの家も同じである。しかも、鈴木さんの家は家財道具を入れるとずっと安定し、鈴木さんとみっちゃんが入ると完全に安定するようになっている。これは非常に新しいやり方だと考えることができるだろう。
　こうした独自の工法は、試行錯誤の末に生み出されたものだ。
「自分の家も３軒作ったけど、人の家もたくさん作ったよ」
「そうなんですか！」

「材料は集めさせといて、集まったら一緒に作ってあげてたよ。その都度、いろんな方法を試すわけよ」
　なるほど。これも研究の一環なのである。
「月に１度、国土交通省がチェックに来るので一時撤去しなくちゃいけないから、移動しやすい家にする必要があるのね」
　壊しやすい家を作るってことである。
「うちは、それぞれの壁が分解できるんだけど、それじゃけっこう面倒くさいから、家を全く壊さないで、そのまま持ち上げられるようなものも作ったよ。二等分にするヤツなんかもね」
「１軒１軒違うわけですか」
「試すのが好きだからね」
　一時期は、鈴木さんの家の周りに十数軒も彼が作った家が並んでいたそうだ。

この家の興味深いところは他にもある。それは、水、ガス、電気、下水いずれの設備にも、何一つつながっていないということだ。水は公園から、ガスはカセットコンロ、電気はバッテリーから得ている。これらのインフラは、家とつながっているのが当たり前である、それがこれまでの常識であっただろう。

　しかし、それは便利ではあるが、災害が起きた時は、住宅が破損するだけではなく、二次災害までもが襲ってくる。

　また、いろんな設備を必要とするから住宅というものが巨大でガチガチなものになってしまっている。家は本来もっと修理しやすいものであるべきである。もっと簡単に作り替えたり、移動させたりできるものである。そういったものが、本来の意味での、

「家」

　ではないのか。鈴木さんの家には設備は一切ないが、

「どれだけ水を使うか、どれだけ電気が必要か」

　ということがすべて頭に入ったうえで生活をしている。このことは、これからの日本において非常に重要なことだと思うわけである。

「12ボルトで大体の電化製品は動くんだよ。実は」

　鈴木さんは０円生活の実践により、新しいエネルギーの考え方を見つけ出しているように見える。

家は壊してまた直す

　隅田川沿いの路上生活者の家は月に１度、一時撤去をしなくてはならない。鈴木さんたちの間では、

「刈り込み」

　と呼ばれていた。撤去するのは河川を管理している国交省。川沿いの土地は国有地なのである。

　１週間前になると、それぞれの家に一時撤去を知らせる紙が貼はられる。その１週間後には、隅田川沿いに住んでいる人全員が午前10時ごろから始まる点検までに、家を解体し、何もない状態にしておかないといけない。

　そして、国交省と清掃会社の人間が十数人で一斉に掃除をして回る。その時に撤去されていない家があったら、それはゴミと見なされ撤去されるということになっている。掃除が終わると、住人たちはすぐ、また同じ場所にきちんと０円ハウスを建て直していく。僕はこの一時撤去の時に鈴木さんの１日を追ってみた。

　一時撤去はかなりの重労働である。月に１度、大掃除と引っ越しをしているようなものである。これは50歳半ば以上の路上生活者にとっては、かなり大きな負担になっているようだ。実際に、この一時撤去がきついために、東京都が格安で貸してくれるアパートに移っていく人が増えた。そのため現在では隅田川沿いの０円ハウスは全盛期より大分減っている。鈴木さんの友人たちも、ほとんどがアパートに移っていってしまったらしく、現在は宴会場も姿を消してしまっている。

　この東京都が貸してくれるアパートだが、月３０００円で貸してくれるのだそうだ。期間は２年間。その間に仕事を見つけてどうにか路上生活を抜け出そう、という政策のようだが、仕事を見つけるのはなかなか難しいようだ。

　しかも、１度隅田川を出たら、もう２度とここには戻ってこられない決まりになっているようだ。これでは、ただ隅田川沿いから路上生活者を追い出したいだけのように見えてしまう。１回目の募集の時にアパートに移った人々は２００７年、期限の２年間を終えるそうだ。

仕事が得られなかった人たちは隅田川には戻れず、また路上へ移ることになってしまう。

　鈴木さんはこの政策には全く興味を示していない。むしろ、そうやってアパートに移っていく友人たちを見ながら、２年後はどうするつもりなのかと心配している。

　撤去は月に１度、いずれかの水曜日に行われる。しかし、何週目かは決まっていない。盆と正月には行われない年もあるそうだ。撤去が行われる日、隅田川沿いに住む人は家、家財道具一式を堤防の上の遊歩道まで移動させてなくてはいけない。撤去した後の午前中、隅田川沿いは０円ハウスが１軒も並んでいない状態になる。

　撤去の日の鈴木さんとみっちゃんの１日は午前３時に起きるところから始まる。午前３時を過ぎると、持っているクリアケースにすべての服、生活道具を入れていく。そして家の外に出していく。

　がらんどうになった家は鈴木さんの手によって次々と解体されていく。まずはビニールシートを外し、そして屋根に掛かっているすだれを外し、枠組みだけにする。家は４面の壁を釘で合わせているだけなので、その釘を完全に抜かずに途中まで外し、それぞれ壁のまま分解していく。こうすると、いちいち毎回新しい釘を使わなくても済む。これだけで解体は終了である。家の解体だけだと１時間もかからない。

　これらはロープを使って、遊歩道の上から引き上げる。この作業は、みっちゃんにはできないので、いつも鈴木さん１人の作業である。みっちゃんの荷物がほとんどなので、それをまとめるのがみっちゃんの主な仕事だ。鈴木さんは１人で、クリアケース、バッテリー、家の部品などをロープに縛って、どんどん引き上げていく。かなり重いはずだが、とにかくスピードが速い。この作業は１時間以上かかった。

　これで一時撤去が完了である。全部で３時間近くかかった。

鈴木さんとみっちゃんの全家財道具が並んでいる。クリアケース10個、発泡スチロールケース３個、食器ケース、洗剤類の入った買い物カゴ。バッテリー10個、バケツ４個、ポット、棚板、プラスティックの引き出し２セット、鍋類、カセットコンロ、耐火シート、ビニールシート、空き缶、パイプ椅い子す、サマーチェア２個、靴箱、そして家の部品。

最後に家が建っていたところを、何もなかったように綺麗に２人で掃除をする。そして熱いお茶をコンロで沸かし、国交省の人が来る午前10時までゆっくり待つ。が、寒いので大変だ。しかも、家財道具を盗られるかもしれないので、この場を容易に離れられない。

そうこうするうちにトラックに乗って国交省の人がやってきた。４人ぐらいの職員と５～６人の下請けの清掃員が来て、大急ぎで順番に掃除していく。清掃員と職員によるチェックが終わり次第、すぐに家を建て直していいことになっている。

国交省は独自に隅田川界かい隈わいの地図を作成していて、そこにはどの場所に誰がいるのかということが書かれているようだ。それで誰か新しく家を建てている人はいないか、いなくなった人はいないかをチェックしている。

鈴木さんは国交省の人とはもちろん顔見知りで、ちゃんと理解をしてもらっているそうだ。建前上は撤去しなくてはいけないので実行するが、なぜか「すみません」と国交省の人が言うんだよと鈴木さんは言っていた。国交省は、馴なれ合いを防ぐために何年かに１度、管轄する部署を替えているようだ。

撤去されていないものは不要品と判断されてしまうので、みんな絶対に月に１度やらなくてはいけないのだ。

それがやはり大変なようで、最近は隅田川の０円ハウスがかなり減ってきている。毎年減少しているようだ。いつもは元気な鈴木さんも、この日ばかりはグッタリだった。

国交省の人が去ると、鈴木さんとみっちゃんは急いで家の建て直しに取り掛かった。部品を下ろし、刺さったままの釘を打ち、どんどん

家を組み立てていく。そして枠ができたら、床を作っていく。上にすだれを載せて、ビニールシートを掛けたらもう出来上がりである。家はすぐに元通りになった。そして荷物を降ろして中に入れていく。解体より作り直す方が早いのだ。１時間かからずに家は建ち上がった。終わって焼酎で乾杯をする。

　国交省の撤去が始まってから、もう８年以上になるが、この家には材料を新しくした部分が一切ない。それなのに、今も壊れずに建っている。むしろ年月を経ることで、逆に木がなじんで強くなってきている。木は生き物である。時間を経るごとに木々同士がなじんでいくのである。見た目にもいい味を出してくる。

　しかも毎月１度撤去することが、家の清潔を保つことにもなっている。僕たちは年に１度大掃除をするだけである。家の解体まではしない。ここではすべての家が毎月毎月生まれ変わっているのである。常に鈴木さんは、自分が住んでいる家のそれぞれのパーツがどういう状態なのか見て確認することができるのである。それは自分の家を長く大事に使う上で重要なことである。

　また、家を壊してまた直してという作業が２時間弱で終わるというのも注目すべき点である。家はそれぐらいで作れるものでいいのではないか？

　僕たちは家というものについて、建てるのが困難である、時間がかかる、お金がかかる、修理なんて簡単にはできない、と思い続けている。だからこそ家というものと人間との間に距離ができてしまっている。

　しかし、鈴木さんにとって家は、非常に近いものとして存在している。大掃除の感覚で家を建て直しているのだから、修理・改築もお手の物なのである。自分は住んでいる家のことをすべて知っているのだと鈴木さんは言っていた。家はもっと分かりやすいものであるべきだと思う。

　自分の家を自分で作るという体験は、現代の生活においてそうできることではない。一生のうち、１度も体験しない人もいる。それは遠

い世界の話と思っている。

　しかし、なんでもいいので、簡単なものから自力で作ってみてはどうだろうか。そうした行動は、自分にはどれくらいの空間が必要なのか、どんな材料の家が好きなのか、を教えてくれるだろう。そして、誰も考えつかなかったアイデアを生み出すことができるのかもしれない。

第４章　建築しない建築

僕の建築原体験

　そもそも僕が建築に興味を持ち始めたのは、小学校４～５年のころだったと思う。その当時僕は、家の中に自分の「家」を作っていた。建築といっても、とにかく原始的なものだった。原始的なものだったけれども、僕にとってはレッキとした「建築」であった。その建築は、自分の勉強机を利用して作った。当時僕はそれを、
「テント」
　と呼んでいた。
　その通称「テント」の作り方は以下の通りである。
　図画工作の授業で使っていた画板の片方の端を自分の学習机に載せ、もう片方は椅い子すをずらしてその上に載せる。そうすると、屋根らしきものが出来上がるわけである。そして押し入れから毛布を引っ張り出してきて、その屋根の上にすっぽりとかぶせる。机の下にできた空間に布団を敷いたらテントの出来上がり。

テントが出来上がると、食事も家族とは別にテントの中で済ませる。もちろん寝る時もテントの中だ。楽しくやっているんだけれども、プチ反抗的。そんな微妙な作業でもあった。

しかし、机の下の空間はホコリが多く、喘ぜん息そくを患っていた僕は、テントした日には大抵、発作を起こして、両親に怒られていた。だからよく、

「テントしていい？」

と聞いても、

「駄目」

と言われることが多かった。

それでもこっちはテントに対する欲望を止められるわけがない。僕は怒られながらも、そして発作を起こしながらも、テントを作っては、その机の下にできた空間に積極的に引きこもっていた。

今考えると、それが自分にとっての鮮明な建築体験だったように思う。

僕は３人兄弟の長男で、典型的な３ＤＫのアパートに住んでいた。テレビがある居間的な部屋、両親のタンスや鏡台が置いてある部屋、そして子供部屋。６畳１間に子供３人分の机が並んでいた。子供部屋はカオスだった。

友人の家に行った時に、個室を持ってゆとりある生活をしている姿を見て、あこがれを抱いた。個人的な場所というものが僕の家にはあまりなかった。寝る時も、家では全員が集まって文字通り「川の字」になって寝ていた。僕はベッドにあこがれていた。積水ハウスの家に住んでいた友人をうらやましく思った。天井が高い部屋。ベッドがあって、望遠鏡があって、机は天板が開閉式で３段ぐらいの本棚が付いたもの。今考えると、住宅メーカーが打ち出していた「ザ・子供部屋」のコンセプトそのままなんですけどね。

それに比べ、自分の家の環境は何か違った。いろんな意味でオープンだった。どこも開かれていた。みんな平気で裸で動いていたし、トイレのドアまでも開かれていた。いや、そこを開いていたのは僕だけ

だったけど。
　また、川の字で寝ていたら電気を消しても話せるので、いつまでたっても議論は終わらない。ちょっと静かになってきたかなと思っても誰だれかが声を出す。そうすると、また議論が始まる。このスタイルはずっと後々まで続いた。今でも実家に戻った時は、たまにこの状態になることがある。僕にとっては、この時間は非常に貴重で、布団に入ってから寝るまでの時間がとにかく好きだった。
　つまり、家というプライベートな場所であるにもかかわらず、パブリックな性格が強かった。それでも家の中には変わりはないわけで、当然そのパブリックも家というプライベートに包まれているわけである。その両者が混じった不思議な空間の中で育ったことが、今考えると、現在自分が興味を持っていることの基礎になっているようにも思える。
　しかし、当時の僕はそのような家の中での生活を楽しみながらも、
「自分だけの場所」
　もやっぱり求めていた。結局それは、望遠鏡がある天井の高い部屋ではなくて、机に毛布を掛けて作った空間になったが……。今、この文章を書いている机の下を見てみると、そこはまさに竪たて穴あな式住居である。人間はそれぞれ、人類の歴史を繰り返すのかもしれない。本能が残っているのだろうか。まずは野ざらしで寝ていた人間は、次第に屋根のある洞どう窟くつのようなところに住み、竪穴式住居のようなものに変わっていく。自分の子供の時の経験を考えると、なるほどそのように進化していっているように見える。
　テントを作る前は、
「押し入れ」
　にも入っていた。ここは洞窟的な場所ですね。
　そうやって、普通の団地の家の中を見てみると、畳が草原に見えてくる。
　竪穴式住居も作ったので、人類の歴史に沿って、ちゃんとした家にも興味が出てきた。次にハマッたのが、新聞に折り込まれている新築

分譲マンションのチラシに落書きすることだった。落書きというか、妄想を綿密に描き込むわけである。
　マンションのチラシには、ご存じの通り、間取りが掲載されている。Ａタイプとかｂタイプとか何種類もある。もちろん、一番大きくて、日当たりもいいタイプを選ぶ。そして、洋間の８畳は僕がもらって、弟は和室の６畳で我慢してもらおうとか、独断と偏見によって、勝手にレイアウトして、ボールペンで机や棚などを描き込んだ。
　ベッドなんか僕の家にはなかったのだが、ここではもちろん描き込んだ。妄想ですからいいんです。毎回毎回描き込んでいくうちに、いつマンションが手に入ってもいいぐらいにイメージは固まっていった。
　ある日、それを見た両親から、
「そういうのが好きなら、建築家になればぁ」
　とポロッと言われた。小学校６年生のころだったと思う。その時まで建築家という言葉などもちろん全く知らず、両親もたぶんそこまで分かってなかったはずだ。「自分の部屋」を持つことが当時の目標であったので、それを作れる職業はそれはそれは素晴らしいだろうということで、将来の夢を、
「建築家になること」
　と完全に設定してしまった。小学校の卒業文集の中では、
「坂さか口ぐち恭きよう平へいなんでも設計事務所」
　の設立をもくろんでいる。
「肥ひ後ごの女神」
　や、
「３３４メートルの熊本タワー」
　の設計までも視野に入れている。東京タワーより高いらしい。
　そうやって訳分からずも本能的に建築の道を目指すようになっていった。

社宅とドブと海

熊本で生まれてすぐ、福岡県糟かす屋や郡の新しん宮ぐうという海の近くの町に引っ越した。親父おやじが勤めていたＮＴＴが作った巨大な社宅群の中に住んでいた。大きな公園が真ん中にあり、その周りに30棟ほどの社宅が並んでいて、まるで一つの都市みたいだった。そこから歩いて20分ほどで玄げん界かい灘なだまで行くことができ、社宅のすぐ隣は松が生えた砂丘になっていた。

この社宅と砂丘の間には鉄の柵さくがあって、砂丘には行けないようになっていた。しかし、不思議なもので、子供であった僕たちはアスファルトの上ではなく、無意識にその砂丘へと向かっていた。そこにはアリ地獄がいたのだ。

でも砂丘にいるのが見つかると、なぜかえらく怒られた。そして、砂丘とアスファルトの間にはドブが流れており、そこがなんとなく境界線になっていた。いつもそこでザリガニ釣りをしながら、誰も見ていない時を見計らって柵を乗り越え、砂丘の中に入り込んでいた。

子供たちは無意識に人工のものではなく、自然のもの、少し危険であり予測不能である世界に惹ひかれていったのだろう。とにかくドキドキしていたのだけは覚えている。なんだか危ないところへ、とにかく行ってみたいのである。

そして、それはある日、ドブを見ている時に、

「これって、海までつながっているんじゃ」

と友人の誰かが言ったのだろう、ドブに注目し始めた僕たちは、小さなドブの流れをずっと追いかけ始めた。途中からそれはかなり大きなドブへと変化していった。上にはコンクリートの蓋ふたが閉められていた。

「ここって開けられるかな？」

そのコンクリートの蓋に混ざって、たまに鉄の格子状の蓋もはめてあった。大きくて重そうだが、２人掛かりでなんとかいけそうだ。僕たちは開けてみた。

「暗い」

「ガガンボがいるよ」

「でもこれは本当に海につながってそうだな」
　後日、タカちゃんと僕は長靴と懐中電灯を持って再度挑戦してみることにした。
　普段はドブ沿いの砂利道を歩くのに、今回はその下を歩いている。ドブの中だ。水が張っている。虫が飛び交っている。コンクリートの下にこうした野生があることに興奮しながらタカちゃんと２人で海まで目指した。
　最終的に、そのドブは本当に海に出た。僕たちはお互いに信じられないといった顔をした。大人にとっては社宅から海へのただの道のりなんだろうけど、自分たちにとってはこれは冒険だったのだ。この事実は小学２年生を勇気づけた。僕は、ますますそういった世界にのめり込んだ。
　今やっていることも、それと似ているといえば似ている。コンクリートの下の水路のように、東京という大都市の中に潜んでいるものを常に求めている。それは都市が必然的に持っている裏の姿であり、僕が自然に求めてしまうものなのだ。
　その後、20歳を過ぎてそのドブに行ったことがあった。信じられないぐらい短い道のりだった。
　小学生時代に他ほかにのめり込んでいたものは、漫画とゲームだった。僕は漫画を読んだり、ゲームをやったりする方じゃない。僕が興味を持っていたのは、どちらも創作する方であった。漫画はほとんど持っていなかったし、ファミコンのゲームソフトもそれほど持っていたわけではなかった。しかし、それでも十分楽しめた。僕にとって、それらの漫画やファミコンゲームはいいお手本であり、最終目標はそれに類したものを自分で作ることだった。
　漫画は、当時人気絶頂だった「キン肉マン」にかなり似たものを鉛筆で描いていた。きちんとコマ割りもしてストーリーもあった。
　僕の周りに漫画コミュニティーがあったことは非常に大きかった。僕は当時小学２年生で、６年生のタカちゃんの兄ちゃんや３年生のコウちゃんといった先輩たちのモノマネをしながら描いていた。続けて

いくうちに漫画の量は多くなり、僕は単行本の出版をもくろむ。そこで、それまで描いてきた漫画をまとめてセロテープで製本した。題名は、当時読んでいた「少年ジャンプ」に引っ掛け、「飛ぶ前」なので「少年ホップステップ」にしてみた。上々の仕上がりであった。

ますます漫画は読まなくなった。読むより、描いて作る方が興奮したのである。漫画を描くという行為よりは、描いて単行本を作るという編集作業に興味を持っていたのかもしれない。ホッチキスで留めて完成した時のあの瞬間をもう１度体験するために必死で描いていた覚えがある。

３～４年生になったら「サンリオ」にハマッた。といっても、サンリオの商品を買い集めていたわけではない。サンリオという会社のやり方に興味を持ったのだ。漫画を描くだけでなく、漫画を下敷きや筆箱や便びん箋せんにして売る──そういうことをやりたくなったのだ。

それで、キリギリスと孫そん悟ご空くうという２人のキャラクターを生み出し、そのキャラクターの便箋セットや下敷きなどを作りだした。そしてこれは10円から50円ぐらいの間で販売もした。意外にも女性陣に人気を博し、クラス内には僕のサンリオまがいの商品が流通していた。

次第にこの、
「自分が好きなものの『構造』をヒントに、独自のものを作る」
という手法が確立し、小学校５年生になると一つのピークを迎える。

それは当時爆発的に人気があった、
「ドラゴンクエストシリーズ」
を原型にしたゲームであった。もちろん、これはファミコンのゲームである。で、僕は、ファミコンでゲームをやるのではなく、またもや、
「ファミコンの中」
が気になったのである。というか、
「ファミコンの中になりたかった」

のである。そこで、まず大学ノートを購入し、そこに地図を描き始めた。ロールプレイングゲームはまずは広大なマップが必要だ。その世界の中で物語が繰り広げられる。しかし僕の家はそんなに広大ではなかった。そこで大学ノートを使い、Ａ４の紙で世界を分割したのである。最終的に世界は１００枚くらいに分割された。大学ノートの中に収まっているのに、広げると広大な地図が出来上がるという事実に高揚した。

そして、その中に点在する街や洞窟や塔なども、それぞれ中に入った時の地図を描き込む。街の中のお店では、いろんな武具や薬を売っている。それも一つ一つデザインし、値段を決め、効果を考えた。街から出ると、今度は敵が出現する。その敵も１００種類ほどデザインし、体力なども設定した。

とにかくドラクエに存在するものをすべてアナログで表現し直したのだ。その転換は非常に創造的な作業であった。人間の中の内臓を全部外に出したみたいだった。

僕は、自分ではそのゲームで遊ばず、同じクラスの人たちに遊ばせた。僕は運営担当だ。つまりファミコン自体になっていた。このゲームは人気を博した。途中でやめられず、最終的にアオキ君の家の前にテントを張って、徹夜でやったりしたものだ。

このスタイルは、おそらく17~18年を経た今でも変わっていないように思える。

これらのことも、今考えると建築家になりたいという気持ちと一緒だったのではないか。建築家になりたいと考えながら、その横で漫画の単行本を作ったり、サンリオまがいの商品を作ったり、手作りファミコンゲームを制作したりする。なんとなく、今現在自分がやっていることに直結していそうな気がする。

それでも、漫画家になるとも、サンリオのデザイナーになるとも、ゲームデザイナーになるとも言ってなかった。なりたいのは建築家だったのだ。

しかし、建築家になるといっても周りにそんな人はいなかったし、

そんな大人も知らなかったので、なると言っているだけで、どういうことをしたらいいのかは、もちろん分からずにいた。それでも、中学生になっても高校生になっても、頭の中には建築のことが常にあったように記憶している。

中学生になったら今度はギターを見つけてくる。その時に一番興味を持ったのは、自分が弾いたギターの音をラジカセで録音することだ。なんというかギターそのものを好きになるとか、技術を高めようとか、そういうふうにならない。それよりも録音なのである。自分で作った音楽が普通のラジカセから流れてくることが重要だったわけだ。

ギターをテープに録音すると、生でギターを弾いて聞こえてくる音とは明らかに違う。それが不思議だった。でもそれは、ファミコンゲームをアナログ転換するのと同じにおいがする遊びだった。ファミコンと手作りファミコン、生ギターの音と録音された音。それぞれの間にはなんらかの空間がある。

そして、その空間こそ僕が興味を示していたものだ。僕はそれを勘でしか理解できないが。それは本質的に断定することができないものだ。そのあやふやなものが空間だからである。科学的に解析できるものとは違うものである。

「テント」みたいな建築はないか──石いし山やま修おさ武む「幻げん庵あん」

高校に入ったら、次は大学受験というわけで、ここでようやく「建築」の２文字が登場してくる。僕の進路志望は、高校に入った当初から建築学科一本だった。しかし、特に入りたい大学が具体的にあるわけではないのでフワフワしていた。色々調べようと思い、図書館や本屋で建築関連の本を読むようになっていく。

そして、友人の兄ちゃんからもらった１冊の建築の写真集に衝撃を受け、その模写を続けた。その時はイマイチ分かっていなかったが、その本はフランク・ロイド・ライトという建築家の作品集だった。そ

の本に載っている海外の昔の建築は、小学校の時からなりたいと思っていた職業に、もう１度違う視点でなりたいと思わせた。
　では、日本の建築はどうか。
　そう思った僕は、次に色々と日本の建築家のことも調べだした。しかし、今度はなかなか面白い人がいない。いきなり、
「固そうな世界だな」
　と思いだした。図版を見ても、こっちに飛び込んでこないのだ。僕が抱いていた自由な建築というイメージではなく、建物が建っているだけのような気がした。もっとむき出しの「テント」みたいな建築はないものか。
　ある日、１枚の写真が目に入ってきた。
　なにか、それまで見てきた形とは全く違っていた。まず、まん丸い。いや、まん丸くなくて、丸いんだけど形が変だ。で、窓も変だ。ステンドグラスだろうか、窓は色鮮やかだ。人の顔みたいな表情をしている。しかも笑ってそうだ。とにかく見たことがない、こんな建築。
　それは「幻庵」という建築であった。名前にもしびれた。ただの建物じゃないと直観した。形も名前も建っている姿も、全部が混じり合って、それが一つになってゴロンと転がっていた。瞬間的に、
「これは、テントだな」
　と思った。名前を見ると、
「石山修武　早稲田大学理工学部建築学科教授」
　と書いてある。僕はすぐさま志望校を決めた。

しかし、問題が一つあった。志望校を決めたはいいが、早稲田の建築学科は当然のごとく非常に高い学力が必要らしく、僕は太た刀ち打うちできなかった。模擬試験などを受けても、
「合格率20％」
いけばいい方で、ちょっとこれは無理かなと思い始めていた。そもそも、こっちは早稲田大学に受かりたいわけではなく、石山先生に会ってみたいと思っていただけだった。
目的がはっきりしすぎていたので、志望大学のレベルを落とすとか、そういうことにはならない。ピンポイントだったのだ。石山先生のいる大学以外に行きたいと思うところはなかった。建築雑誌を見る限りは、他は違っていたのだ。やばい。どうしよう。
しかし、奇跡は起きた。僕の３年生の時の担任、キヨジがある時こう言った。
「お前、早稲田志望だったよな」
「はい。無理っぽいですけど」
「それが、だ」
「はー」
「推薦枠があることが分かった」
「でも、僕じゃ無理でしょ」
「分からんぞ。応募するだけ応募してみろ」
で、応募してみたのだ。無理だとは思ったが。
しかし、しかしである。なんと、応募者がほとんどいなかった。みんな国立の大学に行きたかったのだろうか。よく分からなかったが、応募者は僕も合わせて２人だけだった。そして、僅きん差さで僕が推薦を取ってしまった。キヨジはなぜか悔しい顔をしていた。
僕はただただびっくりした。本当に運がよかった。試験も何も受けずに、９月か10月ごろには決定してしまったのである。

こんな建築が見たかった━吉よし阪ざか隆たか正まさ自邸
僕は会いたい人を見つけることの方が、行きたい大学を見つけるこ

となどより数倍力があることを知った。形はどうでもいいのだと。直観や本能、皮膚感覚に従うことが偶然を呼び起こすんだと。

しかし、僕はこの時すでに、いわゆる建築という定型化している世界からズレてしまったのかもしれないと、今になってそう考える。この時から、今現在の僕が追究している方向を向いていたのかもしれない。

大学に早めに合格し暇を持て余していたある日、１冊の本が送られてきた。それは、

『吉阪隆正の方法』（齊さい藤とう祐ゆう子こ著　住まいの図書館出版局　１９９４）

という本だった。母の友人の親友がこの本の著者であるらしく、しかも建築家なので、参考になるのではと送ってくれたようであった。この「吉阪隆正」という人物は建築家であるらしかった。そして、早稲田大学教授でもあり、著者はその最後の研究生であったらしい。

その本には、その吉阪隆正氏の作った建築と彼の人生が描かれていた。その中の一節を見て、驚いた。

一九四七年、焼け跡に六坪のバラックを建て、百ひやく人にん町ちようでの生活が再開された。材木屋から少しずつ木を買ってきてテラスをつくり、三つの書棚に直接屋根をかけただけの書斎は六角堂と呼ばれた。一九四八年、次男正光誕生。その後、困っていた友人達の何人かが似たような家を百人町の敷地内につくって住んだ。「大地は万人のものだ。私は一人占めする権利はない。今の法律がよくない。その信念を実行してきたまでのことだ。これを理解してくれた人々は、私の考えに協力してくれた。それはアフリカのキクユ族の土地占有のあり様に似ている。必要な間だけ使う。使われなくなったら誰でもそこを使えるという方式」

建築家がこのようなことを書いていることに興奮し、一気に本を読

み終えた。
　また、彼は後に新宿区百人町にきちんと自邸を作っている。「きちんと」とは言っても、この人の作り方はすごかった。まず、コンクリートの柱と床だけ三階建て分を作る。壁は、まだだ。そして、お金ができ次第、壁や内装を少しずつ仕上げていくという荒業をやっていた。
　僕はもう嬉うれしくなっていた。そうそう、僕が求めているものはこれなんだ。自分が追い求めている「道」のようなものに触れているものと出会った。これは間違いがない、と１人で毎日興奮していた。
　いつかこういう建築というか、巣というか、なんだか分からんが「空間」を作るんだと言い続けていた。
　吉阪隆正氏は登山家でもあり、山小屋などもたくさん設計しているようだった。彼の研究室は、大学を飛び出して、彼の自宅の前にブロックを積み上げて作られていた。「Ｕ研究室」という名前だ。「来る者は拒まず、去る者は追わず」のスタイルだったようで、他の大学の学生など誰でも来ることができたようだ。会議でも、誰もが同じく発言権が与えられていたようだ。そうした魑ち魅み魍もう魎りよう・カオス状態を作り出そうとする彼の思想は、僕をどんどん盛り上げていった。
「上京したら即そこに行くぞ」
　と思っていたが、自邸は大分前に壊されたらしい。しかし僕は「建築」の世界に、非常に魅了されていった（まぁ、かなり限定された、偏った世界であったかもしれないが）。上京するのが楽しみだった。とんでもない興奮の未来が待っていると思っていた。
　吉阪隆正氏はフランスに留学した経験があった。その時に留学した先は、
「ル・コルビジェ」
　という変な名前の建築家のところだった。そこで勉強して、彼は建築の設計に目覚めたらしい。一体どんな人なんだろうと、僕はまた図書館でコルビジェの資料を探した。なんだか旅をしているみたいだっ

た。ある人に出会って、その人が影響を受けた人をまた探し出すという作業は。
　そして見つけた写真集を見て僕はまたぶったまげた。そこに載っていた建築は、僕が一番見たいと思っていたものであった。原始的で、ユーモアがあって、不規則で、しかもそれが実際に建っていた。落書きじゃない。現実に存在していた。フランク・ロイド・ライト、幻庵、吉阪隆正自邸に続く、僕にとっては連続性のある空間ショックだった。といっても、見たこともないものを見た興奮というよりは、見たいと思っていたものが現実にあったということの喜びだったのだ。そこには、
「ロンシャンの教会」
　と書いてあった。その写真を僕はまた模写した。何かを追究してみたいと思っている感覚が自分にあることを、この時ぐらいからかなり自覚して認識できるようになっていた。全部がつながってきていた。
　そして１９９７年に早稲田大学理工学部建築学科に入学する。

常識外れの工務店

　大学には無事入学したが、なんだか様子がおかしい。大学の課題は、図面を描いて、模型を作ってというやり方だったが、「テント」出身の僕としてはなんか違うなぁと思っていた。でも課題自体は嫌いじゃなかったので、どうにかその枠内で何か面白いことができないかなぁと考えていた。
　記憶に残っているのは、大学１年生の時のことである。これは、何かを設計しろという課題ではなくて、
「自分の今まで住んできた家について説明をしろ」
　というものだった。それで、自分の家を振り返ってみたものの、川の字で寝ている姿しか思い出せない。２回ほど家は替わったのだが、どれも親父の会社の社宅のようなもので、間取りも同じ。仕方がないので、そのままを説明した。でも10枚以上書かなくてはいけなかったので、ページ数稼ぎのためにとにかく細かく書いた。

布団を敷いて川の字になって寝ていたので、昼間の部屋の図と夜の図は違うわけである。どういうふうに布団を敷いていたか、どういう順番で寝ていたか、僕が「テント」をした時はどうだったか、スネていじけていた時はどうだったかなど、細かく書いてみた。親父と母がケンカした時の子供たちのフォーメーション、母が親父に投げたおにぎりのコースなど、とにかく書いた。今思えば、かなり「考現学」的なことをやっていた。その時は仕方なくやったのだけれど。

自分で提出物を読んでみて、家の間取りとかは全く描いてないけど、こういう書き方は面白いかもなぁと思った。それは意外にもきちんと評価してもらえた。

「えっ、ウソ」

と思ったが、

「これからはこういう考えが重要になってくるかもしれない……うんぬん……」

具体的には覚えてないが、そういった言葉をもらい、積水ハウスじゃなかった自分の家に感謝した。

そして、これをきっかけに僕は、「依頼されたものの設計をする建築家」ではなくて、何か他にできるかもしれないと、相当漠然とではあるが、思うようになっていった。

大学時代、夏休みなどの長期の休みになると、僕は実家がある熊本に帰省して、あるところによく行っていた。それは、「サンワ」という名前の工務店だった。熊本市の中心部にはたくさんの個性的なレストランや喫茶店などがあり、僕は高校時代から非常に大きな影響を受けていた。そして、調べると、そのどれもがサンワ工務店が作ったものだったのだ。

僕はその中の一つのお店の人と仲良くなり、その工務店を紹介してもらった。

教えてもらった場所へ到着すると、なぜかそこには米軍用機が駐機されていた。度肝を抜かれた僕は、恐る恐る工務店の入口のドアを叩

たたいた。
　出てきたのは、坊主頭のオジさん。しかも、パイロットみたいなオレンジ色のツナギを着ている。なんじゃこりゃ。
「あのー、仕事を手伝ってみたいんですけど……」
「ほー」
「無賃でもいいので、体験させて下さい」
「いいよ」
　あっけなく、了承してもらった。そして、そのパイロット姿の社長が色々部屋の中や倉庫を案内してくれた。
「まず、ここが会議室」
「はー」
　なんだか、おもちゃがずらりと並んでいる。ブリキ製品やＧＩジョーなどが所狭しと飾ってある。何を会議するんだろう。
「こっちが、倉庫」
「すごっ」
　中国製のような古い電気の傘や、陶器の便器。日本の昔の建具や、古いステンドグラスなど。さらにはそれに混ざって、ゴミだかなんだか訳の分からないものも目いっぱい詰め込まれている。ベスパの古い型のバイクなどもある。
「おいおい、こっちに来てみろ」
　それで連れていかれたところは、駐車場だった。１台の戦車のような車が停とまっている。
「これは、ベンツだよ」
「はい？」
　なんと、軍用のベンツのような乗り物だった。動くらしい。なんだか大変なところへ来たみたいだ。しかし、僕はビビりながらも興奮していた。そうそう、こういうところで勉強したかったんだ。秘密基地を見つけたような気分になっていた。
　社長は山やま野の潤じゆんーいちさんという方で、熊本市ではとても有名な建築家だった。古い蔵などを移築して再生したり、ゴミのよ

うなものを家の部品として転用したりしながら、自分で建築物を作ることもできるという、僕が想像していたような建築をやっている人だった。この人に会ったことは、その後の人生に確実に大きな影響を与えている。

そこでやっていたことはどれも僕には信じられないくらいの驚きを与え、さらにそれは、自分が目指していた世界でもあった。社長は自由な発想で、どんどんクリエイティブなアイデアを出し、商店建築を作るということだけにとどまらずに、その店のレシピや、メニュー表、コースターなど、お店のすべてを総合的に作っていた。

そして、釘くぎを１本も使わない昔ながらの技術を持っている大工さんたちを動かしていた。商店だからといって表面的にだけ作るのではなく、現在の住宅よりむしろ本格的に建築物を作っていたのだ。電器屋さんも、鍛か冶じ屋さんも、昔から遊びながら一緒にやっているメンバーが集まっていて、それぞれ昔ながらの古いやり方を現代にきちんと生き返らせていた。

僕は、掃除や荷物運びだけだったが、同じ現場を体験して毎日興奮していた。そこは非常にクリエイティブな場所だった。ただの建設現場とは訳が違った。その後東京の路上生活者の家と出会った時と同じ興奮を、僕はこの時に味わった。

そして、この工務店の仕事はほとんど、新築を建てるのではなく、元々ある建築を再構成することが中心だった。そこにも非常に共感した。すでにそこに建っているものを創造的な建築へとうまく再生させるにはどうしたらいいか。

その夏、19歳の訳の分からないエネルギーが飛び出してしまった。僕は１９６９年製のスズキの原付自転車をスクラップ工場から１万円ほどで手に入れて修理をして、熊本から東京まで１５００キロメートルを走破した。

その時も、そのオヤジたちはそんな僕の狂ったひらめきを、

「いいね、いいね。やっちゃえ」

と、全くバカにしなかった。ハーレーオジさんはバイクの修理をしてくれ、鍛冶屋のズベさんはアールヌーボー風のハート形のさびた荷台をタダで作ってくれた。社長は、バイク用より安全（？）だろうと、軍用機用の無線付きヘルメットを貸してくれた。コールマンのカセットコンロも貸してくれたのであった。僕は10日後、無事完走した。

サンワ工務店の社長は、

「自分の感性で、空間を作る。常識なんてない」

ということを直接体験させてくれたのだった。

建物をもうこれ以上建てるな

そうやって、とにかく大きな建築物などを作ることに全く興味をなくしていたのだが、学校の課題は大きな建築物を作るものばかり。自分のやろうと思っている建築家としての仕事とは大いに違うなと、ずっと考えていたわけだ。なんかできないかなぁと。

図面を描く気にもなれず、模型を作る気にもなれず、でもバリバリの設計コースにいた。自分としては、バリバリの設計コースで、設計しないということに意味があった。でもそんなこと、他の人にしてみたら「？」なわけで、ずっと大変だった。

矛盾がいつまでたっても解決されない。こんなにたくさんビルが建っている現在、なんでまた新しく何かを作らなくちゃいけないのか、全く分からなかった。でも、それを他の人に吠ほえていたら、

「そんなこと言ってちゃ、建築家になれないよ」

と言われた。自分でも無茶苦茶だなと思っていた。何か起死回生の一発を求めていた。

ある日、「都市の再生」という課題が出た。

それは、これまでの課題のように、更地に新築の建築物を作るのではなく、既存の場所を選んで、それを改築、または増築していくというものだった。

「これはいい」

と思った。とにかく初めてやりたいと思った課題だった。
「作らない建築」
　ができると思ったのだ。僕は、渋しぶ谷や区にほったらかしにされていた公団住宅に目をつけた。そして、そのがらんとした建物と周りの庭を見ていたら、ふとあるものが目に入ってきた。それは、
「貯水タンク」
　だ。廃はい嘘きよになる前は住人の飲み水を送り出していた重要な貯水タンクが、廃墟となったために水を抜かれ、ただのオブジェが転がっているように見える。オブジェとして見ると、不思議といい形をしている。その瞬間、僕はそれを改築した設計をするのではなくて、
「ただそこに住む」
　というパフォーマンスに路線を変更した。だんだんと建築学科の学生の課題からは遠く離れていった。
　寝袋と食料と水を持って、さらにレンタルショップで発電機まで借りてきて、僕は屋上の貯水タンクに向かった。ちゃんとビデオカメラも持っていった。そしてそこで生活を始めてみた。自分でビデオも撮りながら……。
　そこの住み心地は最悪で、結局は１週間も住めなかった。惨敗であった。しかし、何日間かではあるが、東京のド真ん中のエアポケットにいたという体験は本当に貴重だったと思う。頭の中では色々なアイデアがムクムクと生まれ始めていた。
　撮影したビデオは、編集機材もないので自宅のビデオデッキによってかなり粗く編集され、
「貯水タンクに棲すむ」
　という少々時代錯誤な、無駄な興奮がちりばめられたビデオ作品となった。それでも初めて「作品」を作ったという感動があったのを覚えている。僕は自信満々にそれを課題として提出した。
　しかし、これはやはり建築学科の課題なので、周りを見ると、模型と図面が並んでいた。僕が提出したのは、ビデオカセットと、「建物をもうこれ以上建てるな」というマニフェストが書かれた紙切れ10枚

をホッチキスで留めたもの。そして、自分が住んだ貯水タンクそのままを図面化したもの。ちょっとありえない提出物だった。あとは、奇跡が起こるのを祈った。

　そして、発表の日。「貯水タンクに棲む」はなんと高得点を出し、自分の意見を発表できるチャンスを与えられた。僕は、視聴覚室からビデオデッキとテレビを借り、模型と図面が並ぶ他の作品群に混じって、ビデオ作品を発表した。そこで、

「お前は、バカだから、こういうことをずっとやっていけ。そしたら本物になるかもしれない。でも駄目になるかもしれないけど……」

　と言われた。で、これを完全に肯定的にとって、とにかくマイウェイを突き進むことに自信をつけてしまったのだ。

第 5 章　路上の家の調査

多摩川の家と畑と猫

　そんなこんなで卒業の年までどうにか粘っていた。卒業ということは、卒業論文である。文章が苦手な僕は全く書けないでいた。でも、なんか面白いことやりたいな、という気持ちは残っている。でもテーマが見つからない。真剣に取り組むものが見つからないでいる。

　そんなことを考えていたころのことである。当時、僕は東京を流れる多摩川に休日はよく遊びに行っていた。そこで、友人と原始人生活らしきものを送っていた。河原に小屋みたいなものを作り、そこで焚たき火をして、そのころフクロタケを小こ金がね井いで栽培していた友人がフクロタケ鍋なべを作ったり、モロッコ帰りの友人がモロカンカレーを作ったり、裸で河原を走ったり、竹をもらってきて筏いかだを作って川下りをしたりしていた。今考えると、何やっていたのかと笑えてくるが、当時は真剣にやっていたのである。それで、多摩川沿いにいることが多かった。

　ある日、いつものように多摩川沿いを歩いていると竹やぶが見つかった。よく見ると、竹やぶには入口みたいなものがあるではないか。なんだろうと思って近づいて見てみると、門みたいになっている。中を覗のぞくと竹垣ができていて、通路は奥につながっている。竹垣は、生えている竹をそれぞれ腰の高さぐらいで切って、ひもで縛られているのである。ニワカ原始人だった僕と友人は、本物の原始人がいるのではないかと思い、ビビりながらもその竹垣の続く通路を進んで、竹やぶの中に入っていった。

　すると、１軒の家と畑と猫が現れた。

　４畳半ほどの大きさの平屋の家は、木だけでなく、ビニールシートやアルミニウムなどいろんな材料で作られていた。でも見た目は山奥

の民家風のたたずまい。家の前には、６畳ぐらいの大きさの、しっかりとした畑が耕されていて、実際に野菜が育っていた。そして、庭には猫が数匹いた。
「すみませーん」
　声をかけると、50代ぐらいのオジさんが出てきた。
「なんだい」
　怒るかと思ったら、案外気さくでびっくりした。
「ココに暮らしているんですか」
「見た通りだよ」
「全部自分で作ったんですか？」
「そうだよ」
「野菜も育てて……？」
「そうだよ」
　なんだか普通なのである。普通の山奥の１シーンみたいである。
「どうやって暮らしているんですか？　稼ぎは？」
「大体は鉄てつ屑くずを拾って、それを売っている。で、春はタケノコが売れるんだ」
「タケノコ？」
「そうだよ。ここは竹やぶでしょ。ファンがいるから、毎年毎年きちんと売れるよ」
「ファンがいるんですか？」
「いるとも。近所の主婦たちだよ」
「その人たちは、オジさんがココにいるのを知っているんですか？」
「知ってるよ。もう20年以上もいるからねぇ」
「はぁ？」
　あまりにも普通に出てきた言葉に驚いてしまった。彼は20年もココにいるわけである。そして、近所の人たちとも、ある程度関係を作っている。なんだこれ。
　ホームレスという存在は認識しているつもりだった。
　しかし、それまでほとんど興味を持ったことはなかった。正直、仕

事をしていない人だとか、社会から脱落してしまった人だとか、それぐらいの認識しかなかった。で、はじめはこのオジさんも、いわゆるホームレスの人だと思っていたのだ。
　でも、これはどう考えても違うような気がしてきた。20年もココに暮らしている。小さいけれども立派な一軒家がある。生活もできている。なんだか訳が分からなくなった。
　むしろこれは自分が気になっていた分野のものではないか？　これは実は自分がやりたかったことに非常に近いのではないか？　次第にそう思うようになっていった。
　東京のド真ん中で、都市に溢あふれているものを転用、再利用することによって、自分の力で作られた家。しかし、彼らはホームレスと言われている。
　なんだかこの訳の分からない矛盾のようなものが、いわゆる建築家という職業と自分がイメージしている建築家というものの間のモヤモヤに似ていると感じた。直観がひらめき、行動を起こす時がまた来たのを感じ取った。

ゴミが転用されて一つの家に

　そこからは早かった。僕はまずは、多摩川を調べることにした。どこから調べればいいか分からなかったので、多摩川を全部見てみることにした。寝袋を持って、バスで多摩川の河口まで行った。全部だから、源流まで行ってやろう。目的は川沿いに住む人たちの調査なのであるが、なぜか多摩川全域徒歩制覇というもう一つの目的まで発生していた。
　こんな河口に路上生活者の家があるのかなぁと思っていたら、本当に家がポツンポツンと建っていた。周りは工場だらけだった。味の素の工場なんて、すごいにおいを発していながらも何食わぬ顔でモクモクと煙を上げていた。変なにおいのする工場群、若者たちがスプレーで書き散らしたグラフィティー、ぼーっと釣りをする中年男性たち、そして小さな家々……。都市の岬にはいろんなものが静かにうごめい

ていた。良くも悪くも生命力が溢れていた。
　１軒１軒とにかく体当たりでドアを叩たたいてみることにした。少々恐怖感もあるにはあったのだが、それよりも興味の方が勝っていた。
　外から見たら、ただのブルーシートハウスにしか見えない。しかも小さい。で、ドアをトントンすると、明るい声が。
「はーい」
「私、建築を勉強している学生なんですけど……」
　なんて言ったらいいか分からず、こう言ってみた。
「学生がこんなところ来て、どうしたの？」
　出てきたオジさんは、とても優しい。僕は、この間の多摩川で会ったオジさんのことを話して、それで多摩川全域の家を調べていると説明した。すると、
「あんた、面白いね。中に入ったら？」
　と、簡単に家にお邪魔できることに。家の中が明るい。
「ええっ？　電気つくんですか？」
「うん、そうだよ」
「どうやるんですか？」
「これだよ、これ」
　オジさんは、玄関に置いてあったバッテリーを指差した。
「これって、自動車用のバッテリーですか？」
「そうだよ。これを自動車整備屋に持っていって、充電してもらう」
「はぁ？」
「そことはもう付き合い長いから、いつでも行ったらタダで充電してくれるんだよ。で、それをバイク用のライトにつなげているというわけ。12ボルトね」
　12ボルトと言われても、その時はピンと来なかった。要は、家庭用の１００ボルトじゃなくて、自動車用の12ボルトのバッテリーを使って、12ボルト用の製品だけを使っているようだ。いきなり１軒目から電気がある家で、僕はびっくりたまげると同時に希望を持ってしまっ

た。
　電球には、バーベキューの時に使うような銀紙のお皿を電灯の笠代わりにかぶせていて、反射してよく光っている。バッテリーでラジカセも使っているそうだ。そのラジカセには小さなテレビまでくっついていた。
「仕事は何をやっているんですか？」
「捨ててある電化製品を売ってるよ」
　どうりでテレビ付きのラジカセなどを持っているはずである。
　もう一つ気になったのは、キッチンの充実度である。カセットコンロがあり、その周りにベニヤで壁が作られていて、もう完全にキッチンなんである。壁にはフックが付いていて、フライパン、お玉、フライ返し、まな板、皮むき器、魚焼き器までが掛けられている、調味料も勢せい揃ぞろいだ。
「なんかキッチン、すごいですね」
「あっ、そうそう、板前やってたからね」
　なるほど。キッチンには自分で描いたアジの干物のスケッチまで貼はってある。
「周りのみんなにもよく作ってあげるよ」
　ここは周辺住民にとっての台所的存在でもあるわけだ。床には綺き麗れいにゴザが敷いてあり、座布団もたくさん用意されている。よく来客があるんだろう。本当に清潔な室内。壁には、大きな窓も付いている。
「窓、すごいですね」
「これ、本物の窓だよ」
「あっ、ホントだ。これ、アルミサッシじゃないですか」
「もちろん。網戸も付いてるよ」
「！」
「カーテンレールも」
　東京に散らばっているゴミが転用されて、一つの家になっている。これは、一体どういうことなのか。混乱しながらも、これらの家が自

由であるということだけは分かった。そして、僕がやりたいと思っていた建築はこっちなんだけど、そこに歴然とある境界線は、一体なんなのだろう。

　１軒目からこの調子だった。そこに住む49歳の住人は、

「とにかく今の生活にとても満足をしている」

　と僕に言った。僕はそうであってほしいなと思ってこの調査を始めたが、本当にそうだと聞いたらやっぱり驚いてしまった。本当なんだ。こっちは乗ってきた。とにかく日が暮れるまで歩き続け、家を訪ね、話し続けた。

近所の主婦と物々交換!?

　初日の最後の家は２軒つながっていた。友人同士で暮らしていた。ホンマちゃんとクボちゃん。２軒の家の間には、

「集会場」

　があり、僕はそこに通された。大きな机があり、椅い子すが四つ並んでいる。工事用の単管パイプで組まれた部屋で、テレビまである。14インチの普通のテレビだ。

「これどうやって使うんですか？」

「発電機」

　発電機を持っているのである。そして、ガソリンを買ってきて使っているようだ。みんなそれぞれ工夫して電化製品を使っている。スゲー。

「お酒飲む？」

「いいんですか？　頂きます」

　出てきたお酒は、焼しよう酎ちゆう、ワイン、そしてあんず酒も。

「お酒も豊富ですね」

「そうだよ。あんず酒はクボちゃんが自分で作っているんだよ」

　恥ずかしがり屋っぽいクボちゃんが笑う。彼は昔、蟹かに工こう船せんに乗っていたそうだ。

　乾杯。

「ホンマちゃんは？」
「オレは社長だったんだよ。ベンツ持ってたもん」
　話をしていると、どうも本当のようだ。
「でも、今の方が断然面白い」
　そうなんですか？　それは素晴らしい。
　集会場の横には畑がある。
「ここで、何か作れるんですか」
「もちろん、トマトにナスにキュウリに……」
　自給自足もしている。初日からホントすごいな。
「うちの野菜は無農薬でおいしいから、ファンがいるのよ。今日もたぶん来るよ」
　と、その後も色々話していると、ごそごそと外から音が聞こえてきて、
「ホンマさーん」
　と呼ぶ声が。
「あー、はいはい。どうぞー」
　なんと中に入ってきたのは、普通のオバちゃんだった。手には魚の煮物を持っている。
「トマトちょーだい」
　目の前で、この現代の東京で、物々交換が行われている。なんかまた訳分からなくなってきた。でも、不思議と喜びがこみ上げてきた。
「じゃーねー」
　普通に去っていくオバちゃん。あんたは素晴らしい。オバちゃんは近所に住んでいる主婦で、よく何か持ってきてくれて、野菜と交換するのだそうだ。
「こういう関係がいいのよ」
　ホンマちゃんは僕にさらっと言った。僕も、そういう関係が一番いいなと思った。
「兄ちゃん、ご飯食べたの？」
「いや、まだです」

「今から飯食べるんだけど、いるかい？」
「頂きます」
　ご飯まで食べさせてもらうとは思わなかった。その日に並んだのは、

●手作りおでん

●近所の主婦がさっき持ってきてくれた魚の煮物

●サンマの刺身

　だった。全部無茶苦茶うまかった。僕も嬉うれしくなって興奮してしまい、飲み続け食べ続けた。ホンマちゃんとクボちゃんは僕を気に入ってくれたようだ。宴会は深夜まで続いた。
「じゃ、ありがとうございました。そろそろ行きます」
「駄目だよ。今日は泊まっていきなよ」
「はい？」
　いやいや、ここは親しん戚せきの伯父さんの家ではない。
「オレの部屋に泊まっていけよ。うちにはベッドもあるよ」
　集会場から隣のホンマちゃんの部屋に移動してみた。かなり綺麗な部屋である。本当にベッドまである。じゅうたんが敷いてある。暖かい。ホンマちゃんはベッドの下に布団を敷いて、
「ここには自分が寝るからお前はベッドに寝なさい」
　と言ってくれたので、もうここは、郷ごうに入いっては郷に従え、
「それでは今日はお世話になります」
　と布団にくるまった。
　２人で横になりながらも、話は止まらなかった。
　ホンマちゃんはこの状態で生活しながらも自分の息子とは会っているんだと言った。こういう生活をしていることを息子も知っているの

だと言う。複雑な思いが絡まっていたが、ホンマちゃんは自分の今の生活にも自信を持っていた。世間からはなんと言われるか知らんが、息子とも会ってるし、近所にはあんなオバちゃんもいるし、クボちゃんがいるしなと言っていたのが印象的だった。

どこか遠い国に来ているかのような錯覚に陥ったまま、東京のド真ん中で眠ったのでありました。

で、朝起きると、チチチチッと小鳥が鳴き、朝日が全開で多摩川の川かわ面もにぶつかっている。どこかのジャングルの中にどんどん入っているような感覚のまま、ホンマちゃんとクボちゃんの家を出て、またそのまま川沿いを歩いていった。

天然素材とは？

六ろく郷ごう橋ばしと呼ばれる橋の下に１軒の家が建っていた。その家はそれまで見てきた路上生活者の家とは違っていた。それはとても奇妙な構造をしていた。普通であれば、家の中にあるべき家具などが表に出てきている。時計なども外に付いている。椅子も外に出ている。よく見ると、玄関には木の板が敷き詰められていて、まるでフローリングのようにも見える。リビングルームがそのまま外に出てきているようだ。

まるで六郷橋自体がこの家の「屋根」のようだ。もちろん、橋の下なので雨にもぬれない。本当に橋を「屋根」として捉とらえて空間を作っている。他ほかの人にとってはそこは外の空間で、居住空間には全く見えないが、ここの住人は橋の下の空間すべてをリビングルームと捉えているわけである。都市自体を自分の空間と捉える。なんとも気分がいいではないか。もう壁はいらないのかもしれない。

建築物としての路上生活者の家を調べていきながら、建築物という枠組みだけに収まらない、人間と空間、環境全体とのかかわりといった問題も、頭の中にはだんだんと浮かんできた。で、路上の家の方が人間にとって自然なやり方なのではないかと思ってもいるのだ。

川崎駅の近くで見かけた家では、ミッキーマウスとクマの置物のコ

レクションが壁に陳列してあった。びっくりして見に行ったのだが、入口には本物の朝顔のつるで作られた壁があり、イチョウの木で柵さくまで作ってある。なんと大型犬用の犬小屋のプラスティックの玄関が転用されている。家の壁には木目が見えるので、いい木を使っているかと思ったら、木目調のフローリング用ビニールシートが貼られている。

　中を覗くと重厚なじゅうたんが敷かれていて、革張りのソファがポツンと置かれている。まるで応接間なのだ。極めつきには天皇皇后両陛下の写真まで飾っている。

　ゴミのようなものと、自然のもの、豪華なもの、チープなもの、動物のために作られた工業製品、自然を模したニセモノなど、あらゆるものがほぼ等価値で扱われ、あたかも野山に転がっている草木のように、それらがすべて建築材料として集められている。これはまさに、

「東京における天然素材の家」

　ということなんじゃなかろうかと思ったわけだ。で、そこに住むオッチャンは、

「フンフーン～」

　と鼻歌を歌いながら、

「次は朝顔じゃなくて、菊のつるで壁を作り替えるんだ～」

　とか言っている。

　世間でよく言っている「ホームレス」というものと、僕が出会っている、竹やぶで二十数年さんとか、元板前さんとか、ホンマちゃんとか、クボちゃんとか、このオッちゃんとの明らかな違い。そして、いわゆる「建築家」と呼ばれている人たちが人のために設計して作っている「建築」と、僕が本当に住みたいと思っている「家」との違い。

　僕が当時、かなりしつこく気にしていた様々な疑問や違和感への解答を見つけたというか、そうかやっぱりあったか、あってくれたかと、とにかく１人で興奮した。こりゃ歩かねばと歩きまくった。

　気付いたら、東京都から山梨県へと入り込んでいた。川沿いに家なんか１軒もない。よく考えれば、青お梅うめより上流には１軒もな

かった。
　しかし、山奥に本当に仙人のような人の家がないとも限らないので、引き返すわけにもいかない。知らない間に、路上生活者の家の調査旅行は、奥多摩ハイキングへ、そして、源流のある笠かさ取とり山やま登山へと形を変え、１週間後に多摩川源流と思われる地点までたどり着いた。そこは水神社らしきものがあったが、水が湧わいているようには見えなかった。
「東京湾まで１３８㎞」
　と、看板には書いてあった。

隅すみ田だ川がわのソーラーハウスは未来を照らす
　多摩川から帰ってきても、路上生活者の家の調査は終わらせなかった。次は隅田川へ。こちらは草木が生い茂る多摩川とは対照的に、非常に綺麗に整備されている。隅田川は都市化された川である。両岸ともコンクリートに覆われている。
　浅草から歩いてすぐのところにある遊歩道にはブルーシートに包まれた家がたくさん立ち並んでいた。形は非常にシンプルであり、それぞれ似通った家である。多摩川とはまるで違う。
　この時に初めて知ったのが、ここでは月に１度、家を川沿いから堤防の上まで一時撤去しなくちゃいけないということだった。これはかなり大変だ。そのため、ここでは家を移動しやすく作る必要があるという。分解することを前提として家を作っているのだ。まさに「可動式」の家である。
「容易に分解することができ、また簡単に建て直すこともできる」
　これは僕が考えていた、これからの住宅の姿であった。土地からも、水道や電気、ガスなどの設備からも自由な、柔軟性のある家。それは、住んでいる人が積極的にかかわれる家である。環境、災害などにも振り回されない。そんな家ができたらどんなにいいだろうと想像しながらも、それを実際にやったとしたら、
「原始時代の竪たて穴あな式住居」

みたいになってしまう。あまりにも現実感がない。どうしたもんかなと考えていたのであるが、多摩川の家を見ているうちに、これは可能性があるのかもしれないと俄が然ぜん盛り上がってきていたのだ。

そこにこの可動式の家。隅田川は、またその可能性を深めてくれるかもしれない。

そして、１軒の家と遭遇した。小さくてシンプルな家だ。一見、なんの変哲もない。しかし、屋根から何か突き出ている。それは、

「ソーラーパネル」

だった。訳が分からなかった。なんだかＳＦ映画を見ているのかと思った。

いや、現実に見ているんだから、映画じゃない。その家が建っているそこだけが、２０ＸＸ年の東京になっちゃっていた。それぐらい未来的な家だった。

多摩川でも電気を使っている家は見てきた。だから、それぐらいでは驚かない。しかし、それまで見てきた電気を使っている家は、どこもバッテリーを充電してもらってきたり、ガソリンを買ってきて発電したりと、都市自体が不可欠であった。

しかし、これはソーラーパネルである。太陽だけでいいのである。ある意味、この家は世界中どこへでも持っていくことができる。きちんと話をしなければ。

「こんにちは」

「はい」

礼儀正しく、60歳くらいの男性が出てきた。といっても、家の入口に付いているカメラのレンズ越しに見えるのだ。

「ソーラーパネルについて話を聞きたいんですけど」

と伝えるとドアを開けてくれた。ドアは普通のドアとは違い、上に向かって折り畳み式になっていて折り畳むとちょうど玄関のひさし代わりになる。入口からいきなりアイデア満載である。

「ソーラーパネルを見て、これはすごいなと」

「ははは」

「使っているんですよねぇ」
「もちろん」
「これは拾ったのですか？」
「いいえ。秋葉原で買いました」
「いくらだったんですか？」
「１万円ぴったし」
　へー、買うんですね。
「発電機だったら、もうちょっと高いんですよ。音もうるさいし。それだったらこっちの方が断然いい」
　いくつかの理由があり、考えた末、自然エネルギーの方が自分にとっては有益であると。このへんの流れはかなりリアリティーがある。なるほど。
「でも、ソーラーパネルでどんなものが使えるんですか」
「発電したものは、すべてこのバッテリー二つに蓄電していくから、12ボルトの電化製品だったらなんでも使えるよ。ここには、ライト、テレビ、ラジオ、ステレオ、なんでもあるよ」
　そうか。家庭用１００ボルトに慣れすぎている僕は、電気というものが身近にありながら、それがどういうふうになっているかというのをイマイチ分かっていない。
「１００ボルトなんていらないよ」
　とソーラーオジさんは僕に言った。
「どうせ、家の電源にステレオをつなぐ時は、ＡＣアダプター使うでしょ。12ボルトだから、アダプターを使って調整しているわけですよ」
　そういえば、そうですね。
「大体、12ボルトの電源で動かせるんですよ。車もバイクもそうだし」
　ふんふん、そうですそうです。
「それで、このソーラー発電で、何時間もテレビが見られます」
　この家を見ていたら、自分の家も12ボルトでいいんじゃあないかっ

て思えてきた。でも家には１００ボルトがもうすでに接続されているわけで……。家と電気という視点でも、色々と議論していく必要がありそうだ。

　ソーラーパネルは、屋根からニョキッと触角みたいに飛び出している。彼は、それを動かしながら、

「こうやって、改造したんだけど、このパネルは可動式になっていて太陽の動きに合わせてパネルを移動することができるのね。ほら」

　と言いながら、パネルを動かして見せてくれた。僕は思わず笑ってしまったのだけど、無駄なく太陽の恩恵を受けられるようにしている。恐れ入ります。

　でもやっぱりこの距離がいい。パネルと人間の。

　近いのだ。とにかく。

　普通だったらソーラーパネルというのは家の屋根に設置されていて、そんなに触ったりするもんじゃないのに、この家では屋根もパネルも人間と近いから、容易にパネルを動かすことができる。この距離は、今の住宅ではありえない。オジさんは、太陽を見ながら、パネルを動かしながら、見えない電気を感じながら、テレビを見ている。僕は、その人間と電気の関係にゾクッと鳥肌が立ってしまった。木を擦こすって火をおこしているのとそんなに変わらないんじゃないかと考えたからだ。ナマナマしいのである。

「未来的であり、原始的」

　そんな家である。もう、路上生活者の家を調べているということなんか完全に吹っ飛んでしまい、そんなことどうでもよくなって、ただただその家自体に僕は惹ひかれていった。

広いスペースなんかいらない

「オジさんの家を、すべて調べたいんですけど……」

　ちらっと言ってみた。

「何するの？」

「この家がどういう素材で出来上がっているか、どんな寸法で設計さ

れているかとか、そういうのを詳細に調べたいんです」
「いいよ」
　普通にオッケーしてくれた。
「この家、かなり精巧に作ってますねぇ」
「そうだよ。職業柄だけど」
「えっ？　昔、何やってたんですか」
「カメラを作ってたよ。工場で」
　オジさんは、カメラ製造工場で働く職人さんだったらしい。どうりで、どこもかしこも、
「ピシッ」
　としている。
　それを聞いて一歩下がって家を見ると、入口の窓にカメラのレンズがはめられている。まるでこの家は、
「カメラ」
　みたいでもある。とにかくこれはきちんと話を聞かねば。
　さっそく、僕はリュックからメジャーを取り出して玄関の幅を測った。
　なんと、きっかり90センチだった。
「なんか、綺麗な数字なんですけど……」
「そうだよ。幅90センチ、奥行きが２２０センチになっている」
　奥行きも測ってみる。本当に２２０センチだ。でもなんだろう、２２０センチって。
「どうして、この寸法になったんですか」
「座して半畳、寝て１畳って言葉があるでしょう。それがもとになっているのね。だからつまり、１畳分あれば、生活できると」
　１畳の寸法は、約90センチ×１８０センチ。ふむふむ。
「で、それでやろうとしたんだけど、ちょっと自分には小さいかなと。で、色々試してみたのね」
　すごいです。自分を実験台にして、どれぐらいのスペースが必要かを研究したんですね。

「それで最終的には、幅はいじらないで、奥行きだけを40センチ延ばした今の寸法になったというわけです」
　これは一見、単純な作業に見えるが、実際は今までの建築のやり方とは正反対の方法をとっているのである。
　建築というのは、設計図に従って枠を作って、その中に人間が入っていくことしかできない。その枠を修繕しながら住むという方法は、実際のところはできにくいようになっている。すべてが固定されている。
　しかし、このソーラーオジさんは、自分に合う空間を、広げたり縮めたりしながら自分で見つけていったのである。それで、最終的に見つけちゃっているのである。全く逆の設計方法。だから、狭そうだけど、住む人にとっては快適である。
　人間が必要とする空間の大きさは、それぞれ違うはずである。自分に必要な空間を自然な方法で見つける。これは、これからの住空間を考える上で非常に重要な思考だと思う。
「自分に合う寸法を編み出しちゃったんですねぇ」
「そうそう、広いスペースなんかいらないよ。でもこれぐらいは必要なのよ」
　そうやって人は自分の空間というものを考えるべきだと思う。何もいらないということはありえない。最低限＋プラスαアルフア。それがキーポイントのようだ。

直観的＝効率的
「一時撤去がありますよねぇ」
「そうだよ」
「ということは、この家も可動式なんですか」
「もちろん」
「どうやって動かすんですか」
「この家は、三つに分解することができる」
「完全に分解するんじゃない、と」

「そうそう。それじゃ面倒くさいでしょ」
「どこがどう分解できるんですか」
「屋根、居間、収納にもなっている土台の三つ。この家は、だから固定されてないの」
「はっ？　どういう意味ですか」
　意味が分からない。固定されてなくてどうやって建っているのだろうか。
「まずは、土台があるでしょ」
「はい」
　僕とオジさんがいる床は開けられるようになっていて、土台の中を見せてくれた。床下収納のようにだ。神経質に畳まれた洋服などが綺麗に収納されている。
「ほー」
「で、この土台に、壁が載っている、と」
「そして、その壁に屋根がただ載っているだけ」
　ということは、
「そう、釘くぎとかは１本も使っていない」
「で、ビニールシートで上から包んで、ひもで縛っているだけ」
「よくそれで家が建っていますね」
「あとはそこに人間が入ると、体重できちっと固定されるというわけ」
「なんか次世代住宅ですね、ほんと」
　分解しやすいように、釘を使っていない。それでどうやって固定させているかというと、自分自身の重さを利用している。まぁ、それにしてもすべての質問に対して、かなり速いリアクション。これは、そういうことを考えながら生活をしているということだろう。だんだん、本当に頭が上がらなくなってきた。参りました。
「釘を使うと、逆に壊れやすくなる」
　無理に固定すると逆に揺れに弱く、材料を破壊する原因になってしまう。

「揺れるんだったら、それに身を任せた方がいい」
　わけである。この家はすべてが緩い。固定されていない。しかし、それが強さをもたらしている。なんだか人生のことわざのようだ。
　さらに、話は止まらない。
「この家は、地面にも固定していないから、水にも浮くんだよ」
「はぁい？」
「隅田川も何年かに１度大雨で増水するんだけど、その時にこの家、船になったんだよ」
「船にもなるんですかぁ？」
「土台が固定されていないのに加えて、収納スペースを作っているので、空洞になっているわけよ」
　だからって、船になるんですか？
「で、この家自体は簡単に移動できるように軽く作ってあるから、そこに水が流れてきて、フワッて浮いちゃったのよ」
　船にもなる。でもこの状態を、
「増水で水が溢れてきて、大変だった」
　とは思わずに、
「船になったんだよ」
　と考えるとは。その思考が彼の家を作り上げているのである。
　ソーラーパネルで自家発電しながら、可動式で、軽くて、固定されてなくて、船にもなる……。この家は一体なんなのだろう。
　そんな家が、ほとんど路上に落ちているものを拾ってきて、それを転用して作られているのである。
　入口の窓には、カメラのレンズ。覗き窓も付いていて、それにはアンティークの古い装飾が施されている。換気扇の穴には、普段はインスタントコーヒーの蓋ふたがはめ込まれている。家の中にあるギターの壊れたツマミは、ラジオに付いていたというスイッチを付けて修理してある。
　この家を説明するには、一体どう言えばいいのだろうか。再利用によってできた家、ゴミを転用した家、と言うだけでは説明できない。

リサイクルやエコという意識的なものとは全く違うベクトルの力によって作られていると思うのだ。それは無意識であり、そして本能的だ。僕は、自然と自分が作っていたあの「テント」がこの路上に建つ家との共通点を持っていると感じる。それは「直観的」でありながら「効率的」である。
「自然のものが美しく、人工のものが美しくない」とか「普通の使い方はこうだ」などという、過去に蓄積された知識とは距離が置かれている（しかし、忘れてはいない）。様々なものが再構成されているのだ。
そういう時に、「買い物」は必要がない。
「そのへんに散らばっているもの」
で十分なのだ。
それは家自体が、
「材料によって制限されていない」
のである。
「直観によって自動的に作られたものは、非常に効率的である」
これが、僕がこれらの路上生活者の家を見ていて、一番に感じたことである。そこには、
「ゴミを使って、家を建てている」
という意識は薄いように感じる。
「そこらへんのものを使っている」
だけなのである。

現代の枯かれ山さん水すい

ソーラーハウスの近くの家に、あるものをずっと作り続けている人がいて、僕はとても気になりよく行っていた。それは、
「花瓶と花」
のような造形物で、彼はそれをずっと作り続けているようだった。家の前には、作り終えた花の造形物が所狭しと陳列されている。花屋さんみたいに綺麗にディスプレイされている。

「こんにちは」
「どうしたの？」
「この花みたいなものは、作品なんですか」
「いやー、ただ作り続けているだけだよ」
「売ったりしてないんですか」
「売らないよ。あげるよ」
　と言って、彼は一つ僕にくれた。
「毎日作っているんですか？」
「そうだよ」
「これ一つ作るのに20時間ぐらいかかるから、ほとんど１日を費やしてるよ」
　彼は、家にはほとんど気を遣っていないようで、家を作るよりも、拾ったものでこの作品を作り続けることに力を傾けている。
「材料は、なんなんですか」
「段ボールを縛ったりするプラスティックのバンドだよ」
　材料となるバンドを見せてくれた。あーはいはい、よく見るヤツです。
「で、これを丸めて鑞ろうでつなげて、また丸めていって、ちょっとずつ花瓶の部分を作るのよ」
　花の部分は、造花だったり、近所で摘んできた花だったりしているようで、それをレイアウトして、他のいろんなおもちゃなども一緒に混ぜたりしながら作っている。洋風の花瓶にインスピレーションを受けているそうだ。
「もう７００個以上作ったよ」
「ホントですか⁉」
「このプラスティックバンドは色がたくさんあって面白いんだよ」
「へー」
「青だけでも10種類以上あるんだよ」
「そんなにあるんですか」
「でも、最近なぜか色が減ってきて、作る気も失うせてきているんだ

けどね」
　色のバリエーションが貧弱になってきているそうだ。不景気が影響しているのだろうか。それにしても、10種類の青を使い分けながら作品を作り続けてるんですね。かなり複雑な思考をしながら作っているのが分かる。非常に繊細な選択が常に行われているのである。
「また今度、老人ホームで展覧会をやるんだ」
「えっ？　展覧会とかやるんですか」
「たまにね。で、見に来てくれたみんなにあげるんだよ」
　これぞ、本当の芸術なのかもしれない。
　彼は、東京の余剰物を家ではなく、「作品」へと変化させている。というか、その彼が住んでいる家は、作品を作るためだけにあるようなものだ。なんて言ったって１日のほとんどすべてを作品制作に充てているわけだ。ということは、作品も家の一部と考えているのかもしれない。
　彼の家を見ていると、庭がなくても玄関前などに自分で育てた盆栽を飾る下町のオジさんたちを、僕は思い出した。作品自体の形状も、その作品の飾り方も、どちらもよく似ているのだ。
　僕は東京を歩いていて、狭い庭もないような家の玄関に、ほんの小さなスペースしかないにもかかわらず、自分が育てたであろう盆栽や植栽を飾り立てているのを見るにつれて、
「東京の庭」
　ということへの興味も出てきていた。
　そんな中、高円寺で１軒の家の玄関前の庭と出会った。次ページの写真がそれである。

一見、なんの変哲もない庭のように見える。うーん。でも、なんかおかしい。何がおかしいのか？　花が咲きすぎているように見える。色もギラギラしている。着色料たっぷりといった感じである。

「んっ？」

よく考えると、この写真を撮った時は10月である。おかしい。明らかにおかしい。なんで、ヒマワリが咲き乱れているのか。チューリップもあるぞ。おかしい。もうお分かりでしょうか。

咲いているように見えている花は、すべて「造花」である。

そうなんです。ピーンと真っすぐ咲いているヒマワリ。色とりどりに並んで咲いているチューリップたち、紫と真っ赤のガーベラ。すべてが造花なんです。真ん中には、どう見ても風車なのに「花」のように、植木鉢に刺さっているものもある。

しかし、なんで造花だとすぐ気付かなかったのだろう。それは、植木鉢も土も、しまいには葉っぱまで本物を使っているからです。これにはやられてしまった。

これはまさにいつまでも変わらない庭、

「ネバーエンディングガーデン」

になっちゃっている。

そして、この庭には隅田川のガーデニングと非常に共通点が多い。どちらも人工の製品を使って植物を表現しているということ、さらにそれを家の前に陳列しているということ。

植物を使っていないのである。まぁ葉っぱは本物だが。庭とは、自然を取り戻そうとする場所ではないのかもしれない。ふと、そう思った。そしてまた、ふと京都などの古い庭園を思い浮かべてみる。銀ぎん閣かく寺じとか、龍りよう安あん寺じとかだ。

「あれも、植物なんか使ってないな」

そう。砂と石ばっかりで造っている。どこかから拾ってきたものだったりして。隅田川と高円寺の庭は、

「現代の枯山水」

なのだ。隅田川の彼は、路上に落ちているものを材料にして作って

いる。15世紀では、砂や石を使っていたものが、現代では、捨てられたおもちゃであり、プラスティックであったりする。高円寺では、ホームセンターなどで買ってきたであろう造花を使う。今や、砂や石などより人工物やゴミが自然というわけだ。

　もう一つ不思議なのは、外に向けて庭が造られているということだ。自分のために庭を造っているはずだが、それが反転してしまっている。内側に向けるべきエネルギーが外に、プライベートなものがパブリックに向かっている。これはどういうことか。

　そして、この動きは日本の中で本当に至る所で見かける。玄関の前の植栽群。土地のない日本特有の考えなのかもしれない。

　自分の場所ではないところも自分の場所と考えることで、土地の狭さをカバーしている。そして、その感覚のおかげで、日本にはプライベートとパブリックが織り込まれた不思議な空間が点在することになったと考えることもできるだろう。そして、それは路上の家と、庭に顕著に現れてきている。

　この空間の登場は、決して最近の動きではないはずだ。日本という土地に昔から潜んでいた感覚。芸術作品として表出してくるのではなく、生活の中の造形としてその感覚が現れてくる。自分はそれを感じようとしているのかもしれない、そんなことを考えるようになってきている。

有機分解するソーラーシステム

　さて、ソーラーオジさんに戻ることにしよう。

「オジさん、今何か欲しいものとかあるんですか？」

　あまりにも軽い家に住んでいるソーラーオジさんに僕は聞いてみた。

「欲しいもの？　あるよ」

　なんにもない、と言うと思っていたので、びっくりした。

「なんですか？」

「コンピューターだね」

ウソでしょ。
「何をしたいんですか？」
「あれを今の人は、情報を得るものとしてばかり使うでしょう」
「はー」
「私は、それをですね、もっと本質的に使いたいんです」
「と、言いますと……」
「まず、ソーラーパネルで発電した電気を使ってコンピューターを動かします。コンピューターも12ボルトなので十分使えるのです。そして、コンピューターで、電気量の確認や、ソーラーパネルの角度調整、周りの天候、気温などの調査、とまぁ、この家の脳のう味み噌そのような感じで使いたいのです」
　もうこっちは完全にペースを握られ、思考停止となってしまっているのだった。
「それで、最終的には人間の脳とも接続して、家と人間の両方をコンピューターで制御したりしてみたいんだよねー」
　僕は自分がどこにいるのか、また分からなくなっていた。
「まぁユメだからね、ユメ」
　ハハハとオジさんは笑っていた。僕はなんかビビッていた。それはユメと言いながら、本気でこの人は考えているんじゃなかろうかと思ったからだ。
　人間は、直観に従って家を作り、生活を続けると、ここまで思考するものなのかと衝撃を受け、愕がく然ぜんとしながら僕は家に帰った。
　２０００年にこの家に遭遇したのだが、その後、ソーラーオジさんは65歳を迎えて、福祉施設に入り、この家はいつの間にかなくなってしまったのだった。しかし、この家が僕に与えた様々な問題提起、新しいアイデアは、ずっと頭の中でグルグルと旋回を繰り返していた。
　そうして、その後また隅田川を歩いていた時、
「あれっ」
　と、何かが目に入った。

近づいてよく見てみるとそれは、
「ソーラーパネル」
だった。また隣を見ると、そこにもソーラーパネルがあった。しかも、そのうちの一つはどこからどう見ても、
「中古品」
だった。というかまさに、
「あのソーラーオジさんのソーラーパネル」
だったのだ。僕は以前、スケッチをさせてもらっていたので、すぐに分かった。ソーラーオジさんがいなくなって、家がなくなる時にココに移動させたのだろう。そこに住んでいるオジさんに聞いたら、あいまいな返事が返ってきたが、おそらくそうだろう。
ここでは、家がなくなったとしても、それはただなくなったのではなく、次の新しい家の部品へと、
「有機分解している」
のである。おそらく他の部品も周辺の家の部品へと形を変えているのだろう。東京という都市においての有機分解である。
そうやって考えると、都市に散らばっているものは、すべて転用が可能である。ゴミなんかないのである。無限の可能性があるのである。
しかも、ソーラー発電システムの家は１軒だけでなく、なんとその隣にもあったのである。今度は、拾ってきたわけではなさそうだ。新しく買ってきたそうだ。その人は、ソーラーシステム付きのラジオも持っていた。ソーラーライフである。ソーラーオジさんの思考すらここでは、有機分解しているように思える。生活のダイナミズムがここには存在している。
そうやって、東京中の路上生活者の家を調査して僕は卒業論文を書いた。書いたと言っていいのかは分からない。なぜなら、僕はそれを論文というような形ではなく、図鑑のような形態で提出したからだ。写真をコンビニでカラーコピーして、レイアウトをして、小さなキャプションのような文章を付けて、ケント紙に表裏１枚ずつ貼っていっ

て、手作りの１冊の図鑑を作った。それを印刷所に持っていって、豪華なハードカバーの本に製本してもらった。
　小学館や講談社が出している図鑑のような、世界各国の民族の家を特集したような本と同じ棚に並べても遜そん色しよくないように本格的に作るというのが目的だった。最終的にはオールカラーの２００ページの大型本となった。まさに東京の路上の家の大百科事典に仕上がった。僕は大満足だった。
　当初は卒業論文が目的だったが、だんだんと調査を重ねていくうちに、そんなことはどうでもよくなっていった。それより、この現代の最先端の建築の一つの姿をきちんとまとまった形にしたいという欲望の方が増していき、論文としての体裁は姿を消してしまった。だから、きちんと受け取ってもらえないかと思った。しかし、体裁を無視したこの卒業論文は、意外にも好評で、
「この仕事は、きちんと続けて出版するべきである」
　と言ってくれる人まで現れ、すぐその気になった僕は、大学を卒業したら、そういうことをやろうと思っていた。とにかく気楽だったのだ。
　しかし、建築家を目指していた僕はどこへ行ったのだとも思っていた。自分でもよく分からない状態であったが、やはり、これまで見てきたような建築家という仕事と自分のやりたいと思っていることには大きな隔たりがあった。

第６章　理想の家の探求

石いし山やま修おさ武む研究室

　その当時、僕は全く設計をやっていなかった。最後の卒業設計は、

「移住ライダー」

　という名前だ。これは何かというと、ある寿す司し屋から格安で譲り受けた宅配用バイク、ホンダのキャノピーの荷台に小屋を載せて、自動車のリクライニング式の座席をくくり付け、トラック野郎かモッズ少年のように電飾を配線し、サウンドシステムを完備したバイク住居を作り、そこに住みながら移動している僕自身を撮ったドキュメンタリーだった。「貯水タンクに棲む」と同じようにビデオ作品だった。やけくそと真剣が混じった変な作品に仕上がった。

　もちろん、点数は最低だった。留年は、ぎりぎり免れた。危なかった。

しかし、それでも僕は、今言われているような建築家ではなく、様々なパフォーマンスを映像として発表するパフォーマンス・アーキテクトというのはどうかな、と思っていた。また１軒の家を１人の施主に作るのではなく、何か考えたことを本という形にして発表できたら、家を買えない人でも本は買えるし、たくさんの人が読めるので、こりゃいいと思い、本を出したいなとも思っていた。

しかし、だんだんと自分の興味が、「建築」だけでなくて、その周りの環境や、都市や路上に散らばるゴミにまで広がっていた。それはつまり建築家の仕事ではなくて、空間家（実際にはいないけれども）とか、そういうことなのかもしれない、などと考えていた。路上生活者の家を歩いて見て回ったのは、確実にそういう僕の思考を刺激した。

「でも、一体そういったことはどうやったらできるようになるのだろうか」

考えても、いつもよく分からなかった。

そうやって大学生活の最後の方の日々を、就職活動も一切せずに、どうやったらいいのか考える時間に充てた。でも結局、半分はそのまま寝てしまっていたようなものだった。自分の作った本を見ながら、

「これを出版できたら、なんか変わるかもしれない」

と思っていた。しかし、出版関係の知り合いは皆無で、しかも、本をロクに読まない僕は出版に関して全くの無知であった。ちょっと無理だな、と思った。

そうやって、これまでの、

「施主と建築家という関係しかない建築の世界」

じゃない、路上生活者の家や、後述するシュヴァルの理想宮のような、

「人間が本能的に建てようとする建築の世界」

にきちんと焦点を当てるような仕事をするんだという興奮に、自分で勝手に逆風を浴びせていた。歩いていこうと靴まで買ったのに、道がない。これはやばいなと思った。

そんな時、１本の電話が鳴った。電話の音で起きた僕は受話器を取った。
「坂さか口ぐちさんですか」
「はい、そうですが……」
「石山が呼んでいます。今すぐ大学に来て下さい」
「あっ……はい。分かりました」
「それでは」
　電話は、早稲田大学の石山修武研究室からだった。そういえば、この日は大学院の試験の日だった。お金がかかるから大学院には行かないことにしていた。
「なんだろう」
　訳の分からないまま、とりあえず大学に行ってみることにした。
「失礼します」
　緊張しながら席に座った。
「お前はこれからどうするつもりなのか？」
「ビデオ撮ったり、出版したりして活動します」
「大丈夫なのか？」
「はい、バイトでもなんでもやって、なんとかします」
　先生は愕がく然ぜんとしている。あちゃー。
「今出ていっても、そのままはじかれて終わるぞ。うちで少し勉強していけ」
「はい？」
「勉強していけ」
　予想外の展開にしばし驚く。大学院の試験も受けていないし。しかし、もしもその現場が体験できるとすると、これはすごい体験になるだろう。僕は、急に興奮しだした。安易である。しかし、これは紛れもないチャンスである。僕は急転換し、
「よろしく、お願いします」
　と言った。
「じゃあ、もう帰れ」

こうして、次の日から、世せ田た谷がやにある先生の「世田谷村」と呼ばれる工房に行くことになったのである。

朝９時から、夜は終電近くまで、平日はそこにいた。もちろん働いているわけではない。勉強させてもらっているのだ。生活費は、土日にバイトをしてまかなっていた。どうやって生きていたんだろう。そんなに昔ではないのに、今でも不思議である。

家賃は大分滞納していたが、借金はしてなかった。幕張メッセとかのイベントの大工さんをやって稼いでいた。夜から朝まで働いて、バイト代は１日３万円だった。高円寺の４畳半の家賃が２万９０００円だったので、なんとかなっていたのだろう。でもいつも本当に金がなかった。

知らない間に、僕の貧乏青春記みたいになってきているが、気にせず進めていこう。

その世田谷村では、実際の建築の仕事をいくつも行っていた。しかし、僕は設計を本当に１度もやっていない。そんな人がいきなり設計できるわけがない。当然、僕には変な仕事が回ってきた。

世田谷村新聞という小学生向けの一面新聞みたいなものを作ったり、隅すみ田だ川がわのソーラーハウスの図面を「タダで家が作れるキット」と題してインターネットで販売したり、当時の世田谷村はカンボジアの寺院内でモニュメント建築を建設していたのだが、それをセルフビルドで一緒に建設するワークショップ付きのツアーを企画して参加者を募ったり（つまりはツアーコンダクター）。

建築事務所にいながら、設計とはまるで関係ないところで活動をしていた。というか、まるで関係のないことをしているように見られていたかもしれないが、自分の中ではいろんなことが混ざってきて、いいぞ、いいぞ、という感じだった。

建設中の建物に勝手に住む

カンボジアのツアーは、

「ひろしまハウスレンガ積みツアー」

というものだった。広島市を中心とした募金によって、ポルポト派による虐殺が行われたカンボジアと原爆が落ちた広島の平和を祈る「ひろしまハウス」というモニュメント建築が、カンボジアの首都プノンペンにあるウナローム寺院の中に建設されていた。その設計を石山研究室が担当していたのだ。

その建物は、レンガ造りの５階建ての巨大な建物であった。ツアー参加者は、ひろしまハウスの隣にあった日本語学校に雑ざ魚こ寝ねで宿泊しながら、この建物のレンガ壁の建設を手伝った。僕はこのツアコンを担当したのだ。

ここで、一番驚いたことがある。それは、この建設中の建物の中に、たくさんの人が暮らしていたということである。まだ建設中である。こんなこと日本ではまず考えられない。朝日が昇ると、建設中の建物から、モクモク煙が上がってくるのだ。たぶん、朝飯だろう。そこから仕事に行っている労働者などもいるようだ。

で、僕たちの作業が始まろうという時間にはある程度綺き麗れいになっていて、どの人が労働者で、どの人が住人なのか、あんまり分からない。なぜなら、みんな仕事を手伝ってくれていたからだ。手伝うというか、知らない間にセメントを運んでくれていたり、掃除してくれていたり。なんだかみんな混じっているのだ。

そして、お昼になるとまた煙が上がってくる。びっくりして見に行くと、なんとキッチンがあるではないか。よく見ると、積むために僕たちが購入していたレンガを使って、そのキッチンをうまく作っている。その姿を見ていたら、注意などする気がなくなっていった。

建設材料を生活用品に転用している。ふと東京の路上生活者の家が僕の頭に浮かんできた。ほとんど同じ思考によって作られている建築といっても過言ではないだろう。場所に対しても、材料に対しても。そこにあるもので、空いている場所に家やキッチンを作り、生活をする。とても自由を感じた。ただ自由なだけでない、自然だなと思ったのである。それは、つまり、

「僕が一番、気になっている空間の成り立ち方」

であったのだ。
そこにある材料で、まだ空間化されていない場所を自然なやり方で空間にしていくということ。しかも、それは建築とは呼ぶことができないようなものだ。壁も屋根もない、しかし、それがまさに、
「人間が作った空間である」
と思う瞬間のことである。
そうやって、この研究室には、１年半いさせてもらった。なんにもできなかったに等しかったが、自分だけの仕事を見つけるという点で、いい充電期間になった。そして１年半後、
「１人でナントカやってみます」
と、先生に告げ、勝手に独立してみたのである。
独立といっても、何も稼ぐ当てはないわけで、とりあえず、なんかしなくちゃということで向かったのは「築つき地じ」だった。なんで築地だったのか。
はじめはテレビの大道具でもしようと思っていたのでＮＨＫの番組を作っている会社に面接に行ったのだ。しかし、面接を受けていると、なんだかおかしい。実は、今回は大道具のスタッフではなくて、放送作家の志望者を募集しているようなのだ。どういうふうに間違ったのか僕は覚えていないのだが。僕は、仕方なく、
「大道具の募集だと思って来たのですが……」
と言って、これまでの自分の経歴を半ばヤケクソで話した。すると、面接官の人は意外にまじめに話を聞いてくれたうえで、自分のことを話しだした。彼は築地で働いていたそうで、それがいまだに印象に残るぐらい素晴らしい体験だったらしい。なんだか話は変な方向に流れていってしまったのだけれども……。それで、
「君みたいなタイプの人間は築地に行くといいよ」
と、いきなりそういう話になってしまった。で、僕もそのまま、
「話を聞いていると、そんな気がしてきました」
とその気になり、そのまま面接を辞退し、帰り際にコンビニで求人情報誌「ａｎ」を手にした。そしてたまたま載っていた築地の果物の

仲卸の店に電話をしてみたのだ。
　築地はすごいところだった。日本とは違うなと思った。別の国のようだった。コンクリートで作った軍の施設みたいな建築物の中で、ターレーと呼ばれる運搬車に果物を載せて八百屋のオヤジと値段の交渉をしながら１人で働いている瞬間は、ＳＦ映画の中の登場人物になっているようで、毎日眠たかったが興奮していた。
　オヤジたちと話すのが趣味の僕にとっては、ここは隅田川ともシンクロしていたのだ。いろんなオヤジの癖、裏技、築地ならではの暗号など。どれもが僕を入り込ませていった。一時期は、自分がこれからやろうと思っている建築なんか忘れてしまった。築地に完全に溶け込んでいた。
　で、１年ぐらいたった時にようやく自分の状況に気付き、
「これでは、何もしないで終わってしまう」
　と焦りだした。その時、やはり自分の卒業論文をもとに本を出版してみようというアイデアが出てきた。そこで、東京だけでなくて、他ほかの都市も調べてみようと思った。しかし、築地は日曜日しか休みがなかった。しかも金もなかった。土曜の夜に夜行バスに乗って日曜の朝に現地に着いて、夕方に東京に向けて出発して月曜の朝一に東京に到着し、そのまま築地に行くという無茶苦茶なスケジュールで名古屋と大阪に通うことにした。

飾り立てられた名古屋の家

　名古屋と大阪の路上生活は、東京とはまるで違っていた。名古屋では家自体を飾り立てるような過剰な装飾の家がよく見られ、大阪では複数人で生活している家が多く見られた。
　話を聞いていて興味深かったのは、東京にも名古屋にも大阪にも住んだことがあるという人がいてポツリとこう言ったのだ。
「場所で家が変わるのよ。人じゃないのよ」
　つまり彼は、いろんなところに住んできた経験から、家の形というのは、作る人ではなく、その場所が持っている固有性に従っていると

言うのだ。そんなことは考えたことがなかったので、びっくりしてしまった。そうやって考えると、なるほど、場所ごとに顕著な違いがあるのである。それは東京という一つの都市の中でも見ることができる。多摩川と隅田川では明らかな違いがある。これは人が空間を作るということの重要な要素になっているのかもしれない。

　名古屋には本当に様々な形の家が立ち並んでいた。ほとんどが名古屋市内を走っている高速道路の高架下のスペースを利用していることが、そのような空間を作ることを可能にしているようだ。

　次ページ上の写真の家は、名古屋市が作った巨大な滑り台を家の構造にしている。玄関はスロープを利用している。出る時は快適で、中に入るのにはなかなか体力が必要だ。これは防犯のためであろう。

　それにしてもこの場所は、両わきを５車線もある自動車道で囲まれている。どこの子供がここまで遊びに来るのだろうか。理解に苦しむ。ずっとほっておかれていたのだろう。税金の無駄遣いで作られた滑り台は、しっかりと転用されている。

　次ページ下の写真の建築物は小料理屋ではない。高架下にあるレッキとした路上生活者の家である。店ではなく住宅である。しかし、どうもおかしい。家の前には植栽が綺麗に陳列されて、よく見ると、なんと公衆電話もある。ＮＴＴも粋いきなことをするもんだ、と思ったが、電話線はつながっていなかった。

　打ち水がますます雰囲気を盛り上げている。そこらへんの変な新建材の家などより断然情緒がある。格子窓が決定的だ。この家の壁は、まるで土壁のような質感を持っている。なんと、この壁は白色の段ボールである。この家は、どんな素材でも扱い方次第でどんな空間をも作り出すことができるという一つの希望を提案していると思う。

名古屋で一番興味深かったのは、家ではなく、１人のオジさんの言葉であった。彼は小さな家に住んでいた。白川公園という大きな公園にその家はあった。僕はカメラを首から下げて公園の中を歩いていた。そして１軒の家を見つけ近づいていった。住人は公園を入念に掃除していた。その住人は僕を見るなりこう言った。
「お兄さん、いいカメラを持っているね」
「えっ？　ありがとうございます」
　その時、僕はそれまで使っていたインスタントカメラではなく、弟がパチンコで当てて買ってきたニコンＦ80をぶら下げていた。
「ニコンはいいカメラだ」
　と彼は言った。また、どんどん撮ってくれ、と続けて言った。そのオジさんの言葉には開放感が伴っていた。オープンマインド。
「私はこの生活を自ら選んでいる」
　なんだか仙人みたいに見えてきた。
「私は幸せだ」
　オジさんの周りにはハトが大量に集まってきた。ご飯の時間なのかと思ったが、彼は何もあげていない。ただ戯れているのだ。ハト語が喋しやべれるというのか。
「ただこうやって動物と一緒にいるのが好きなんだ。動物は素晴らしい」
　本当の仙人に会ってしまった、と思った。
「人間は７対３に分かれる。７割は欲におぼれる人間だ。君と私は３割の方だ。大きな家もいらない。その３割の人たちがこれからはしゃきっとしなければいけない」
「はぁ」
　どうやら本当にこの人は、公園での生活を自分の意志で選択しているようなのだ。地面と離れてしまっている家は家でないと。そのためこの公園に家を作って動物と戯れているのだと。どうやって暮らしているというのか。
「オジさんはお金はどうやって稼いでいるんですか」

「競馬だよ」
「ギャンブルですか？」
「でもオレは賭けたことがない」
「はい？」
「予想師だよ。競馬の。どの馬が来るのかが分かる」
「どこでやっているんですか」
「ここで」
「？」
「競馬新聞に売っているんだよ。新聞社の人がここまで競馬の予想を買いに来る」
　本当なのか。でも本当にしか聞こえない。
「しかし、お金というのは不安定なもんだ」
「そうなんですか？」
　もう訳が分からない。
「そうだ。だから私はすべて金きんに換えている」
「なるほど」
　彼はおもむろに胸元に手を突っ込んだ。
「ほれ」
　彼が出したのは金のネックレスだった。指輪もはめていた。
「持っているお金はほとんど身に着けているってことですね」
「そう」
　独自の哲学で生きるオジさんであった。いやー、いたらすごいなと思っていたような人が、本当にいるもんである。
　僕たちが考えている「家」というものが、どれぐらい人間に必要なのか。お金もそうだ。仕事もそうだ。色々なことが頭を駆け巡っている。すべてをもう１度考え直している。
　このオジさんは本当に実行している。自分の「生活の尺度」というものを見つけ出している。やっぱりこうやらんと。やっぱり日本にも現代にもいるんだ。本当に。とにかく僕は自分が間違っていないと勝手に確信した。

もう、はっきり言ったら、建築とかそういう問題ではなかった。本能的な矛盾に満ち満ちた人間の営み。それがこの日本の大都市のド真ん中で繰り広げられている事実は、とにかく僕を突き動かした。

このオジさんは、自分の体を「金庫」にしている。歩く銀行みたいなもんだ。家は小さいが、自分の周りの公園を、家と同等に、感覚的に利用している。仕事も独自のものだ。その人しかできない仕事を自分で発明している。人間の体と、建築と、生活とが渾こん然ぜん一体となって、しかもその人独自のもので、どれにも似ていない。その時、その人にとっては、空間すべてが家となりうる。

大阪の変な空間

大阪でも変な空間に出会った（次ページの写真）。これ、究極かもしれません。ある意味で。

ここはもちろん、公道である。そしてバックには工事中の壁が。壁には何やら花の絵が描かれている。これはおそらく通りすがりの人が落書きをしたのではなく、工事を行っている人たちが発注したものと思われる。こういうことはよくあるわけだ。
「工事」というのは非常に乱暴なイメージがある。さらに加えて騒音もうるさい。何かと周囲の人の反発を受けるものだ。そのため工事をする側は色々な趣向をこらし、緩和剤を注入する。あるところでは造花の植物を飾ったり、壁一面を緑で塗ったり、子供たちにペンキで何か描かせたり……。
　公共の場所に突如現れるそれらのちょっと無理がある芸術作品は、その周りの空間を少しばかり変化させる。僕はそれを見て、いつもなんだか変だなと気になっていた。悪いことをしているわけではない。しかし、何かその人たちの考えていることが感じられるというか、よく分からないが、違和感を覚えていたことは確かである。
　そういう時にこの風景と出会った。これは痛快である。工事のハードさを緩和させるために描かれた大きなピンクのガーベラの絵。その前に、椅い子すを３脚。ただ置いているだけ。なんと真ん中には手作りの暖炉もある。そうすることで、あら不思議。工事中の壁の前の道路は、一瞬にして大きな花の絵が飾られた、暖炉付きのリビングルームへと変化したのだ。左の椅子の前には電気コードまである。
　これは確かに生活空間であると言える。もうここには、屋根も壁も床もない。というか部屋自体もない。しかし、そこに椅子を置くだけで、工事中の防壁は、部屋の壁となり、描かれた花の絵は、一瞬にしてその部屋に飾られた大きな芸術品となる。ただの屋外なのに、僕たちはそこを生活空間と感じることができる。これはまるで子供の秘密基地のようでもある。
　以前、ある子供に、
「秘密基地に連れていって」
　とお願いしたところ、その小学校１年生の男の子は、
「酒屋さんの裏庭」

を指差して、
「あそこが秘密基地」
　と教えてくれた。しかし、どこからどう見てもお酒を入れるプラスティックケースが積み重ねられたものしか見えなかった。
「どこが秘密基地なの？」
　と聞くと、
「あそこだよ」
　と言って、お酒のケースが重なっているところを指差している。そこで隠れたりするのだそうだ。
　つまり、僕にはただケースが重なっている酒屋さんの裏庭にしか見えないものが、子供たちにとっては秘密基地になっているのである。
　何かを作ることが建築ではないのかもしれない。そこを自分の場所と感じられたら、それはもう紛れもない「建築」なのではないかと思った。
　この大阪の暖炉付きの路上の部屋もその考えと一緒である。そして、これは未来の家、建築の考え方を示唆しているのかもしれない。実際の建築がない生活。しかし、そこにはたくさんのことを感じられる空間が転がっており、僕たちはそれらを利用することで、世界中ほとんどを自分の家のような感覚で捉とらえて生活することが可能になる。そんな夢みたいなことができるのかもしれない。と、僕は考える。
　そして、それは日本人特有の空間の感じ方であるのかもしれない。狭い生活空間環境のために生まれてきた茶室、坪庭、盆栽などの思想は、ＩＣチップを生み出し、携帯電話を世界中に広めていった。そのような極小のモノを作り出すことによって、極大の空間を感じることを可能にしている方法こそ、これからの生活に必要なものである。
　築地で働きながら、そうやって名古屋と大阪の調査を続けた。そして、また新しい本を編集し作りだした。１５０ページほどの「ＲＯＡＤ　ＩＮ」という本である。これは名古屋と大阪の写真のカラーコピーを「ＲＯＤＩＮ（ロダン）」の写真集の上に貼はっていったものであ

る。ＯとＤの間にＡを書き加えたら「ＲＯＡＤ　ＩＮ」になったというわけだ。
　卒業後２年を経て、この路上生活者の家の調査を実際に本にできないかと、僕は本気で考えるようになっていった。ただ相変わらず出版社とコネなどあるはずもなく、どうすればいいのか全く知恵がなかったが。
　そして高校の同級生の友人に電話してみた。彼女は色々と本に関して詳しかったのだ。それでコレコレこういう本を作り、どこかに持ち込みをしてみようと思うのだがどうしたらよいかと聞いてみた。すると、すぐ、
「リトル・モア」
　という名前が出てきた。少しだけ聞いたことがあった。
「そこは面白い本を色々出しているからよさそうだよ」
　その一言で僕はリトル・モアに持っていくことを決めた。
　リトル・モアから出ている本の奥付を見ると電話番号が書いてあったので、さっそく電話してみた。
「あのー、作品を見てほしいんですけど……」
　完全に緊張していた。なんだか色々と説明したはずだ。
「すみませんが、現在写真集を持ち込み企画で作ることはかなり難しいと思います」
「いや、分かっているんですが、とにかく１回見てもらうことはできないでしょうか？」
「んー、今ちょっと忙しいので……難しいです」
　それで電話は切れた。これはやばい。これで終わってはどうしようもない。それで、他のところに持っていくというアイデアがその当時の僕にはなかった。友人が教えてくれたのはその１社しかなかったのだ。時を経て、もう１回電話するしかないなと思った。
　そして２００２年の年末にまた電話してみた。とにかく１回見てもらいたかったのだ。すると、
「今はちょっと忙しいんですけど……」

やばい、このパターンは。
「年明けだったらなんとかなります。年明けすぐに持ってきて下さい」
おー、やりました。とりあえず見せるところまではこぎつけることができた。

遊牧生活は可能か

そして年が明けてすぐに編集部に向かったのである。
「はじめまして」
「はじめまして。編集の大おお嶺みねです」
初めての編集部。無茶苦茶緊張してきた。で、さっそく作品を見せた。
「ヘェー」
けっこう気に入ってくれているようだ。しっかり見てくれている。
「ちょっとー、浅あさ原はらさーん」
と言って、もう１人、男性の編集者も呼んだ。
「はじめまして。浅原です」
２人ともかなり気に入ってくれていることがだんだんと伝わってきた。これはひょっとしたらひょっとするかもしれない。僕は少し興奮した。
「それでは、１度これを企画会議に掛けたいと思います。本を貸してもらえますか」
「はい。ぜひ」
なんだか、何かが始まりそうな予感がした。もう本ができるんだと勝手に思っていた。
そして、２ヵ月後。浅原さんから連絡があり、正式に出版することが会議で決まったとの連絡を受けた。何かがゴロゴロと転がり始めた。
１年と４ヵ月かかったが、無事に本は出来上がった。しかし、本の題名だけがまだ決まらなかった。なかなか思い浮かばず苦しんだ。こ

れはホームレスの家の写真集ではない。それをどうやったらうまく伝えることができるか。これは日本の大都市という「自然」が作り出した家の図鑑なんだ。ということは……。んー、でも出てこない。
　もう期限は迫っていた。
　それである日ふと、
「これは普通の家の写真集とは違う。０円で作られた家なのだ」
　というアイデアが出てきた。つまり、これは商品化された現代の家とは全く違う種類のものである。むしろそれは動物たちの「巣」に近いものである。
　動物たちの巣は商品化などされていない。もちろん、「０円」である。
「０円」
　このフレーズにピンと来た。当時は「０円」という表記が都市の中で溢あふれだしていた。０円携帯やら、０円雑誌やら、なんだか本当に０円だったら商売が成り立たないだろうに、なんでこんなにおかしなことを言っているのだろうと思っていた。しかし、路上生活者の家は紛れもない、
「０円の家」
　だった。そしていろんなものを転用している感覚を文字に投影するために、
「０円ハウス」
　と名付けた。数字、漢字、カタカナが混じっている。なんだか変な、それでいて的確なネーミングができた。
　そして『０円ハウス』は印刷所へ送り込まれた。
　日本だけでなく、海外でもこの本を読んでもらえたらもっと様々な議論ができるのではないかと思った僕は、翻訳をしてほしいと出版社に言ってみた。しかし、フルカラー２００ページの豪華版になっているので翻訳まで予算が回せなさそうだということが分かった。それで、弟に英文科の友人の佐さ藤とうさんを紹介してもらい、お願いしてみた。本を作ることに興味を持っているようで、破格の料金で翻訳

を引き受けてくれた。これがその後、大いに役に立つことになるのである。

　そして、２００４年の７月に『０円ハウス』は出版された。

　本を出してよく聞いた感想が、

「本当は私もこういう生活がしてみたい」

　というものだった。そしてその後には、

「でもできない」

　と、いつも決まって誰だれもが口にした。これは非常に不思議な体験だった。できないと思いながらも、本心ではそうやって自分の空間を、小さくてもいいから、自分で作りたい。そういう生活にあこがれながらも、住所がないところに住むということへの抵抗は、当然のごとく全員にある。これならいっそのこと住所なんかなくしてしまえと、一瞬思った。それではもちろんルールが無茶苦茶になってしまう。

　しかし、この皆がやりたいと思っていることを少しだけでも可能にすることはできないものだろうかと思うようになっていく。

「大都市の余剰物だけを転用して家を建てるツアー」

「大都市の中での水道、公衆便所、公衆台所の設置」

「自分がどれくらいの空間が必要なのかを知るワークショップ」

「ソーラーパネルを使ってパソコンを使うカルチャースクール」

　そんなことを色々やって技術を高めれば、本当に生活自体がぐるりと変わってしまうかもしれない。そんなことを真剣に考えてしまった。

　現在の住環境がいかに矛盾したものであるかということを無意識には気付いているのだ。しかし、何もすることができないと勝手に決めつけてしまっている。それはもしかしたら変えることができるのかもしれない。

　人間には大して広いスペースは必要がない。なぜなら、壁に囲まれているスペースだけが自分たちの場所ではないからだ。大阪の０円ハウスの例を見ても明快なように、僕たちはもっと広い自由な思考かで

きるはずである。その時、壁は関係ない。自分の土地なんて関係ない。というか狭すぎる。寝るところなんてそこそこの空間があれば十分である。
　そういう観点で喫茶店や銭湯やレコード屋や図書館を見てみると、これらはパブリック空間にあるプライベート空間としても捉えることができる。
　お金を払って手に入れることができるプライベート。しかも、そこはたまに自分の家の中より居心地がよかったりする。これではもう何もいらないのではないか。と、そういう妄想が頭に浮かんでくる。
　まるで遊牧民だが、東京の中ではこの遊牧民の生活が可能なのではないだろうか。０円ハウスの住人たちはある一つの可能性を提示したのではないかと思う。人間には堅固な家はいらないのかもしれない。壁なんかなくてもいい。設備もいらないのである。もっと大きな、色々な人が使える場所があればいいのである。
　頭の中で僕は、いつの日かこういう時代が来るのではないかと思っていた。それを０円ハウスの住人たちは今現在行っているのである。

パリ・ロンドン行あん脚ぎや
　さて、僕はこの出版された『０円ハウス』を持ってすぐさまヨーロッパに向かった。日本ではまだ０円ハウスを建築として捉えることは論外であった。ただのキワモノを調べているだけだと思われてしまいかねない。出版できたことは喜ばしいが、理解してもらうのはなかなか難しいのではないかと思っていた。それならいっそどこか理解を示してくれるところをこちらから探しに行けばいいのではないだろうかと考えた。そして、とりあえずキッカケを求めて、僕は友人が住んでいたパリに旅立った。
　パリの美術書や建築書を置いているようなところはほとんどすべて回った。すると、どこも本を置いてくれることに好意的な反応を示してくれた。みんな著者が自分で本を置いてくれと言っていることに驚いてはいたが……。

ポンピドゥーセンターという大きな現代美術館の書店などにも行ってみた。難色を示していたが、後でオーダーしてくれていたようだ。なぜならそこで僕の本を買ったと言うフランス人が、なんと来日して僕の家に来たのだから。

日本で会っていた敏腕キュレーター、ホウ・ハンルゥにも連絡したら、すぐ来なさいと言われた。彼は僕の卒業論文を見たことがあり、もし本などを出版したらパリに遊びに来なさいと言ってくれていたのだ。０円ハウスの展示を美術館でできたら、多くの人に興味を持ってもらえるだろうと考えていたので、すぐさま彼と会った。

彼はなんと、もうすでに展覧会に僕を参加させることを決めていたらしく、早々と話が進んでいった。訳が分からなかったが、すごくエネルギーを感じた。日本で受けていたのとはまた別種のエネルギーだ。自分が路上生活者の家の調査をやっていることに内的必然性を感じていたのだが、それをもっとやらねばと思うようになっていった。建築の別のやり方があるのではないかときちんと伝えることができるかもしれないという希望が出てきた。

ホウは本当に理路整然としていて快活でノリノリの中国人だ。

「じゃあ、次はこの人に会いなさい」

と彼は胸ポケットから電子手帳を取り出し、電話番号を書いてくれた。

「彼はパレ・ド・トーキョーという国立現代美術館のディレクターだから、色々相談に乗ってくれるはずだよ。じゃあ次は展覧会でね」

ホウは颯さつ爽そうと去っていった。なんでもサッと軽ーくやっているように見えた。そうした力加減はそれまであまり見たことがなかった。僕は興奮すると同時に少し途方に暮れた。自分の中ではキャパオーバーだったのだ。

言われるままに教えてもらった美術館に行ってみた。もちろん僕はこれまで１回も展覧会に参加したことがない。

すべてが初めてだ。何も分からずここまで来ていることに半分笑えてきた。もうこうなったらどうにでもなれである。用件を伝えると裏

口から通され、エレベーターに乗ると屋上みたいなところに出た。そこにディレクターはいた。
「ジェロームです」
「はじめまして」
「ホウから話は聞いているから、さっそく作品を見せて」
　と言われ、本を取り出す。１ページ１ページ丁寧に見てくれる。興味を持ってくれているようだ。
「そしたらここに電話しなさい」
　とまた教えてもらった。
「僕の友人が雑誌の編集長で、そこでたぶん掲載してくれると思うよ」
「本当ですか？」
「そのうち僕とも一緒に仕事をやるかもしれないね」
　そして、僕はまた次の目的地へと向かった。
「こんにちは」
　教えてもらった「ＢＬＡＳＴ」という雑誌の編集部はボロボロのアパートの一室にあった。外はボロボロなのに、部屋の中は最新式だった。そのギャップが格好良すぎて僕は自信を失った。
「はーい。キョウヘイね。話は聞いているわ。作品を見せて」
　アンドリューという女性が編集長だった。
「んー、なるほど。それではあなたに６ページをあげるわ」
　ん!?　即決である。それでいいのか。
「写真はこれとこれとこれと……。オッケー。決まりね」
　早すぎる選択にビビりながらも、そうでなくっちゃと、こっちも盛り上がってきた。こっちではやっぱり僕が無名とか建築家とかなんとかかんとか……関係ない。本当にそれを実感できた。何をやっているかだけ。これは大いに自信になった。
　その後、ロンドンにも行き、また書店をグルグル回った。その他にも美術館、ギャラリー、建築美術館、建築学校など、１ヵ月間であったが、本１冊だけ持ってパリとロンドンを行脚したのだ。

元祖０円ハウス「シュヴァルの理想宮」

　今回のパリ・ロンドン行きは『０円ハウス』の紹介行脚だけでなく、もう一つの目的があった。それはある建築を見に行くというもの。それはどういうものかというと、

「シュヴァルの理想宮」

　という名前の建築である。

　理想宮といっても王族が作ったような宮殿ではない。車もないような時代に１人の人間が歩いて石を拾い集め、33年の月日をかけて作った手作りの宮殿なのである。

　この驚くべき理想宮の存在を大学時代にある本の中で見つけた時は信じられなかったが、同時に嬉うれしくなった。こういう建築が存在するということに、商品となってしまった現代の建築とは確実に一線を画す何かを感じることができたからだった。それまでに幾度かあった建築ショックの中でもひときわ衝撃があった。これを１人の力で作っているというところに、僕は希望を持ってしまった。やっぱり１人でも作れるんだと。そして、いつの日か実際に見に行ってみたいものだと夢想にフケッていたのである。

　１８７９年、フランス南部のオートリーブで郵便配達夫をしていたフェルディナン・シュヴァルは奇妙な形をした石につまずく。その石に魅せられた彼は、その日から仕事の途中に石を収集し、家に持って帰るようになる。ある日、以前より頭の中で想像をしていた宮殿の建設を、石を使って始める。１９１２年に33年の月日を経て理想宮は完成する。周りの人間は彼を「変人」呼ばわりしたが、当時のシュルレアリスムの指導者アンドレ・ブルトンが、

「素朴派唯一の建築」

　と絶賛し、その後国の重要建造物に指定され、現在も保存されている。

　話だけ聞いていてもすごいが、写真を見るともっとすごい。小さな石を一つ一つセメントなどでくっつけながら巨大な宮殿を作り上げて

いるわけである。最大の秘密基地といっても過言ではない。この人は奇人でなく芸術家であるはずだ。僕はとにかく実物を見なくてはと機会をうかがっていた。

そしてリヨンから電車に乗り、その後スクールバスに乗って理想宮に向かった。理想宮は非常に静かな場所に建っていた。周りの建物に隠れるかのようにひっそりとそこにあった。

「小さいのに大きい」

なんだか不思議なスケールだった。理想宮は大きくはない。しかし、それを１人の人間が道に落ちている石だけを拾い集めて作り上げているという事実を考えて、また改めて見てみると壮大に見える。だけど、少しだけ控えめに。その周辺の空気は静かに落ち着き払っていた。

細部を一つ一つ見ていくと、動物に見えたり、植物に見えたり、建物に見えたりと複雑に揺れ動いている。見る角度、時間帯でも様々に変化しそうだ。彼が全体を想定して作っているのではなく、小さな部分から即興で作り始めているのを感じることができる。直観だけに従って作る。しかも彼はそれを33年もの間、途切らせることなく続けた。それは一体どういうことなのだろう。僕は０円ハウスを見る時、常にシュヴァルのことが頭に浮かぶ。この二つには共通点が多いのだ。

●独力で作っている

●道に落ちているもので作っている

●長い間作り続けている、変化し続けている

●奇人と思われている

●細部が様々な顔色を持っている

●図面に従って作るのではない

●建築の専門家ではない

　などである。しかし、僕ははっきりとこう言える。
「家は、独力で、図面なんかに従うのではなく、直観で、毎日自分の体のように変化させながら、作り続けた方がいい」
　19世紀末にシュヴァルが伝えようとしていたことは、日本の大都市でもまだ消えていない。しかし、それは相変わらず排除されようとしている。
「元祖０円ハウス」
　を通じて視界がはっきりしたまま帰国することができた。

帰国すると、『０円ハウス』の本が書店に並びだした。海外の書店でも並びだした。爆発的に売れることはなかったが、それなりに伝わっていったのではないかと思う。日本ではやはり反応が非常に薄かった。まぁ、それは想像していたことでもあるのだが、なんとかしてみたいとも思っていた。

海外の方は、その後、ベルギーやメキシコで展覧会に参加したり、フランクフルトで毎年開催される世界で一番大きいブックフェアに出品して、また１人で売り込みしたり、ニューヨークのギャラリーや書店を回ったりと精力的に動いた。ボディーブローのような効き目があったかどうかは分からないが、徐々に面白い動きへと変わっていった。

インディペンデント・キュレーターの原はらさんから連絡があった。

「バンクーバー州立美術館のシニアキュレーターのブルースという人があなたに興味を持っているわよ」

「ホントですか……」

「それで、０円ハウスの個展をやらないかと」

「ちょっと面白そうですね」

「まだ本決まりじゃないけど、今度会って話してほしい」

いきなり予想もしないところから連絡が来た。２００５年のことである。世の中は環境やエコブーム。家に対する考え方も色々変わってきた。自然素材やガーデニングなど、僕が０円ハウスを調査していた時とはまた変化していた。美術館でも絵だけを飾るのではなくなっているようだった。少しずつ、人が空間や生活、建築に興味を持ってきたのかなーと思っていた。

その後、ブルースと会って話す機会があった。彼は０円ハウスに大変興味を持っていて、ぜひうちの美術館で発表してみないかと言ってくれた。そして、２００６年の９月にカナダのバンクーバー州立美術館で個展「０円ハウス」が開催された。この展覧会は非常に大きな反響があり、僕は美術館でギャラリーツアーと称して一つ一つの写真の

説明をしたり、美術大学で講義をしたりした。
　こちらでは、みんなが自分の生活をする空間、家などに非常に強い関心があるようだった。それと共に、ゴミの問題、社会的なホームレスの問題など、本当に数多くの質問を受けた。僕は完全には答えることはできなかった。そして自分でももっと知りたいことがたくさん出てきたのである。
　バンクーバーにも０円ハウスは存在していた。僕は、パリやロンドン、ニューヨークなどの路上生活者の問題は日本とは別ではないかと思っていた。しかし、バンクーバーで地元の人の話などを詳しく聞くと、こちらにもゴミで作られた家が都市の隙すき間まにあるのだそうだ。これはもっと大きな視点で調べる必要があるのかもしれないと、様々な課題が生まれた。
　そういう流れもあり、また僕は隅田川へ向かった。そして、鈴すず木きさんたちと出会うのである。今度はもっと明確にイメージを持っていた。もう路上生活者なんていう視点はなくなっていた。このような大都市で人間がこれから生きていくためにはどうすればいいのか。そのための答えを持っているのかもしれないという推測のもとに会話を試みた。もっと大きな視点を。
　０円ハウスを調査し始めた２０００年と現在では家や生活に関する人々の興味は大幅に変化している。今はまだホームレスの家だとか思うだろうが、おそらくその先入観は今後変わっていくだろうと思っている。たぶんそんな先入観は関係ない。都市をどのように転用、利用、再利用、再認識していけばいいのか。その答えの一つの提案を鈴木さんは持っている。

鈴木さんの夢

　繰り返し鈴木さんの家に通い、鈴木さんから生活や家、仕事について話を聞くにつれて、いろんな変化があった。これまでの僕は、現在の建築というものに対してのアンチテーゼとして、０円ハウスや鈴木さんの生活、様々な非専門家による建築物や作品を捉えてきたところ

もあった。しかし、今はもう全く違う。鈴木さんと話しながら僕は彼の生活があまりにも本質的で正直だと思ったのだ。

　それはアンチテーゼでも一風変わった生活でもなかったのだ。鈴木さんしかできない、鈴木さんによる一つの確かな生活である。そこを僕はきちんと考えていきたいと思った。すべての人の生活はそれぞれに違い、それぞれに面白さがあり、それぞれに等しく素晴らしいのである。その考え方には僕自身も大いに励まされるものがあった。

「自分で考え、自分で作る」

　生活、家、仕事、人間関係……。鈴木さんの身の周りのあらゆることにこの思考が詰め込まれている。そしてこれが、小学生の時に僕がなりたいと思っていた建築家の姿でもあった。

　お金を持っている人たちが土地を購入し建築家に依頼して建築物が建っていく。なんで訳の分からない高さの建築物が要るのだろうか？　いまだに僕は全く理解できない。そんなんじゃないと思う。僕がなりたいと思っていた職業は、現在考えられているような建築家という仕事ではないことが分かった。

　それじゃそれが一体なんなのか。それを伝えるために、まずはこの本を提示してみたいと思う。僕たちはお金を稼いでデカい家を建てることを夢見るのではなく、自分にしか作ることができない家に住んで、自分にしかできない生活の方法を見つけることをまずはやらなくてはならない。

　僕は熱くなってしまい、そんなことを鈴木さんに吠えていた。焼しよう酎ちゆうはけっこう飲んでいたが、本気だった。すると、鈴木さんが喋りだした。

「坂口さんよー」

「はい」

「いいよ。いい。その勢いでやらないかんよ」

「はい！」

　興奮してきた。

「いつか、この私の生活をきちんと伝えることができるんじゃないか

と思っていたのよ。っていうかそういう夢を見たのよ。そしたら坂口さんが本当に偶然来たからね。びっくりしたよ」
　ウソかどうかは分からない。僕を喜ばせようとして鈴木さんはそんなことを言ってくれているのかもしれない。でも僕は完全にその言葉を信じた。
「坂口さん」
「なんですか」
「私には……夢があるんですよ」
「はい？」
「だから夢が……」
「本当ですか！」
　夢まで教えてくれるんですか！　鈴木さん。本当にいつでもサービス満点である。
「お願いします。教えて下さい」
「いいよ。ある日ね。花やしきの近くで野菜を買おうと行ったらね、１軒の店があったのよ」
「はい」
「で、その店っていうのがちょっと変なのよ」
「どう変なんですか」
「駄菓子屋なんだけど、店がリヤカーなのよ。移動式なわけですよ」
「なるほど」
「しかも、なんかそこに住んでいるように感じられたわけ」
「リヤカーが店であり、家であると」
「うん。よく分からないけどね。確認してないからさ」
　鈴木さんは本当にいろんなものをよく見ている。そしてそこからきちんとインスピレーションを受ける。
「で、ピンと来たわけよ」
「はい」
「うちにはリヤカーがあるじゃないですか、坂口さん」
「ありますね。一時撤去用に」

「で、そこに家を作ろうかなと」
「本当にモバイルハウスを作るってわけですね」
「空き缶なんかどこにでもあるからね」
「鈴木さんはどこでも仕事できますよ」
「そして、垂れ幕を張ろうかなと」
「はい？」
「日本一周敢行中！！！」
「なるほど！」
「これでもうホームレスとか、そういう問題じゃなくなるだろ」
「なくなりますね。挑戦している人になりますもんね」
「そうやって、ミーコと旅しながら日本のすべてを回るっていうのはいいだろうなーと思っているわけですよ」
「すごいかもしれません、それは」
「それが私の夢です。早く、隅田川を追い出されないかなーとかも思ってんだよ」
「追い出されたら、その旅が始められるわけですね」
「そういうこと。追い出されるまではここにいちゃうと思うんだよ」
　価値観を転換しようとしている。路上生活者から、リヤカー日本一周の挑戦者へと。鈴木さんの思考は永遠に止まらないだろう。
　鈴木さんの夢を聞いて、僕の方がワクワクしてしまった。本物の都市の遊牧民へと変へん貌ぼうを遂げようとしているのかもしれない。
　鈴木さんは、自分の家、生活、行動すべてを一体化しようとしているのだ。
「なんかよく分かんないんですけど、これは大変なことが起こりそうな気がするんですよね」
　僕は変な確信があった。
「なんか、私もね、どんどん頭がえていってんだよね」
　そうである。変化は鈴木さんにも訪れていた。知らない間に鈴木さんの頭の回転はどんどんハイスピードになっていたのであった。僕と同年代の人と熱く議論するよりも数倍速い、そして濃密な議論がこの

ブルーの民家の中では繰り広げられていた。笑いに包まれたクリエイティブな瞬間が次々に僕と鈴木さんの間に飛び込んできた。ただの取材なんかじゃなくなっていた。頭の中で旅をしてきたようだった。
　僕にとって鈴木さんの家は、隅田川のパルテノン神殿だ。いや、千せん利のり休きゅうの作った茶室「待たい庵あん」なのかもしれない。それぐらいそこでは熱烈で静かで混こん沌とんとした思考が飛び散っていたのだ。
「この前までアルミ缶をくれていたマンションの清掃員が社長命令で缶をあげられなくなったと言ってきたよ」
「世知辛いですね」
「いやいや坂口さん。捨てる神あれば、拾う神ありよ」
　なんでこの人はちっともへこたれないのか。
「その日、ちっとも拾えなかったなーと落ち込んで帰ろうとした時にね……」
　やはりまた何かが起きたんですね。
「最後のゴミ捨て場で缶を拾っていたら、１人の老人が出てきてね、いつも頑張っているねと声をかけてくれたんだよ」
「奇跡が常に起こりますね、鈴木さんの周りでは」
「そうなんだよなー、本当に。それで、その人は喫茶店のマスターで店の前のゴミ捨て場でいつも拾っているのを見ていたらしいんだよ。それで仕事ぶりを見て感心していたらしい。それで、空き缶をオレのために取っておいたと言うんだよ。全部で８袋もくれたよ。マンション駄目になったのに、取り返したよ。不思議だね、本当に」
　僕はそれが本当の世界の姿だと思った。本当の世界は人と人が面白くつながるものである。
「そして、その人は内緒だよと言って、缶ビール１本くれたんだよ。うまかったね」
　偶然は必然で、ピンチはチャンスである。
「いやぁ、生きるってのは本当に面白いよ」
　鈴木さんは笑って僕にそう言った。

そして、いつもの宝焼酎で鈴木さん、みっちゃん、僕とで乾杯した。

おわりに

　久しぶりに隅すみ田だ川がわを訪ねた。家の前で声をかけると、いつものようにすがすがしい返事が部屋の中から聞こえて、少し赤い顔をした鈴すず木きさんが出てきた。鈴木さんは、これまたいつものようにちょっと待ってねと言いながら部屋を綺き麗れいに整理整せい頓とんした後、宴会用のテーブルを出して僕を家の中へ入れてくれた。
　先日、書き終えた原稿をぜひ読んでくれと渡していて、今日は感想を聞きに来たのだ。鈴木さんはその原稿の分量にビックリしながら、ちょっとこれは読めないかもなと言っていたが、なんと全部読み切っていた。読み始めたら面白くなって、３日間かけて読み終わったらしい。鈴木さんは盛り上がっていた。これ以上の嬉うれしいことはない。あとはこの本に他ほかからどんな反応が来ようと受け止められると思った。
　鈴木さんは続けて、自分の人生はまだまだこれからヨ、まだ始まってもいないヨ、と驚くべき言葉を口にした。今までろくに本など読んでこなかった人間が原稿用紙３００枚を書き下ろしてしまったのは、この彼の放つ熱によるものだ。
　書くことなどあるのだろうかと不安な中で始まった執筆も、この熱に踊りに踊らされ、まるで自動筆記のように進んでいった。文体も構成もほとんど無意識状態で書いたが、それがあの隅田川の一角で日夜繰り広げられていた会話の臨場感であると伝えたい。

　隅田川に家を建てるという行為は許されているものではない。しかし鈴木さんの家を調べれば調べるほど、なぜこの生活が許されず、周りには巨大な建造物が建っていくのか、正直分からなくなっていった。なんだろう、この矛盾は。どうにかならんものか。新しい視点は

ありえないのか。
　僕としての提案は、ホームレスという枠から鈴木さんの生活に焦点を当てるのではなく、唯一無二の１人の人間の生活として捉とらえてみるということだ。この本に書いてきた鈴木さんの生活には多様性が溢あふれている。それは僕たち１人１人にも当てはまるはずだ。全体だけで把握をせず細部も常に自分の目で見て確認しないと事実は分からない。

　現在、僕はフランスのサン・ナザールという小さな港町に滞在し、美術館で行われる展覧会の準備に追われている。僕の仕事の状況も、今まで以上にいくつもの要素が混じり合い絡み合い、まさに混こん沌とんとしている。この本を書き終わった今も、自分の職業を的確に言い表す言葉は見つからない。
　しかし、もうどうでもいい。なぜなら今回、鈴木さんとの間で巻き起こった熱は、自分の中でこれまで続いてきた衝動と連続性のあるものだったからだ。これがまさに僕が一番伝えたいことなのだ。

　最後に、担当編集者である増渕有氏、鈴木さんの記事を書くきっかけを与えてくれた朝日新聞社の矢部万紀子氏、そしてとにかくいつも話をしてくれた鈴木正三氏、みっちゃんに深く感謝いたします。本当にありがとうございました。

　２００７年11月　サン・ナザールにて
坂口恭平

文庫版あとがき

　鈴木さんとみっちゃんは今も隅田川に住んでいる。
　家の姿も生活の形も当時と何ら変わりがない。しかし、家の細部をよく見ると、部品が新しくなっている。アルミ缶をもらう契約者の数も増えている。
　鈴木さんの生き方自体が、実は人体の細胞のように常に新しく生まれ変わっているのだ。
　その後も、僕は20年もの間、独自の生活様式を発明し、自給自足の生活を続けている多摩川のロビンソン・クルーソーや、家もお金も仕事も何も持たずただ野原に座って暮らしている代々木公園の禅僧や、ゴミを集めてきては自らの手で服をコムデギャルソンばりに創作し、動物とコミュニケーションをするために絵を描き続けている大久保駅のゴッホなど、東京という社会システムの中で暮らしながらも、創造性を駆使することで、頭の中だけ逸脱した生き方を実践している開拓者に出会ってきた。
　そんな先人たちから無償で与えられた贈与を、今度は僕も実践として返していかないといけないと思っている。
　僕は今、家を建てている。さすがに０円ハウスではできなかったが２万６千円で二畳間の一戸建てが完成した。10平米以下であれば実は建築士の免許がなくても誰でも建てることができるという法律を利用している。しかも、車輪が付いているので可動式のモバイルハウスである。車輪が付いていれば法規的には建築物ではなく車両になる。ということで、値段が高過ぎる宅地なんて無視して、安く借りることができる駐車場に置くことができるのだ。
　この経験を踏まえ、ゆくゆくは市民農園に畑付きのモバイルハウスを建てる計画まで立てている。そうすれば月額１０００円ほどで人は

家を持てるようになる。夢物語のような話だが、それが実現すれば
ホームレスという概念すらなくなるのではないかと僕は思っている。
　鈴木さんはホームレスではなく、自分が安心して暮らせる「ホー
ム」を持っている。
　対して僕たちは家に住んでいるのかもしれないが、実は「ホームレ
ス」なのかもしれない。
　この問いに一つの答えを示すためにも、とにかく僕は実践し続けな
ければいけないと強く思う。

「ギブ＆ギブ＆ギブでね」
　という鈴木さんの言葉が頭の中に鳴り響いている。

　２０１１年２月
坂口恭平

解説　ブルーシートからの生放送

赤瀬川原平

　はじめは写真集だった。

「０円ハウス」というタイトルの写真集が送られてきた。

　ほぼ正方形で、表紙はブルー。

　ブルーだけど、全体にキャンバス地のような感じがあって、ちょっと汚れているのでこすってみたが、落ちない。

　それも印刷らしい。

　著者はと見ると、知らない人だ。

　何だろうと表紙をめくると、町でよく見かけるホームレスの物件写真があった。

　あ、よく撮ったなと思った。

　自分もカメラを持って路上観察をしながら、ときどき見かける。

　すごく気になる。

　カメラで撮りたいと思うが、撮りにくい。

　撮ったらわるいと思う。

　でも撮りたい。

　気になる。

　だから撮りはしないけれど、横目でじっと見て通っていた。

　何故気になるのかというと、それぞれにまったくオリジナルの造り方があるからだ。

　中に人が住んでいるようなので気になるが、それを別にすれば、それぞれが作品である。

　どれも工夫をこらしているようで、そのこらし方にもいろいろあって、興味をそそられる。

　だから撮りたくて撮れない禁断の被写体。

　と思っていたものが、この写真集にはずらずらと載っている。

え、あれを実際に撮って歩いたのかと、驚いた。
　こうして見ると、それぞれのホームにじつに個性がある。
　路上で拾った材料を工夫して造ったのだろうが、これは写真だから落着いて観察できる。
　ホームはまさにさまざまだ。
　きっちり四角にまとめたもの。
　あるいは揃えたりせずに、必要に応じてただいろいろ寄せ集めたようなもの。
　ベニヤ板を使って、格子入りの窓を造ったのもある。
　ブルーシートだけでまとめたもの。
　拾った掛時計が、三つも四つも飾ってあるもの。
　犬小屋までついて、犬がちゃんと寝ているものもある。
　とにかく見ていて飽きない。
　本の帯にはそのタイプの例が並ぶ。
　走子家／玄関が滑り台の家／朝顔の塀／土管の家／犬との二世帯住宅／流線型の家／冷蔵庫ハウス／階段に建つ家／河原の集合住宅／斜めの家／庭付き一戸建て猫の家／持ち運びできる家……すべて総工費０円！
　表紙のブルーは、ブルーシートそのものだった。
　だからわずかにあった汚れも、その実物だからこそのものだった。
　写真はたまにピンボケがあったりするものの、この力業は凄い。
　何だか興味はつのるが避けているもの。
　でも避けるからよけい興味はふくらむ。
　ふくらむけどやっぱり避ける。
　ところがこの著者は、そういう逡巡をあっさり超えているのだ。
　たぶんこれだけ丹念に撮っているからには、ただ外から見るのではなく、中に飛び込み、住人と言葉を交わしているのだろう。
　ホームレスというわからないものへの一線を超えて、あっさりとその中へダイビングしている。
　たぶん俊敏なフットワークの人なのだろう。

それにしても凄いと思った。

いつも横目で見ている、その横目の限界のストッパーを外して、正面で見ている。

そのストッパーを外す工夫とは、どんなものなのだろうか。

それともそんなストッパーなんて、もともとない人なのか。

とにかく自分にとってはそんな衝撃があった。

そして何年かたち、また送られてきたのがこの『ＴＯＫＹＯ　０円ハウス ０円生活』である。

ぱらっと開くと活字の本で、そうか、いよいよ中に潜り込んでの報告なのかと、その行動力に驚いた。

本のはじめの方には写真もいくつかあり、メモ的に描いた図面もあって、そうか、この人は研究力の人だったんだと納得した。

巻末に顔写真が載っていて、若い。

やはりこういう研究は、エネルギーあってのことだ。

自分は若いときでもそういう怖いもの知らずのエネルギーはなかったが、この人なら濁った沼地にも飛び込んでぐんぐん潜っていけそうだ。

文章は軽快である。

軽快だというのは、とにかく事実が次々と並び、難しげな理屈がいっさい出てこないこと。

事実や現実というものには、読者は無条件で入っていける。

だから当然話は軽快になってくる。

しかも大衆が、みんな知っていながら知らないという謎の世界。

知っているといっても、おそらくみんな横目で見ているだけで、できれば見ないようにしている世界だ。

見てしまったら厄介だという恐れも抱いている。

たぶん政治的にも解決のつかない厄介な問題である。

でもそんなこととは別に、この著者には何よりも強力な好奇心がある。

しかも好奇心に発する研究心がある。

そして行動力。

ただのぞくだけではなくて、その先までもう少し行くような行動力だ。

これまでにもホームレスの報告はあったのかもしれないが、あったとしてもそれはたぶん政治的な方向づけをもった上でのものだろうと思う。

その場合は好奇心など論外のものとして、外されているだろう。

その好奇心を、著者は百パーセント装備している。

読んでいくとそれは少年時代からのもののようで、やはりここに来るべくして来ていることがわかる。

どうもその行動力こそが、天性のものらしい。

人生のことを考えれば、みんな生きていくために、自分の場所を保守している。

その自分の保守する場所から見ている限り、ホームレスの世界は横目以上には見えないものだ。

といってその自分の保守する場所を出ていくのは難しいことだ。

自分の保守する場所が爆発でもしない限りは、横目でしか見られない。

ところがこの著者は、その自分の保守する場所が、はじめから移動用にできているらしい。

学生時代の「移住ライダー」の写真があった。バイクに小屋を載せて、意気洋々と跨っている。

本文は、冒頭でまずブルーシートの中をのぞくと、出てきた人が「鈴木です」とあっさり名前をいうところから、あっという間に目が見ひらかれる。

月に一度の国交省の点検では、ホームを分解して堤防の内側に上げないといけない。

ここでの役人との暗黙の了解も、なるほどだ。

さらにここでは、ホームが家というより愛用の道具のように感じられて、鈴木さんの人生そのものが軽快である。

後に対談したとき、著者は、自分の家の部材をすべて、表から裏まで知り尽しているのは、この人たちしかいない、と話していたが、ここに建築家だからこその感嘆符がつくのを感じた。

坂口恭平（さかぐち・きょうへい）

１９７８年、熊本県生まれ。建築家／作家。２００１年、早稲田大学理工学部建築学科卒業。２００４年、日本の路上生活者の住居を収めた写真集『０円ハウス』を刊行。他の著書に『隅田川のエジソン』『ＴＯＫＹＯ一坪遺産』『ゼロから始める都市型狩猟採集生活』などがある。

本書は二〇〇八年一月、単行本として大和書房より刊行されました。